

---

# 笑う子も泣く公爵令嬢

灯星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑う子も泣く公爵令嬢

### 【Nコード】

N4587N

### 【作者名】

灯星

### 【あらすじ】

ある国の見た目麗しい評判の公爵令嬢サラサ。しかし、その美しいいけどきつすぎる外見のせいで、男性には秋波を送られ女性には遠巻きに見られる毎日。それどころか大の子供好きなのに、子供には顔をみるだけで泣かれる始末。懐いてくれるのは乳児から世話をした甥っ子のみで、その甥っ子を溺愛していた。そんな毎日にそれなりに満足していたのに17歳の時に14歳の王子に会ってから周りが騒がしくなる。わたくしはジュリアン（甥っ子）とラブラブの毎日を送りたいだけなのよーと叫ぶサラサのお話です。



# 1・わたくしはメディーサではございません（前書き）

つい、ラブコメ色が強い話を書きたくて『女神の憂鬱』が終わってないのに書き始めてしまいました。

こちらはそれほど頻繁に更新できませんが、よかったらおつきあいください。

裏設定ですが『女神の憂鬱』の世界の未来の人間界についてしています。だから名前ぐらいは出てくるかもしれません。

## 1・わたくしはメディーサではございません

ああ、愛しのジュリアン。

もう寝ているでしょうね。わたくしの天使は。

金色のくるつと巻かれた短い髪。どんどん大きくなる紅葉のような手。思わずかぶりつきたくなるような小さな足。零れ落ちそうになるほど大きな碧の眼。

あのすべすべでぶつくらとした頬におやすみのキスを今日もしてあげたいけど、こんなところに連れてこられたので今日は無理かも。でも、帰ったら可愛い寝顔にそっとキスするんだから。たとえば日にちが変わっていてもね。

おっと考えているだけでよだれが出てきそうだ。

サラサは扇で口元を隠す。

そうすると目の前でピーチクパーチク音をだしていた孔雀がボリユームを上げてきた。

「ちょっと！だまってないでなんとかおっしゃったらいかが！？」

孔雀もとい、派手なドレスを着た令嬢は顔を真っ赤にしてこちらを見ている。

パチン。

サラサは広げていた扇をわざと音を立たせながら閉じ、彼女に向き合うことにした。

「つまり、あなたはわたくしがローラさんの婚約者に色目を使ったから、婚約が破棄になってしまったとおっしゃりたいのですね？」

孔雀令嬢の言い分を要約して確認する。彼女のすぐ後ろではおとなしめの可愛らしさをウリにしているような少女が、ハンカチを握り締めて眼の上に持つてきている。

だが、まったく化粧も落ちずに眼もはれていない。だからハンカチも濡れてないようだ。

ローラさん。嘔泣きするならもう少し上手くやりなさいよ。

「そうよ！あなたのせいよ！」

そんなことも分からずなのか、分かっててなのか孔雀令嬢は化粧ですどくなつた眼をもっと鋭くさせながらサラサを睨んでいる。

「婚約者の名前はダイアン様とおっしゃったかしら。わたくしそのような方覚えてもございません。だからそのようにおっしゃられても困りますわ」

サラサは閉じた扇を口元に当てながら、ここで彼女たちに微笑みを見せる。

それに今までずっとこちらを非難していた令嬢も嘔泣きをしていたローラとかいう少女も、石化したように固まる。

ルージュで縁取られた大きな口元を吊り上げて微笑んでいるのだが、鋭い切れ長の真紅の瞳では彼女たちを凝視していた。

この笑い方をすると、間違えない初対面の人は一瞬固まってくるのだ。

そもそも幼い子たちはきちんと笑っても大泣きで逃げていくのだが……。

悲しい事実を思い出して心の中で落ち込んでしまう。

ひどいよね……。ただ仲良くしたいのに。

いいわ。わたしにはジュリアンがいるだから。

最愛の甥っ子の可愛い姿を思い出しながら自分で立ち直る。

サラサはそうしていまだに固まっている二人の少女にはもはや用はなく、ごきげんようとだけ言いながらその場を立ち去ることに成功した。

「こ・・・こわかった・・・」

立ち去った後、二人の少女がその場でへたり込んでいたのを数人が目撃していた。

ここは王宮の舞踏会である。何百と言う貴族たちがダンスや談笑を楽しんでいる。

その中で、一際目を引く者がいた。

1人の女性である。数人の男性が彼女を取り囲んでなにかと話しかけている。

それに対して彼女は扇を顔元で仰ぎながら何も言わずに聞いている。

その場にいる者すべてが彼女のことを知っていた。

レッドスター。

彼女の社交界でのあだ名である。公爵令嬢であるのだが、その肩書き以上にその通称名がでてくる。

その姿はまさに大輪の赤薔薇のように気品あふれ、妖艶と言つ言葉が一番当てはまるほど素晴らしい容姿をしている。

黒耀石のように光り輝く波打つ黒髪が彼女の豊満な胸元まで流れ

ている。厚めのオフホワイトの生地ドレスが身体のラインに沿っているために、見事なくびれを作っていて彼女がどれだけ細かいを現していた。女性にしては長身であり腰からウエーブ状にひろがるレースのドレスの生地が、他の誰よりも長く感じられる。

鋭く切れ長の真紅の瞳に、真っ赤に塗られたすこし大き目の形良い口元はどこか挑戦的で、少しでも自信のある男性であれば彼女に声をかけずにいられなくさせている。

その彼女がどんな気持ちでそこに立っているのか知っている者はごくごくわずかである。

> i 1 2 2 3 5 — 1 7 2 0

<



## 1・わたくしはメディーサではございません（後書き）

悪役顔のお嬢様が主人公って書いてみたくってはじめてました。

昔の漫画の主人公の敵役をイメージしています。

中身は違っけどその外見のせいで散々周りは誤解しまくっています。

汀雲さんからサラサのすばらしいイラストを頂きました。この流し眼がなんとも言えません。イメージ通りです。本当にうれしくて見た瞬間わおっと叫んでしまいました。

この幸福を皆さんにも味わってほしいので挿絵として掲載させてもらうことにしました。

## 2・口説くのが趣味な幼なじみ

やっぱり1人で外に出るものではないわね。

先ほどのトラブルを思い出してサラサはふうくと、ため息を扇で隠しながらつく。

舞踏会に戻った途端に人が群がってくる。

なぜ、こんなところで愛想笑いをしなくてはいけないのかしら。

大好きな子供たちはこんな夜の会に参加してないし、可愛い女の子たちは遠巻きになんとも言えない目つきで見ているだけだし、寄ってくるのは自分の外見にしか興味のない男ばかり。

これだから舞踏会なんか参加したくなかったのよ。

そんなことを考えていると熱心にこちらに話しかけていた男性がいったん話をやめて、サラサの片手に触れてくる。

「サラサ嬢。どうか私と一曲踊ってください」

またですか。うんざりしながら考えてきた言い訳を言う。本日25回目だ。

「まことに申し訳ございません。先日足を痛めてしまいました・・・立っている程度なら大丈夫なのですがさすがにダンスいたしますと、貴方様にご迷惑をおかけしてしまうことになりますので」

残念であると思っている演技をしながら、その男性を見上げる。

この顔が一番、効果観面こうかかんめんなのだ。

案の定、誘った貴族は憂いを浮かんだ表情でこちらを見る令嬢に、年甲斐もなく紅く頬を染めている。

あー。もういやだ。でもこの場から出たらさっきの二の舞か、だれかが追っかけてきてうつとうしいことになるし……。

今までの経験上、1人で外に出たりすると必ずといっていいほど何かしらのトラブルが発生するのだ。

お兄様がデイルンがいないかしら？

兄と幼なじみを探す。すぐに長身の兄は見つけることが出来た。自分と同じ黒髪をオールバックに整えている。碧色の切れ長の瞳が楽しそうに輝いて、数人の少し年配の男性たちと談話していた。

仕事の話なら邪魔するわけにはいかないわね。

もう少し周りを見渡して幼なじみの青年を見つける。彼も長身なので見つけるのはたやすい。長身であるが細身でどちらかといえば、武官と言うより文官のような身体つきだ。それに加えて肩にかかるほど長いストレートの銀色の髪であり、顔立ちも兄には負けるがかなり整っている。で吟遊詩人のようである。だがその外見に反してこの国で有数の剣の使い手として、それなりに名が通っているのだ。その彼はだれかと談話するわけでもなく、深い青色の瞳を細めながらこちらを楽しそうに見物していた。

見ているなら助けなさいよ！

サラサはそんな幼なじみに思わず殺気を覚える。昔から彼は悪趣味でサラサが困っている姿が好きなのか、こうしてよく見ているの

だ。

「わたくし、ディラン様にお話がございますのでここで失礼いたします。では、ごきげんよう」

わざと幼なじみの名前を出して取り巻きから逃れる。彼がそれでこの人たちに睨まれるなら、すこしは気が晴れるってものだ。

踊っている人たちの邪魔にならないよう注意しながら、幼なじみに近づく。なるほど、ここに彼が1人でいるわけだ。おどる人がすぐ近くにいたために、中々ここには人が集まらないようになっていた。こんな穴場を見つけるとは相変わらず抜け目がない。

「こら！見ているなら助けなさいよ」

彼にしか聞こえない声でそう言いながら彼の隣に何とか入り込み、同じように壁に背を向ける。

二人で並んでいる状態だ。

「ああ、サラサ。ようやく僕のところに来てくれたんだね。たしかに君に群がる男どもをただ見ているのは僕にはとても苦痛だけど、こうして僕を必要としていると、君にわかってもらうためにも必要だったんだよ」

彼は楽しそうにサラサを口説くようなことを口にする。だがそれにはサラサは一向に表情を変えることなく言い返した。

「そんなうそはどうでもいいわよ。どうせ面白がってただけでしょ？」

小さいころから同じようなことを言われているだけに、それがた

だの戯言にしか聞こえない。サラサはある意味、ディラン特有のコミュニケーションの方法なのかと諦めていた。

だから彼が本当に本気で言っているんだけど・・・と言う言葉を右から左に聞き流す。

「それよりもそろそろ私をここから家に連れて帰ってよ」

サラサはさつさと用件を言うことにした。ここから家に1人では帰れず連れて帰ってもらえとしたり、兄がこの幼なじみだけだ。でも兄は話し込んでいたので遅くなりそうだ。

「連れて帰ってか。サラサとしては中々色っぽいことを言ってくれるね。僕の家にはぜひとも招待したいものだよ。でもそんなことするとガイヤに絞め殺されるだろうし、家に送るにしても無断にするとあとでうるさいからなあ」

「お兄様が良いつて言ってくれたら連れて帰ってくれるのね。じゃあ伝えてくるわ」

この退屈な舞踏会を退出できてジュリアンのところに帰れるなら、一刻も早く許可を求めることにした。兄の方向を見ると少し取り囲んでいた人が減っていた。

よし、チャンスだ。

「一緒に行くよ。そうしないと再び囲まれてしまっただろうしね」

そう言われて軽く手を繋いでエスコートしてくれる。まるで踊りながらの様に人かわしながら、目的の兄の近くまで来ることに成功した。

### 3・幼なじみvs兄

「お話中失礼いたします」

サラサより先に隣のディランが、年配の男性と会話をしている兄に声をかける。

「おお！ディラン・ウイデリーではないか。このような処に君が参加するとは本当に珍しい！」

兄よりも年配ですこし小太りの男性のほうでディランに声をかけてきた。話を中断されて気を悪くするどころか大歓迎してくれているようだ。いい人でよかった。

「お久しぶりです。フィッツチャー伯爵殿。不精の私が参加するのはひとえに愛しい方をこうしてエスコートするためでございます」

ディランはそう言いながらサラサの姿が見えるように、年配の男性の前の場所からすこし横にずれる。そこにいたサラサの姿をみてフィッツチャー伯爵と呼ばれた男性は大げさなほどため息交じりの歓声を小さくあげた。

「これはこれは！わが国が誇る宝石の一つのレッドスターではないか。ガイヤ殿のそばにいて正解だったな」

そう言いながらサラサの手を取り軽く口付けをしてくる。紳士がこのような場で女性に対して行う礼儀の一つだ。

「フィッツチャー伯爵様。サラサ・レダ・アルンバルトでございます。」

話の途中で割り込むような無粋な真似をしまい申し訳ございません」

サラサは扇を口元に当てながら軽く頭を下げた。

「いやいや。逆にその勇氣に心から感謝を述べたいくらいだよ。こうして貴女と言葉を交わす一時を得ることができたのだからね」

本当にうれしそうに伯爵はサラサの姿を見ている。めったにこうした集まりに顔を出さないがその美貌で知らない者がいないほど有名な公爵令嬢が、自分に話しかけていることがうれしいのだろう。

だが、サラサの危機管理は今までの経験で格段にアップしているために、このままこの伯爵と話しつづけることは周りの者にいらない噂の種を提供することに気が付いていた。

ただでさえ、この幼馴染みがだれの前でも冗談で口説きまくるので、純情で有能な青年を弄ぶ悪女のようにまわりの令嬢に陰口を言われているのに……。サラサにしたらデイランのどこが純情なのだと大声で叫びたい。弄んでいるのは幼馴染みのほうだと断言できる。

「お兄様。申し訳ございませんが、このあたりで退出させて頂いてもよろしいでしょうか？」

サラサは伯爵の言葉を小さな笑みでかわしながら、今まで沈黙を保っていた黒髪の長身の男性にそもその本題を言う。

「悪いがもう少し私はこの場に居なければいけません。だからできれば、待つて頂きたいのですが……」

それはサラサも十分分かっていて。でも、もうこれ以上ここにい

て上辺だけ見るような男性に囲まれたくもないし、そのせいで令嬢たちに陰口を叩かれたくもない。さきほどみたいなトラブルもごめんだ。だから兄の親友でもある幼馴染みをお願いしたのだ。サラサがそのことを言おうする前に、その本人が助太刀をしてくれる。

「ああ、ガイヤ。僕が送って行くよ」

ディランが立候補すると言う意思をこめるように右手をあげる。それに対して、兄のガイヤはなぜかわずかに眉間にしわを寄せてから大きく一つため息を吐いた。

「仕方ないですね。じゃあお願いします。すみませんが我が屋敷まで真っ直ぐに送ってやっていただけますか？」

ガイヤがディランの顔を見ながらなぜか真っ直ぐの言葉を強調するように言う。ディランはディランで、

「お任せください、兄上」

と、わざとらしくサラサの右手を取り軽く唇をよせながら言った。それに対してガイヤは眉間のしわをもっと寄せながら、サラサの身を軽く引き寄せて彼女にだけ聞こえる声で小さくつぶやく。

「サラサ。何があっても絶対に寄り道してはなりませんよ。帰ったらディランにお茶を振る舞う必要ありません。いいですね？」

「もちろんですわ、お兄様。ジュリアンが待っていますもの」

いとしいジュリアンの寝顔にそっとキスするために帰るのに、寄り道やディランとお茶などするはずもない。当然とばかりにサラサは兄に大きく頷く。



その答えに満足したようでガイアの眉間のしわがなくなり、デイルンとふたりでこの退屈な舞踏会を退出することに承諾してくれた。やった。これで、ジュリアンのところに帰れる。

思わず心からの微笑みを浮かべてしまうと、一瞬サラサのまわりにいる兄と幼馴染み以外の人々の動きが止まった。

ああ、またやってしまった。

内心ではあせりつつ、ゆっくりと扇で口元を隠す。

サラサが全開で微笑みをする、いつもこうなるのだ。

そんなに私の微笑みはおそろしいものなのかしら・・・とついサラサは思ってしまう。

「では、ごきげんよう」

サラサは兄と未だに固まっているフィッチャー伯爵に、お決まりの去る時の挨拶をしながらその場から立ち去ることにした。当然のようにデイルンはサラサの手を取り、エスコートしてくれる。

こうして王宮の舞踏会フロアから二人で抜け出ることにした。しばらくしてからガイアに、フィッチャー伯爵が顔を紅潮させながらこうつぶやく。

「まさか、噂に名高い『レッドスターの微笑み』をこの眼にすることができるとは思いもしなかったですよ。いやあ、噂にたがわずなかなかの威力ですね。あのような魅力あふれる妹君をお持ちで、うらやましい限りです」

「いえいえ。ただの世間知らずで、気苦労が絶えないですよ」

伯爵の言葉にかなり本心からガイアは否定したが、謙遜にしか受け取ってもらえずにいた。



### 3・幼なじみvs兄（後書き）

今回は三人称でがんばっています。しかしついくせで一人称にな  
って書きなおしてしまっています。

#### 4・お節介は身を滅ぼします。

「さて、サラサ。僕は今から馬車の手配をしてくるけどここで待ってられる？」

舞踏会会場から出て、宮廷の出口近くの廊下でわざわざディランは聞いてくる。

あえて会場から出口への道はずして、入り組んで誰もいないこの場所を彼が選んだことをサラサは分かっていた。

ディラン的には余計な虫がサラサに近寄せないためだ。サラサとしてもこれ以上トラブルに巻き込まれるのは勘弁願いたいので、異論することなく素直に頷く。

「すぐに戻ってくるから大人しくまっていてね」

そう言うのと、従者の詰め所がある方向に彼は向かっていった。

のちにディランはここにサラサを置いて行った自分に対して深く後悔するのだが、この時は最善の虫対策だと疑わずにいた。

これで帰れる！それに一度こうして参加したんだから、しばらくは厄介な舞踏会やパーティーを欠席してもお父様もお兄様も許してくれるはずだ。

サラサはそんなことを考えながら思わず緩んでしまった口元を扇で隠す。

その時だった。

ガサツ。

舞踏会の耳障りな・・・もとい、優雅な音楽も聞こえず静かだったこの場に突如起きた音。サラサは思わず反応して身を強張らせる。な、なに？

ゆつくりと音の鳴る方を振りかえる。だが、その方向にあるのは生い茂った庭園の草木しかない。

ガサガサツ。

気のせいだと期待したサラサをあざ笑うかのように今度は長めに音がする。

動物かしら？

そう思つて音の鳴る方の草を軽くかき分ける。そこは軽くかき分けることができ、小さな通り穴になっていた。

これは、自然にできた道ではなくだれかが人工的につくった隠れ道だわ。

サラサは好奇心からそこを通りたい気持ちになるが、軽装をしているならともかくひらひらのボリウムたつぷりのドレスを来てこんな穴に入れるわけがない。

でも、どんな感じなのかだけは見たくてその穴に軽く頭を突っ込んだ。

「え！」

思いがけないモノを見てしまつて瞬時に頭を引つ込める。

「ばれてしまいましたか。申し訳ございません、レディ」

そう言いながらその草木の穴から見てしまったモノが出てくる。

そこに居たのは10代半ばぐらいの金色の髪の少年であった。美しい金色の髪は襟足辺りで真っ直ぐに切りそろえられた髪型をしている。服装はずいぶん軽装でそれこそ平民のようなカツコをしているが、サラサは貴族の子であることを見抜いていた。

「い、いえ。わたくしのほうこそいきなり顔を出してしまつてすみません」

人がいるとは思わなかったからの行動であつて、いきなり草の間に頭を突っ込むのは上級階級の令嬢として決して褒められた行動ではないし、普通ならしないだろう。とは言つてもサラサの場合、10回同じ場面があつたとしたら10回とも同じ行動を取っているが、それでも表面上は謝罪の言葉を発する。

「このような場所で如何なされましたか？ 舞踏会への道に迷われましたか？」

それはこちらのセリフだと内心で思う。ずっとその場にいたのであればディランとの会話も聞いているだろうから、こちらがここにいる理由など分かり切つたものだろう。

それなのに、目の前の少年はあえて聞いてくるのだ。その真意はなにか。少し考えてすぐに思いつく。

彼がここにいる訳や素性をこちらから聞かないように先手を打っているのだ。

こんな社交界にもデビューしてないような少年がそういう言葉の攻防を行っていることに、彼の取り巻く環境が普通でないように感じる。

……詮索はやめておきましょう。触らぬ神にたたり無しですわ。

サラサは目の前の少年のグリーンにもブラウンにも見えるヘーゼ

ルの大きな瞳を見ながらそう決意した。とても礼儀正しい言葉とあどけない表情をしていながら、その瞳はまったく笑っていない。

社交界で親しくない者に接する兄さまと同じ感じた。

それだけにこの少年の油断ならない内面を瞬時に悟ったのだ。事なかれ主義であるサラサには危険予測の能力が備わっていた。

だから、あえて何もわかっていない令嬢を装い聞かれるがままにこたえる。

「いえ。もうお暇させていただこうと馬車を待っているところですよ。わたくし、人が多いところは苦手ですのでこの静かな廊下で待たせて頂いているのです」

「それは失礼いたしました。私はすぐにこの場から退散いたしますので、せつかくの出会いということで挨拶だけさせていただきます」

そう言ってサラサの手をとり軽く唇を寄せる。うまい対処方法だ。そう思っただんじて受けていたが、サラサは彼の手の甲に一本の切り傷があるのを見てしまった。

引っ込めようとしていた彼の手を思わず手に取って、その傷をじっくり見る。

思ったより傷は深そうで血がにじんでる。おそらく隠れていた木に引っ掛かってしまったのだろう。本当は水で消毒して薬を塗りたいのだけど、生憎ここにはない。

胸もとに隠していたレースのハンカチを取り出してすばやく結ぶ。うん。これなら部屋に戻るまでは大丈夫かな？

その出来栄えに何とか自分の中で及第点を与えながら顔を上げると、あっけに取られたという感じで少年はこちらを見ている。

あ、つい手を出してしまった。でもこんな傷は見過ごせないわ。

自分の性分を思い出しながら心の中でため息を吐く。外見から想像もつかないが、サラサは生粋の世話焼きである。だからこそ、母親のいない甥を自分の子のように可愛がっているのだ。そんな彼女

が自分より若い少年の傷を見てしまつて放置しておくことなど不可能だ。

「このような小さな傷であつても化膿して大変なことになる場合がございます。ですからお早い目にご自分の部屋にお戻りになつて手当てをしてくださいね」

サラサはそう言うつと少年の手を離そうとするが、逆に逃がさないとはかりに少年のほうからサラサの手を握つてきた。

「失礼ですが、貴女は私をご存じなのですか？」

少年のほうからそう言われて自分の失言に気がつく。

彼の素性を悟っていることを暗に言つてしまつていた。この王宮に部屋があるということは王族でしかない。私の推測通りなら彼は王族だ。いまこの年齢の王族と言えば一人しかいない。

ああ……。やつてしまった。

せつかく知らないふりして関わりないようにしようと思つていたのに。

だから最後の悪あがきだと知りながらこう提案する。

「お互いに知らない者同士というほうがよろしいかと。このような場所でお会いできたことを私は決して他言いたしませんので」

王子である彼がここで身を潜めているのには訳があるのだろう。理由などは知りたくもないので想像もしないけど。

だからこそ、私は見なかったことにすると言つ意味でそう告げた。だが、彼の反応は期待を裏切るものだった。一瞬で彼のもつ雰囲気かわる。



「ありがとう。そなたのような令嬢もいるんだな。名前を知りたいが、そなたが俺を悟ってくれたように俺もそなたの名前を自分で見つけるでしょう」

思わず、そんな必要ありませんと言いそうになって寸で思いとどまる。

もうすでにただの貴公子の仮面を外してしまっていて口調が王族のものになっている。表情も面白いモノをみつけたと言う感じでものすごく楽しそうだ。どこか私をかまい倒す幼馴染みに通じるものがある。

やっぱりこの王子、本性が兄さまやディランと同類で性悪だ。さきほどの仮面はあどけない純真な少年だったのに……。

やばい。

身の危険を感じて思わず身体をびくつと震わせる。

それに対して少年はより一層口元を上げて笑みを深める。だが、その笑みはサラサには悪魔の微笑みにしか見えない。

「一見で俺の素性と性格を見破るとはおもしろい。まあ、楽しみに待っている」

そう言うとは先ほどとは比べ物にならないほど強引にサラサの手を引き、もう一度手の甲に口づけをする。

ま、待ってるってなにをですか！？

そう聞こう顔をあげた時には、少年はサラサに背を向けてディランが消えた方向と逆へ歩いて去って行った。

いやあ。

心の中でだけサラサはしばらく悲鳴をあげていた。

#### 4・お節介は身を滅ぼします。（後書き）

王子の名前出しそこないました。まあどこかで出るでしょうから  
気長にまってくださいな。まだ考えてなかったりして・・・。

## 5・恋愛？それより甥っ子ですわ。

「サラサ。お待たせ・・・あれ？どうしたの？」

しばらくしてディランが戻ってきたのだが、サラサは背を向けたまま茫然としていた。彼女の中でさきほどの出来事は最大級の危険信号が鳴り響いているのだ。だいたいそういう予感当たってしまう。厄介事に首を突っ込んでしまったようだ。

とりあえずこの場はなんでもないと理由を話さずに、怪訝そうにこちらを見るディランの視線も無視する。

エスコートしてもらいながらディランの馬車に乗り込んだ。

「さて。なにがあつたのか話してもらおうかな？まさか僕に何もなかったなんて通用するとは思ってないよね？」

なぜかディランはサラサに関わる全てのことを知りたがり、兄以上に小さいころからなんでも話させられた。だから、ごまかせるとは思わない。ただ、きちんと落ち着いてから話したかったのだ。

「ねえ、ディラン。ソージユケル王子ってどんな方？」

さきほど会った王子の名前を出して聞いてみる。私が知っていることはしょせんうわさ程度しかない。なかなか王族とお会いすることなどないからだ。サラサ自身興味がないからということもある。

「さきに僕の質問に答えてほしいんだけど・・・。それともその質問は関係しているのかい？」

ディランはサラサがまったく関係のない質問をいきなり口に出し

てきたことに驚き咎めるようなことを口にし始めるが、サラサの真剣な表情を見て質問をする理由を推測した。

サラサは無言でうなずく。

「・・・すごく嫌な予感してるんだけど。とりあえず説明するよ」

本当に嫌そうな表情を浮かべて説明してくれる。こんな表情を彼がみせるのは親族か親友のガイヤかサラサぐらいである。

ソージケル王子。正式名はソージケル・レデ・オリエンダーン。ちなみにオリエンダーンはこの国の名前になっている。

20歳のナードル王太子に次ぐ王位継承者の第2王子で14歳。その若さでありながら文武ともかなり優秀であると評判の王子だ。洗練された風貌の上に、性格はとにかく温厚でだれに対しても分け隔てなく接し、関わる者すべてから尊敬を集めるようなカリスマ性を持ちあわせている。

「・・・あの王子のどこが？貴公子の仮面に隠しれない、にじみ出そうな性格の悪さを誰も見破れないのか。」

「で。彼の王子の名前がここに出るのはなんで？もしかして会ったやつたとか？」

再びサラサは無言でうなずいた。

「あそこで待っていたら庭園のほうから音がして、なにかしらと覗き込んだら王子がいたの」

事実だけさらりと言うことにする。それ以上言うと目の前の幼なじみがもつと機嫌悪くなるのが眼に見えているからだ。しかし、長年の付き合いのある彼は見逃してくれなかった。

「ほんとにそれだけ？違うでしょ？」

仕方ないので一つ大きなため息を着きながら正直に話する。それでも最後に言われた言葉は言わないでおく。

最後まで聞き終わると、ディランはこの世の絶望を味わうように、ずいぶん大げさに頭を抱える。

「あーあ。僕がせっかく虫が付かないように誰もいないところに連れていったのに、なんで自分から厄介な虫に近寄るかな」

お、王子まで虫扱いですか？

どう考えても不敬罪が免れない台詞に彼の並々ならぬ怒りを感じる。

「別に名乗られてないし、名乗ってもいないから大丈夫よ」

予想以上の彼の反応にサラサは、全然思ってもいないことを口にする。でも事實は事実だ。大丈夫でないだろうとどこかで確信あるのだが。

「あのね、サラサ。君の容貌で君がだれか分からない奴なんかいいし、会ったことがなくても周りに聞けば一発で素性なんかわかるんだよ？自覚ある？」

たしかに変に目立ってしまう容貌のせいで知らない人まで自分のことを知っていることは常だし、さきほどの舞踏会などでも嫌でも様々な視線を感じていた。

だから社交界とか舞踏会とかいやなのよね。

「虫も何も、まだ十四よ？それに王子様なんだから道ですれ違った

だけの女なんかすぐに忘れるわよ」

なんとか幼なじみの不機嫌を治したくて、ことなかれ主義のサラサは続けてなんてこともないのよって感じで努めて軽そうに言う。しかしそれに返ってきたのは大きなため息だった。

「君はそのきつい孤高そうな美貌と性格の違いに気がついていない？ 表面上の付き合いなら見逃してくれるだろうけど、人が良すぎるどころまで見せてしまって興味持たないような男はいないよ」

それはディランだけでみんながみんな自分に興味持つわけないだろう。サラサはそう言おうとするが、その言葉は彼が不機嫌全開で続ける話に飲み込まれる。

「十四がなんだって？ 僕は十の時から君に求婚しているはずだよ」

三歳の幼子にね。サラサは心の中でそうつぶやく。ディランは兄ガイヤと同じ歳である。初めて会った時から彼はサラサにたいしてこんな口説き文句を言っている。まだ恋だの愛だの全くわかっていない幼児にだ。サラサにしてみれば冗談にしか聞こえないのは当たり前と言えるだろう。だが彼はいたって本気だ。それを当の彼女はまったく分かっていないが。

「ねえ。やっぱり婚約だけしない？ 君がその気になるまでは手を出さないと誓うし、話を進めたりしないから。婚約者がいるってなれば今日みたいな場所に出席しなくても咎められないし、余計な男も寄ってこないし令嬢たちに絡まれることも減るよ？」

ディランは真剣な顔で何度目になるか分からない提案をしてくる。

「それは逆でしょ。ディランと婚約したら宮廷中の令嬢たちを悲しませることになるわ」

一見魅力的な提案に聞こえてしまうが、目の前の幼なじみが令嬢にとつて結婚相手候補として上位ランキングに入っていることを知っているの、素直にうなずけない。

逆に令嬢たちに絡まれなくても睨まれることになるだろう。

それに、兄であるガイヤがそれを了承するとは思えない。一見冷淡そうに見えて中身はかなりのシスコンなのだ。

病弱な父に代わって爵位を継いだ兄はたとえ幼なじみで親友であるディランでも、サラサの気持ちが固まらないことには婚約させることすらさせるわけがない。

サラサとしても恋愛よりも今は愛くるしいジュリアンとの日々で満足しているので、もうしばらくはこのままでいたいのだ。しない訳にはいかないのは分かっているが、正直結婚の必要すら感じていない。

それに名前だけの婚約者でいいと言われても周りはそうは見ないだろうし、いつ結婚するのか急かされるのが眼に見えている。今あの愛くるしい甥っ子と離れて結婚するなんて到底考えられない。

「わかっていますよ、お姫様。そういうことでなく、ジュリアンと離れたくないのでしょ？」

さすがによく分かっている。サラサにしたらほとんどの愛情は甥っ子に向かっているのだ。甥っ子の名前を出されて彼の姿が頭に浮かんでいる。

ああ。もう寝ているよね？

あの天使としか思えない寝顔。ぷくつと膨れたかわいい口からこ

ぼれる寝息。クリンっとしたまつ毛は閉じられているとより一層長くみえる。

サラサは宝物の甥っ子の寝ている姿を思い出して口元に微笑みを浮かべる。その笑みは見慣れているディランにとっても心をかき乱すほど美しいものだ。

「恋敵が2歳とはね……。まあこれで諦めれるもんなら14年間も片思いしてないって……」

ディランは小さくそうつぶやくが、幸いなのか不幸なのか妄想にひたっている愛しい彼女の耳にはまったく入っていなかった。



## 6・嵐の予兆

ああ。

待ちに待った金色の天使の寝顔に、サラサはうつとりと見下ろす。サラサにとつて、出産と同時に他界してしまった義姉であり親友でもあったセーラ。彼女に代わって、母としてジュリアンに接してきた。最初はセーラと兄の為だったけれど、今はジュリアンがかわいくてかわいくて仕方ない。

今まではほとんどの幼児や乳児に顔を見せるだけで泣かれてしまうので、サラサのほうから側によることを避けていた。かわいいな、抱きしめたいなって言う思いを我慢しながら。

しかし、甥のジュリアンだけは目がしっかり開く前から、メイドに「そこまでお嬢さまがする必要ございません！」と頭を抱えられるほど世話していたおかげで、サラサにべったりだ。初めて味わうことのできた小さな生命との触れ合い、特にこぼれんばかりの無邪気な満開の笑顔に、サラサは当たり前のように溺れきっていた。

今日は特に疲れることばかりだったから、あなたのその寝顔には癒されるわ、ジュリアン。

起こさないよう気をつけながらも何回もふつくらと膨らんだきめ細かいお肌の頬に唇を寄せる。

この感触、なんと気持ちのいいこと。もっとしたいけどあまりしたら起こしてしまうわよね。

サラサはぐつと我慢して寝ている甥のベッドから離れる。

明日からしばらくはずっと一緒にいられるのだからいいわ。久しぶりにちよつと遠出してもいいわね。暑くなってきたから湖まで行く。ジュリアンは水遊びが大好きだから喜ぶわ。

サラサはそう頭の中で明日の計画を立てながら、甥の寝室から音を立てずにでていった。

「はい？もう一度、おっしゃって頂けますか？」

とんでもなく厄介な面倒事をわざわざ朝食の食卓で言う兄のガイヤに、サラサは思わず聞き返してしまう。今まで隣でメイドに汚れた手と顔を拭いてもらっているジュリアンの姿に見とれていたのだが、その視線を一気に兄に向ける。

「王妃からサラサにお茶会の招待状が来ていると言ったんですが？」

な、なぜ？

令嬢の間では男を侍らせる悪女として悪名高い自分の評判が、王妃の耳に入っていないわけがないだろう。現に曲がりなりにも公爵令嬢として、それなりに位が高いはずなのに今までは全くそういう誘いはおろか、社交の場でも王妃とは表面上の挨拶を一言、二言をこちらからする程度でしかない。女性の社交界の権力などに全く興味の無いサラサとしたら、大変ありがたいことだったのでその評判を消そうともしなかったのだが。

それがなぜ今になって？

「わからないのですか？」

ガイヤは食後のお茶の入ったカップを手に、少し楽しそうな表情でこちらを見ている。

全く心当たりないので頷くことにした。

「原因は先日の舞踏会で会った御仁ですよ」

そう言われて数日まえに出会ってしまった少年を思い出す。

ああ、そういうことね。彼の名前での呼び出しでないのはまだよかったかもしれないが、その母である王妃にどんな話がいつているのか、想像するだけでおそろしい。

と、そこで一つの矛盾点に気がつく。あの件を兄に報告していないのになぜ彼が知っているのか？

「薄情な妹ですね。こんな大切なことをきちんと教えてくれないなんて。ディランがものすごく不機嫌そうな顔で謝ってきましたよ」

納得。幼馴染みが兄にわざわざ伝えてくれていたんだ。

ディランも余計な事を・・・と思ってしまうが、どうせこういう事態になってしまえば、兄のほうからサラサにあれこれと詮索するので、遅かれ早かればれてしまうことだったのだらう。逆にそうすると兄はサラサにお説教を延々としてくるはずだ。

「すみません、お兄様。ただすれ違った程度でしたので・・・」

先手必勝。負けるが勝ちだ。謝ってしまえばそれほど説教されなくてすむだらう。

「まあ、起こってしまったことはしかたないですね。後は公爵家のものとして役目を果たしてくれたら私は何も言いませんよ？」

通訳すると、王妃からのお茶会にさっさと参加して家の面目を保ってこいということだ。

あゝ、行きたくない・・・。

王妃と対面するのも正直めんどくさいけど、その取り巻きたちに何とも言えない嫌な目つきで見られて、こそこそと聞こえるような陰口を叩かれるのかと思うと、心底からぞっとする。

サラサはその現場を想像して顔に手を当てた。本当はいやだ」と叫んでしまいたいが、幾ら自分の家であっても数人がそばで給仕している食卓でそのようなことはできない。

「サーラ？ いちゃいの？」

隣から鈴が鳴るような可愛らしい声が聞こえてくる。最近、自分の名前をサーラと呼んでくれるようになった2歳のジュリアンのものだ。

「ジュリアン！ サラサは大丈夫よ。心配してくれるなんて本当に優しい子ね」

抱きしめて頬にすりすりしてしまいたいほどかわいいけれど、金色のくせ毛の髪のをなでるだけに止まることにした。その理由は先ほどと同じである。

「ともかく、招待状に目を通して準備しておくようにしてくださいね。なんでも明後日らしいですから早めに準備しないと間に合いませんよ？」

はい？ 明後日？

あり得ないほどの早い招待である。王妃とのお茶会となれば、大抵の令嬢たちはそれなりに身なりに気合を入れていく。新しくドレスを新調する者も少なくないだろう。サラサはそんなに衣装にこだわりがないので新調するつもりもないが。

正直新調するたびに行われる生地選びから採寸などの時間が苦手なので、作るときに一気に数枚作ってもらっている。流行などどうでもいい。恥にならない程度でいい。

そんな本人とはうらはらに、周りのメイドや針子は事あるごとに、服を作らせようとたくらんでいる。ここの主人の公爵も快くスポンサーを買ってでている。サラサ自身が無精だからというのもあるが、メイドたちにしたらうつくしい主人を着飾って自慢したいのだ。針子たちにすれば、サラサが社交界などで自分のドレスを着ればかなりの確率でその形が流行になるのだから、それはそれは気合をいれてデザインを仕上げてくる。それで自分の名声があがるのだ。どうでもいいはずのサラサは本人が意識しないまま、ファッションリーダーになっていた。

つまりはそれほど女性はやたらに気合を入れている。だからとても仲の良い間柄でなければ大抵の招待状は、せめて1週間後とかの場合が多い。王妃のお茶会で明後日などありえないだろう。

もしかして嫌がらせも含んでいるのかしら……。

ついサラサは疑心暗鬼になってしまう。

悪名高い女が可愛い息子に近づいてきたからさっさと追い払ってしまおうとか？

十分あり得る。ジュリアンにそんな女が近付いてきたら、サラサとしても確かめずにはいられない。

そう思うと諦めがついた。もともと、この国の一番権力のある女性からの招待をサラサが断れるはずもなかったのだが、気持ち的に行く決心がついた。母としての気持ちがよく分かるからだ。

ただ偶然お会いしただけで、なんの関係もございません。だからそんなに心配される必要はないです。

会ってそれを確かめて頂けたらいいだけね。ああ、そうだね。ジュリアンを連れていって説明すれば一発で分かってもらえるかも。そう思いながらジュリアンを見つめていたら、ジュリアンもこっ

ちを見て満面の笑みをうかべてくれる。

ああ。かわいい。

「そうそう。ジュリアンを連れて行くなどとは馬鹿なこととは言わないでくださいね。招待されたのはサラサだけなのですから」

現実逃避で考えていたことを兄に見事に当てられてしまう。

本当にできるとは元より思っていない。それは失礼に値するからだ。

でも……。可能であれば本当に連れて行きたいものだ。

「わ、わかってますわ。きちんと参加させて頂きます」

サラサはわずかに眉に皺をよせながら小さな声でそう言うしかなかった。

その返事を聞いて、ガイヤは役目を果たしたとばかりに席を立ち、そばのメイドに何かを告げるとその場から退出していった。

兄の後ろ姿を見ながらサラサは思わず大きなため息をつきそうになるが、こちらを覗きこんでいるジュリアンに気がついて思い止まる。

「さあ、ジュリアン。朝食も終わりましたし、一緒にサラサとお部屋に行きましょうか？お昼まではしなくてはいけないことがあるけど、お昼食べたら一緒に散歩しましょうね」

サラサはそう言って甥の手を握りながらジュリアンの部屋に戻ることにした。

## 7・お茶会開始です（前書き）

サブタイトル・・・前公爵の哀愁

## 7・お茶会開始です

「サッラ。だっこ」

ジュリアンが小さな紅葉のような手を広げてだっこを要求してくる。

ああ、抱きしめたい。

でも、タイミングが悪いことにばっちり化粧を施され、ドレスアップした状態であるのでだっこしてあげるのは無理だった。

帰ってきたところであればいいが、今からこの国一番の女性のところに行くのにドレスに皺や汚れがついては、さすがに1時間かけてメイクアップしたメイドたちに申し訳ない。それにドレスには小さな飾りが散りばめられているので、万が一それがジュリアンの柔肌を傷つけてしまう危険があった。そんな危険をサラサが冒せるわけがない。

「ごめんなさいね、ジュリアン。今日はナンシーにお願いしてもらえるかしら。サラサは今から戦いに行かないといけないの」

サラサはジュリアンの頭を何度もなでる。この形でできることはそれぐらいだ。

「やだ〜。だっこ」

ジュリアンが目には涙をためながらそう訴えてくる。サラサはその表情を見てもらい泣きしそうになるのをぐっところえた。化粧ばかりで涙をためるわけにもいかない。普段はそれほどうしないのだけど、さすがに社交界にいくときはそれなりに化粧させられる。



「ジュリアン。おじい様がだっこしてあげるからこっちにおいで」

娘であるサラサを見送りに来ていた前公爵が、駄々をこねる孫を見かねて両手を広げてジュリアンに優しく声をかける。しかし、それに対してジュリアンの反応は冷たいものであった。

「や！サーラ！」

孫の拒絶に面白いほどショックを受けている初老の前公爵。その姿に病弱だが有能で冷酷ともいわれたアルンバルト前公爵の面影はない。ただの孫ばかなおじい様だ。

「ジュリアン、帰ってきたら一緒におねむりしましょうね」

そう言うとは分かっているのか何回も頷いてくれた。ジュリアンはサラサがだっこできないのが分かったのか、大人しく乳母であるナンシーに抱かれている。

早く今日のこのやっかいなお誘いをなんとか終わらせて、ジュリアンと仲良く過ごしたいわ。

サラサは扇で口元を隠しながら小さくため息をついた。

「それではお父様。行ってまいりますわ。お見送りまでしていただいてありがとうございます」

病弱な身でありながら、わざわざ玄関まで見送りにきてくれた父にお礼を言う。それだけ今日の王妃主催のお茶会が気になるのだろう。私がひとつでも誤ればお家存続の危機になる危険性もあるからだ。

従者にエスコートしてもらいながら馬車に乗り込んで王宮に向か

うことになった。

サラサはメイドたちに会場である王宮の庭園に案内された。天気がとてもいい。心地よい風を感じる。庭園の真中には屋根のついた大きな広場があり、そこにテーブルといくつかの椅子がおかれている。

美しくガーデニングされた庭園のなかでひととき目立つ薔薇の匂いがそこら中に漂っている。

格調高い作りのテーブルの上には、様々な色彩豊かな花と美しい湾曲の持ち手がついたティーカップや、きれいに盛りつけられた焼き菓子が置かれている。すこしテーブルから離れたところで3人ほどのメイドが控えている。さすがに王妃のお茶会だ。センスがとびつきり良い。

サラサはゆっくりとその広場に足を踏み入れる。

10数人ほどの貴婦人たちがいるのだらうとサラサの予想に反して1人しか席に座っていない。

早すぎたのかしら？

思わずそう思ってしまうが、まったく表情には出さない。これは貴婦人としてのたしなみとして、鍛えられているので考えなくてもできる技だ。

「本日はようこそ。急なお誘いをして申し訳なかったですわね。レツドスターと誉れ高い我が国の美姫と、じっくりお話がしたくなつたものですから」

一番奥にある上等な椅子に腰かけている妙齡の美女が、こちらに気がついてそう声をかけてくれる。口元には微笑みをしっかりと浮

かべていたけれど、目はまったく笑っていない。

「なにかと至らぬ身であるわたくしをこのような場に呼んでいただき、身に余る光栄でございます」

サラサはその場で頭を下げて、短いが失礼に値しない程度の挨拶を述べる。自分を王妃に売り出してもっとお近づきになるつもりなら、もったときちんと口上すればいいだろうけどサラサにしたらそんな気はさらさらない。

「さあ。堅苦しいことはここまでにして席に座って頂戴。今日はあ」と一人のちに姿を見せるだけなので、わたくしとあなた二人でじっくりお話できるわ」

サラサは王妃に促がされるまま彼女のそばの席に腰かけた。

さすがに表情には出さないが、内心では王妃の言葉に疑問と驚きで頭がいっぱいだ。

周りの取り巻きたちのご婦人方はいないの？

2人つきりで話したいほどのことって何？

もしかしてそれほど王子にたかる悪い虫だと思われてしまったのだろうか？

内心では怖いっているものの、サラサは扇を口元に当てながら小さく笑みを王妃に返す。サラサは自分から何か言うより王妃の質問に答える姿勢のほうがいいことを知っていた。

「本当にあなたは美しいわね、さすが社交界の華の一つと呼ばれるだけあるわ。でもあまり社交の場に姿を現さないのはなぜかしら？」

自分自身が連日連夜、自宅に男を呼んで侍らかしてるとまで噂をされていることを、サラサは知っていた。

まだ未婚でそれなりに立場がある公爵令嬢が、どこかの未亡人や欲求不満な婦人みたいなことをするわけがないし、公爵や前公爵のそばでそんなことができないことが分かっているながら、そういう噂を立てる令嬢たちの性格の悪さを感じる。

この前の孔雀令嬢などはまだ正面から立ち向かってきたので許すことができる。叩きつぶすことも容易だったし。とはいえ、あんなトラブルはうんざりだけど。それ以上にどうしようもないのは、根も葉もない噂を陰で広める方々だ。

ディランがよく公爵家に来ることも要因だろう。だが、小さいころからずっと入り浸っていたし、兄のガイヤに用事があつてくる場合も多いのだ。来ないでと私に言う資格もなければ、いまさら言う気もない。

「甥である兄の息子の母代わりをしているからですわ」

どうせ信じてもらえないだろうなと思いつつも、サラサは本当のことを言う。6割はそれが理由だ。あとの4割はただめんどくさいだけなんだけど。

「そつえば、セーラ嬢の訃報ほんとうに残念でしたね。あれほど若く美しい方だったのに」

ジュリアンの母である伯爵令嬢だったセーラは、サラサより3つ年上の金色の髪が印象的な可憐な少女だった。唯一サラサの内面を見てくれた親友。兄と婚約したのは驚きもあつたけど、嬉しさのほうが強かった。だが、ジュリアンを産んで息を引き取ってしまった。出産で命を落とすのは悲しいがけっこうあることだ。現にサラサの母も次の子を産むこともできずに、その子とともにあの世に去ってしまった。

さすがに公爵家の嫁だったし、それなりに評判だったセーラのこ

とは王妃の耳にも入っているようだ。

サラサは彼女が亡くなった時のことを思い出して、思わず涙がたまりそうになる。セーラのことを言われると未だに涙が出そうになるのだ。しかしこんなところで泣くわけにはいかない。出来る限り無表情を心がけた。

「はい。2年になります」

サラサは努めて淡々とそれだけを告げる。王妃はそんな彼女をじっと観察するように見ていた。

「美しく若い令嬢が姿を消してしまうのは残念だわ。あなたも十分健康には気をつけてね」

王妃は本当に優しげに声をかけてくださる。しかし眼は鋭いままだ。サラサはそういう仮面をつけたお付き合いに幼いころから慣れ親しんできたのと、持って生まれた直感で持つて初対面でも相手の本質を見破る能力が備わっていた。だから王妃の表面上の優しさに、サラサも同じように切り返す。

「はい。王妃様こそ我が国にとってなくてはならないお方でございます。十分ご自愛くださいませ」

そう言いながらサラサは軽く頭を下げた。下の者としては申し分ない教科書通りの回答だろう。王妃はそんなサラサにもうひとつ話題を出してくる。

「そうそう。息子のソージュの手の怪我の手当てをしてくれたのですね？今日はそのお礼をと思ってこうして呼ばせていただいたのですわ」

きた！本命の話題。

これこそが王妃が聞きたいことであろう。しかし、ここで頷いてはだめだ。王子の素性を知らないふりをする予定だったんだから。

「申し訳ございません。わたくしにはなんのことだか……。おそらく人違いではございませんでしょうか？」

可能ならこういうことにしてしまいたい。これならこのお茶会も意味がなくなつて、今後呼ばれたりすることもなくなるだろう。幸いなことにまだ私は名乗っていないし、王子に対しても名前で呼んだりしてないのだから。

しかし、その安易な考えは次の瞬間にあっけなく敗れ去ることになる。

王妃の席の右側に見える庭園に続く道から、金色の髪の少年が、颯爽と歩いて近づいてきたからだ。

ああ。彼が姿を現しちゃったら、ごまかしきれないわよね……。

これから王妃と王子がサラサに対してなにを言ってくるのか内心ではびくびくしながらも、貴婦人としての仮面を必死に被って、こちらに来る彼に対して頭をさげるためにサラサは椅子からゆっくりと立ち上がった。

## 7 お茶会開始です（後書き）

汀雲さんが、またまたすばらしいイラストで今度はジュリアンを描いてくれました。感謝です。

## 8・逃れられないお願い

王妃が近づいてくる少年の姿を見つけると、わずかに眉をひそめながらしばらくその姿を見続けていた。そして声が充分聞えるほどに近づいたところで、一転して満面の笑顔になって優しげな口調で彼に声をかける。

「まあ、ソージュ。今日は随分早い到着ですわね。いつもはこちらから誘ってもほとんど姿を見せていただけなのに」

その声も表情も随分と優しく、今までサラサと対面していたような表面的なものは存在しない。それだけに本当に王妃がこの王子のことを愛おしく思っていることがわかった。

うん。自分にとってのジュリアンと一緒に、王妃もソージュケル王子が大切なね。思っていたとおりだわ。

サラサは立ったまま心の中でなんとも頷いていた。表面上は軽く口元に仮面の笑みを浮かべているに過ぎないが。

そんなサラサには眼にも止めずに、ソージュケル王子は一番奥の王妃のそばまで優雅に歩み寄って座っている王妃の片手を取り、軽く唇を寄せる。

「今日はなんとか母上と、楽しく過ごせれる時間を作ることができました。それは今日のこの時間に開催してくれた母上のおかげでございます」

王子の挨拶に本当に気をよくしたようで、嬉しそうに王子に微笑を返していた。

「あなたは本当に多忙ですものね。今日来てくれただけで私はうれ



しいですよ。こちらはあなたがぜひ会いたいと言ったアルンバルト公爵家のサラサ嬢ですよ。彼女で間違いないですか？」

ゆつくりとサラサのほうに視線を移しながら王妃が王子に訊ねている。二人ともがこちらを見ている。別々に見ているときはそれほど思わなかったけれど、こうしてみると色彩だけでなく顔の形もよく似ている。

王子は大げさなほど大きく頷き、今度はサラサのほうに近づいて挨拶をするために彼女の手をとる。

「この前は怪我の手当てをしていただき、本当にありがとうございました。貴女の姿が忘れられずにこうして母に我がまを言っ、この場を設けてもらったのです」

頬を赤く染めながら純粋な眼差しを向けて、ゆつくりとサラサの手の甲に唇を寄せてくる。

しかし、一瞬だったのにサラサは見逃すことができなかった。唇をつけた後にサラサの瞳をくる眼差しが玩具を見つけたように楽しげで、甲に付けている唇が面白そうに口元を上げているのである。サラサの中で確信にも似た危険信号が頭に響き渡る。

やはりこの王子は相当な猫かぶりだ。実の母の前ですら大きな猫をかぶっている。

ぞつと身体を震わせそうになるのを必死に抑えながら、頭をさげて挨拶をする。

「こちらこそ、王子とは露知らずにご無礼な態度をとってしまい申し訳ございません。大したこともしておりませんのにこのような名誉ある席に呼んでいただき、誠に恐縮でございます」

余計な迷惑という本音を覆い隠すように、令嬢としては申し分な

いであろう挨拶をかえす。

「まあ。あなたは王子とわからずにこの子に接していたのですか？」

王妃は私の言葉に驚きを隠さずにそう聞いてくる。その表情はとても優しいのだが、眼は疑惑一杯の眼差しだ。

『王子と分かっていながら近づいたために、わざとらしく手当てをした女狐め』と眼が語っている。

この方は感情を隠す気あるのかしらと、サラサは思わず考えてしまう。

自分がそういうことになり鋭いという自覚はあるけれど、ここまであからさまだと自分以外でもわかることだろう。それは上級のそれもこの国で一番位の高い王妃として、決してよいことではないだろう。そういうば、この王妃は隣の国から嫁いできたもと王女であつた。もともと位が王族だったために、そんなに腹芸まで必要なかったのかもしれない。なぜなら誕生してから今までの者が彼女に合わせていただろうから。

ああ。正直敵意むき出しの彼女にこれ以上関わりたくない。それ以上に息子である目の前の王子にはもっと関わりたくないが・・・。

「はい。お互い名乗らずにいたものですから・・・。ソージュール王子様がわたくしのことを分かれたのにも本当に驚いております」

間違つたことは一つも言っていない。

サラサは座る許可を頂いていないために席の前に座つたままだ。だから王妃を上から見下ろさないために頭を下げながらそう言う。それに対して、王子は席に座るように手でサラサを促しながら、彼女にあくまでも無邪気そうな笑顔で力強く言ってくる。さきほどの邪悪な笑顔をみなければ、それが仮面を被っているとまったく判らなさそうなほど見事な豹変ぶりだ。

「そなたのような美しい方を忘れるはずもあるまい。我が国の秘宝の一つのレッドスターと名高い、アルンバルト公爵家のサラサ嬢であると周りの全ての者がすぐに答えたからね」

ああ。こんなところでもこの派手で怖い容貌が仇になるなんて・・。

ディランにもすぐばれると言われていたけれど、嫌いな自分の外見を恨みたくなる。べつに自分の顔が整っていないとは思っていないし、そのことは大いに感謝している。しかし、ここまで周りに誤解をふりまくような、きつい顔立ちでなくてもよかったのではないかと思ってしまう。

うらみませう。アルンバルト公爵家の血筋。

「さすがですね、ソージュ。些細な恩であつてもきちんと礼の心を持って、相手を探し出してまで感謝を述べるなんて。王族として見事な姿勢ですわ」

王妃が息子を誇らしげに褒めている。その言葉にサラサに対しての棘も決して忘れない。

些細なことで王族に恩を売るなど暗に言っているのだ。

サラサがいい迷惑だと思っているなど、微塵にも判っていないのだらう。

「いえ、母上。期待していただいて申し訳ないですけど、私はそれほど出来た者ではないですよ。ただ、純粹に彼女のもう一度お会いしたくて、感謝を口実に母上にこの場を設けていただいたのですから」

「そうですか。たしかに秘宝などと言われるだけあつて、サラサ嬢の美しさはすばらしい物ですものね。サラサ嬢、どうぞ我が息子と

仲良くしてあげてくださいね」

王妃は息子の言葉を聞いてサラサに微笑みかけた。しかし扇で押さえられている口元はかすかにひくついたままである。息子が面と向かって仲良くしたいと言っているのを彼女はいくら不本意でも、本人を目の前にして断ることができないようだ。

「身に余る光栄でございます」

サラサは頭を下げながら短くそう言う。色々と言うべきかとおもったけれど、言えば言うほど王妃の機嫌を損ねてしまうことを悟っていたからだ。

「母上。せっかくこうして出会うことができましたのです。ひとつ彼女に我がままをお願いしたいことがあるのですが、してもよろしいでしょうか？」

これ以上に何を言うのだ、この少年は。サラサは死刑宣告を待つように、内心の動揺を必死に隠しながら次の言葉を待つ。

「それは何ですか？」

王妃もわざとらしくゆっくりと王子に問う。内心では聞きたくないのだろう。

だが、そんな二人の気持ちなどまったく気に掛けることなく王子は落ち着いた口調で爆弾を落とした。

「サラサ嬢に舞踏の練習のパートナーをお願いしたいのです」

サラサは一瞬何を言われたのか理解できなかった。

ダンスの練習のパートナー？

王子はあくまでも王妃に眼を向けて説明を続ける。

「私も来月には15になり社交界に正式に、デビューすることになります。ですが私はいまひとつ舞踏に自信がありません。もちろん、先生方は素晴らしい指導をしてくださいます。しかし、社交界をよくご存知な令嬢相手に踊ったこともございません。だから彼女にそれをお願いしたいのです」

なぜだれでも手を挙げるような申し出をよりにもよって私にしてくるのかしらと、サラサは頭をひねってしまう。

王妃も同様にその疑問を口にしようとしたのだが

「判っております。母上を始め、彼女以外にも素晴らしい舞踏をたしなむ令嬢やご夫人方は数多くいらつしやるでしょう。ですからこれは本当に私の我がままなのです。サラサ嬢にお会いするまでは、母上に良き相手を紹介していただく予定でした。ですが、こうして縁ができたのであればぜひお願いしてみたいと思ひまして」

自慢の息子が頬を赤らめながら言う言葉に、王妃は貴婦人の仮面を一瞬だが脱いでしまう。

サラサのほうを思いつきり眉をゆがめて険悪な表情で睨みつけたのだ。サラサはなんとか王妃のその表情に気が付かない振りをする。こうすることが一番無難に済むことを知っていた。

王子の演技はまるで初恋をしてしまった純朴な少年のようである。本当に何を考えてこんなことをするのかサラサにはまったく見当もつかない。

いくらか些細な恩であつても仇で返すなんてひどいと思います。心の中でサラサは泣きそうになる。

これでもともと無いに等しかった女性社会での地位は、地を這う

ぐらゐに急落したのは確實である。

王妃にここまで嫌われてしまったのだ。当然そうなるだろう。まあそんなものに未練もないけれど。

「そうですか。でもサラサ嬢はどうなのでしょう？この前の舞踏会も本当に久々だったようですし、何かと多忙そうですから」

王妃はサラサにそう尋ねてくる。その眼は『断れ！』と大きく書いてある。

サラサも断る口実を探そうと必死に探す。しかし、その前に王子がサラサに熱いまなざしを向けてお願いしてくる。

「そなたの都合があるのはわかつている。だが、ぜひ引き受けてほしいのだ。週1回でも構わない。なんなら貴女の屋敷まで足を運んでもいい」

王子自らここまで乞われている状態で、一端の貴族令嬢が断ることが出来るわけがない。

こうしてサラサは王妃に睨まれたまま、王子の要望に表面上は快く引き受けることとなった。

## 9 ・踊りながらの内緒話（前書き）

サブタイトル・・・カメレオン王子（笑）

## 9・踊りながらの内緒話

王妃を証人にするという強引な手法をもちいて目の前の少年は、週一回舞踏の授業のときにサラサを招くことに成功した。

サラサにしたらソージュール王子が何を考えて、自分と呼ぶのかまったくわからない。

だが、王族に乞われて断れるはずもなく、現公爵である兄のガイヤも苦い顔をしながら了承してきた。本日第1回目のお呼ばれとなり、仮病を思いつきり使いたい気持ちで泣く泣く王宮に足を運ぶ。さすがに王族に屋敷までわざわざ来ていただくわけにもいかない。よって必然的にサラサから通う形になる。

ああ。また色々な噂をされてしまうのかしら……。

サラサは王妃の険悪な表情を思い出して、ますます自分の悪評が高まるだろうと確信していた。

『年若い純粋な王子を誑かす悪女』というレッテルも上乘せされるのか……。

そんなことを内心で考えながらメイドに案内された部屋には、そもそも元凶である殿下と年配の男性と女性が一人ずつで恵に3人が話をしていた。

紹介されて年配の男が舞踏の講師で女性が竖琴の弾き手であることがわかる。

挨拶もそこそこでさっそく王子と肩を組んで舞踏の練習がはじまった。

14歳のわりには背が高くて、女性にしては長身のサラサと同じぐらいある。サラサはそれなりに足底の高い靴を履いているので実際はサラサより高いだろう。



・・・だれが舞踏に自信がないって？

王子にリードされながら1曲踊り切ったサラサは、抱きかかえられるような形で身体を密着している少年に対して、思わず舌打ちをしたくなった。さすがに無作法で無礼に値する行為なので心の中だけで止まったのだが。

今まで数々踊った紳士たちの中でも十分上位に入るぐらい上手だった。

「すばらしいですわ。さすが王子です」

「サラサ嬢もさすがです。パーフェクトです」

講師である男性と弾き終えた女性が手を叩きながら褒め称えてくれる。サラサも上級階級に生まれた宿命として幼いころから一流の講師によって舞踏を教え込まれ、持ち前の運動神経も手伝って文句のつけようもないほどの技術はある。王子もこれほど踊れるなら今日で役目ごめんでは？

そういう言葉を期待していたのだが、目の前の金色の髪の少年は頬を染めながらこうおっしゃられる。

「ありがとう。サラサ嬢が上手なので私もなんとか踊ることができただけだ。彼女と何度も踊って慣れないと本番に失敗してしまいそうでこわいな」

見るからに純情そうな表情だ。そんな彼をみて講師たちは目に涙を浮かべんばかりの熱い表情を浮かべる。

「なんて謙虚ですばらしい心がけなのでしょう。さすが、ソージュ王子です」

「サラサ嬢も王子にそこまで言われてなんと幸せなことでしょう」

いえいえ、不幸としか思えません。

本音はそうであっても正反對のことを口にする。

「わたくしなど、大したことございませんわ。でも僅かなりとも殿下のお力になれることを幸せに思っております」

さすがにいつも持つている扇がないので、手で口元を押さえながら軽く笑みを浮かべる。

サラサがあまり微笑んだりすると周りの者が固まってしまう経験をいつもしているので、できるだけ小さく微笑むくせがついていた。

「ありがとう。そなたがそう言ってくれるなら私も頑張れるもんだ。よかつたら週1と言わずに2回きてくれるとうれしいのだが・・・」

うー！社交辞令が過ぎてしまったかしら？これ以上増やされたらジュリアンとの甘い時間が減ってしまうわ。

「ありがたいお言葉ですが、さすがに身に余るこの光栄な役目を、わたくし1人で週2回も受けるわけにもいきませんわ。舞踏の達人なお方をわたくしも数人存じ上げております。もしよろしければご紹介させていただきますが・・・」

なんとか頭を精一杯動かして、お断りを口にする。うん。これなら無礼にならないはず。

正直令嬢の知り合いなんぞほとんどいないけれど、こういう話ならみんな喜んで立候補するはず。

「いや。それには及ばない。好意で付き合ってくれているサラサ嬢に、負担をかけるようなことを言ってしまうって申し訳ない。それほ

どそなたの舞踏がすばらしかったので・・・」

思っていた通り、王子はサラサの申し出を断ってきた。  
本当に何をかんがえているのかしら、この王子。

サラサはそう思いつつ、もう一度踊るために彼の手を取って肩に手を回す。彼もそれに合わせてサラサの腰に手をまわして彼女の身体を引きよせた。そしてサラサの耳元に顔を近づける。

「なかなか手ごわいな。さすがは、アルンバルト公爵の妹だけある。  
だからこそ面白いのだが・・・」

「！」

耳元でサラサにしか聞こえないほどのつぶやきは、先ほどまで聞いてた穏やかな口調とはがらりとかわってひどく楽しげである。

面白いつてやはりこの王子はサラサで遊んでいるのか・・・。  
思わず彼の腕の中から逃れようと肩に置いていた手を離してしま  
うが、腰に手をまわされて身体が密着しているために離れることは  
不可能だった。

顔の仮面は外さずにすんだが、身体のびくつきは隠すことができ  
なかったために王子にそれは伝わったはずだ。

「そう怯えるな。何も取って食おうと言うわけではない。ただ退屈  
でしかたなかったこの時間に付き合っただけだ」

相変わらず耳元で話しながらも王子は流暢にサラサをリードしな  
がら踊っている。

今回はゆつくりとしたペースの曲なので話できるのだろうけど、  
こんなに余裕がある彼にどうして練習が必要なのか！

と、八つ当たりだが満足げに二人の踊りを眺めている講師二人に  
怒りが向いてしまう。

彼は退屈しのぎのためだけに私とジュリアンの時間を奪い取ったと言っのゝ？

サラサは舞踏会の帰りに出会ってしまった自分の不運を心の中で恨む。サラサ自身トラブルを呼んでしまう体質であることを重々自覚していたのだが、こうも防ぎようのないものばかりだと嘆きたくもなるものだ。

「言いたいことがあるなら何でも言っがよい」

回転してこの部屋にいる他の二人から死角になったところで、ソージュール王子はあの甲に口づけするときに見せたような邪悪な笑みをサラサに見せる。

「・・・なぜわたくしなのでしょう？自分で言っのもなんですけれどわたくしの評判は最悪ですわよ？」

サラサは表情を変えずに端的にそう訊ねることにした。王子と違って講師に丸見えだからだ。

「それを聞いて余計にそなたに会ってみる気になったが？なんでもあの愁いの騎士を弄んでいるとか言っ話はおもしろかった」

愁いの騎士と言われて一瞬だれだか分からなくなったが、幼馴染みのデイランがそう呼ばれているのを思い出す。どこが愁いなのかさっぱり分からないが、特に女性の間ではそういうあだ名がついているらしい。

「ただの幼馴染みにすぎませんわ」

遊ばれているのは自分のほうだと言いたいのを、サラサはぐっと

抑えてそう言う。それに対して、王子は無邪気な笑顔に変えながらも、口調は今まで通りサラサに耳打ちしてくる。おどりながら回転したので、今度はサラサが死角になったからだ。

本当にこの王子は器用だわ。

サラサは死角になりながらも表情は変えることはしない。いつ回転するかわからないし、王子のように瞬時に変えるほど高度な技術がない。

「この前見たときは少なくともディラン・ウイデリーは違う感じだったかな」

気のせいだと言うべきか迷うが、サラサのことになると過剰に反応するディランの姿を見ていたのなら何を言っても嘘に聞こえてしまっただろう。サラサが黙っていると王子はほんのわずかに口元に笑みを浮かべながら、話を続けてきた。

「まあ彼のことは別に興味はない。それよりも噂と違いそんなレックス・ドスターの本性を知りたいと思いついただけだ」

サラサは自分が彼の本性を本能的に感じ取ったように、王子もサラサの仮面を容易くみやぶっていることを悟る。と、同時に天敵の猫に見つかってしまったようなネズミの気分になる。

この王子、デビューもまだの子供のくせにお兄様やディランと同じぐらい本性が真っ黒だわ。外見が優しげで清々しい印象なだけにたちが悪すぎる……。

サラサはすくなくてもこの一カ月の間は絶対、彼から逃れられないであろう自分の宿命を予感せずにはいられない。

だが、一ヶ月だけでなく長い間、それが続くとまでは彼女は知る由もなかった。

## 9・踊りながらの内緒話（後書き）

14歳なのに偉そう・・・。書いてからそう思っちゃいました。  
王子だし、まあいつかw

## 10・過去の頂き物（上）（前書き）

長くなりそうなので上下に分けました。だから短いです。すみませ  
ん^^^;

## 10・過去の頂き物（上）

サラサは最愛のジュリアンの寝顔を眺めながら小さくため息をついた。今のサラサの頭の中は甥っ子を目の前にしながらも珍しく他のことで一杯だった。

サラサは先日 of 舞踏の練習を思い出す。一回目は結局練習だけで二人つきりになることもなく、唯一話をしたのはゆっくりな曲の踊りの時のみで済んだ。周りがあえて二人つきりにさせないようにしているのだらう。普通だと、令嬢であるサラサに変な噂がたたないためだが、この場合は間違いなく王子に悪名高いサラサが誘惑したり媚びを売ったりさせないためだ。サラサとしても天敵と認知した王子と、二人つきりなど勘弁願いたいところなので助かるが。

本当のところ、なぜ王子がサラサに興味を示すのか全く持つてわからない。

だが、彼女は一つだけ探られたくない秘密があった。だからこそ王子や権力などに関わりたくないのだ。もし王子にそれを見破られると、今までの平穏な生活を一転させてしまうことをサラサは充分すぎるほど理解していた。

だから要らないと言ったのに・・・キラの馬鹿！

何百回目かわからないサラサにとってなじみの台詞を頭に浮かべる。同時に浮かんでくるのは、栗色の逆立った髪と大きな碧の眼をした美しい青年だ。年は二十歳前後だらう。サラサが四歳の時に初めて会ってから何度も出現したが、その姿はまったく変わっていない。

サラサはジュリアンを起さないように、金色の癖毛を何度も撫でながら昔のことを思い出していた。



大きな屋敷の一つの部屋の窓際から黒髪の幼女・・・サラサは、見慣れた景色を眺めていた。別に見たいモノがあったわけではない。昼寝をたっぷりしてしまい寝れないので夜空の星を眺めていただけだ。

まだ生を受けてから4、5年しか経っていないサラサだが、猫のような形の紅い瞳を持ち、今でも充分見目良い容姿をしている。彼女を見るほとんどの者が将来、絶世の美女が誕生するだろうと期待している。

だが、当の本人はそれほど自分の容姿に興味はなく、それなりに位のある両親を持ちながらも淑女教育よりも自然や生き物・・・特に馬に興味を持っているような破天荒な性格で周りに仕える者や教師を存分に困らせていた。

今日もこんな夜更けに星を眺めている。本当なら庭に散歩に出かけたぐらいだけど、さすがに咎められることを知っているので窓からの景色で我慢していたのだ。

あれ？

サラサは見慣れた景色の中で今までみたことない物体に頭を傾げた。

小さな姿だけど、間違いなくそれは青年の姿。だが彼がいる場所が有り得ないところだった。庭園にある噴水より身体半分上空に突っ立っているのだ。足元には何も無い。

・・・人っってお空を飛んだりできないよね？

「幽霊さん？それとも精霊さん？」

気がついたらサラサは質問を口にしていた。自分の部屋の窓から見ている状態なので、周りには返事してくれる者などいない。

しかし突然、頭の中に男性の声が聞こえてきた。

「はずれ〜!」

びっくりして、サラサは周りを見渡す。だが、誰もいない。と、思っていると急に真正面に今までみたこともないほど、美しい青年が楽しそうにサラサを見下ろしていた。

「きゃ〜!」

思わず大きな叫び声を上げてしまう。

「サラサ様!どうしましたか!」

サラサの叫び声を聞いて、メイドが数人彼女の寝室に入ってきた。その後すぐに十歳ぐらいの少年が慌てて入ってくる。

「サラサ!どうしたんです?」

サラサは少年が姿を現した瞬間に思わず駆け寄って彼のパジャマを掴む。

「お兄ちゃま〜。へんな人がそこにいるの〜。怖いよ〜」

ちよつとでもいきなり現れた青年の視界から逃れるためにも、兄である少年の後ろに隠れる。だが、兄のガイヤは不思議そうな顔をこちらに向けてきた。

「サラサ。だれもいないですよ?へんな夢でも見たのですか?」

「え?いないの?・・・いるじゃあない!そこに!」

いないと聞いていたはずの場所を見ってみるが、やはり栗色の逆立

った髪と琥珀色の瞳をした青年が楽しそうにこちらに手を振っている。だから幼女は指差していると主張したが、兄の表情はますます眉をひそめて心配そうにこちらを見ているだけだ。周りのメイドたちを見ても、すべての者がそういう表情をこちらに向けている。

「お嬢さん、残念ながら俺をみれるのはお嬢さんしかいないからどれだけ言ってもだめだよ」

青年がのんきそうな口調でそう言ってくる。  
え？だれにも見えないの？聞えないの？

「サラサ。大丈夫ですか？幽霊の夢でもみたのですか？」

兄がサラサの顔を両手で包み込みながら覗き込んでくる。

「別に俺は幽霊でも悪い者でもないよ」

青年が兄の言葉に反応してそんなことを言ってくる。サラサはさきほどは驚きはしたけれど、不思議とその彼の言葉を嘘、偽りとは感じなかった。

だから、気を取り直して兄である少年に安心させるような笑顔を見せる。

「ごめんなさい、お兄さま。サラサ夢を見ていたみたい。みんなも騒いじゃってごめんなさい」

そう言っで軽く頭を下げる。そうすると兄である少年はあからさまにほっと息をはき、妹である幼女をベッドに横たわるよう促す。本当はその青年と話をしたいけれど、心配している兄に出て行ってほしいなどとは言えない。仕方ないのでサラサは寝台の中に入り、

兄が安心するようにしばらく寝たふりを続けることにした。

だが、幼女なだけに狸寝入りが本寝入りにすぐになってしまい、気が付いたら兄が彼女の部屋からいなくなったのもまったく気が付かなかった。

そんな彼女の寝顔を面白い玩具を見つけたかのように青年が見つけていたのだが、それを知る者はだれもいなかった。

## 10・過去の頂き物（上）（後書き）

久々更新です。

いきなりですが、サラサの過去話が入っています。  
誤字、表現間違えの指摘受けて訂正しています。

## 11・過去の頂き物（下）

髪の毛を優しくなでられる感触で少しずつ目が醒めてくる。

サラサはしばらくの間その気持ち良さを味わう為に目を閉じたままにしていた。

お兄様の手もだけど、暖かいお風が気持ちいいわ。しばらくこのままで寝ていたい。

そこでふとサラサは違和感を覚える。

なんでお風を感じるのかしら？ベッドで寝ているはずなのに。

サラサはその疑問を解決するためにゆっくりとまぶたをあげる。視界に飛び込んできたのは全く予想だになかった人物だった。

「え？」

確かに記憶通り自分のベッドで寝ている。だが、てっきりお兄様だと思っていた暖かく優しい手は、全く別の者だった。

「起きたんだね。サラサちゃん」

そう言いながら優しく微笑みを見せる青年。こちらが眼を覚ましたことに気が付いていながら、代わらずにサラサの頭を撫でている。彼の顔をみた瞬間、寝る前のことを思い出す。寝たふりしようとしたのに、本当に寝ちゃっていたようだ。さきほど感じた風はなぜか彼の身体から感じているものだ。

風を身体から発する人ってどんな人？そもそも空を飛んでいた人間じゃあないのかな？でも幽霊じゃあないと言っていたし。

「俺がだれか気になる？うれしいな。こんなかわいい子に気にしてもらえるなんて」

サラサはその問いに、子供特有のなんでも思ったことを口に出来る素直さで答える。

「うん、気になる！兄さんだあれ？」

「兄さんの名前キラっていうんだよ。特別にサラサちゃんだけに教えちゃう」

優しそうな表情を浮かべて、そう軽く言ってくる青年にサラサは素直に感謝を述べる。よく考えると名前を教えてもらっただけで、感謝しなければいけない理由など何一つなかったのだが、幼いサラサにはそこまで考えることは難しい。

「ワイ。キラっていうのね。ありがとう！風の神様と同じ名前がかっこいいね」

「お！よく知っているね。俺がその神だって言ったらどうする？」

本当に楽しそうにこちらを覗き込みながらとんでもない事を聞いてきた。

「え？キラは神様なの？すごいね。神様って色々しないといけないことあるから大変そう」

サラサは思ったことをそのまま口にしただけなのだが、それに対して栗色の髪の青年はひどく楽しそうにサラサの頭を、いまだに撫

でながらもつと聞いてくる。

「はは。神の心配をするなんてサラサは面白い子だね。サラサは何かしてほしいことないの？」

「んゝ。私はできることは自分でするもん。人にしてもらってもうれしくないよゝ」

神様がサラサに何をしてくれると言うのか。サラサにしたら見当もつかない。だから、普段父や兄にしつけられている、自分のできる範囲でできることは自分でするという考えをそのまま口にした。すると目の前の自称風の神様は、面白いものをみつけた子供のよくな目つきでサラサを見つめる。

「分かってて言っているんじゃないと思うが、面白い。実に面白い。気に入った」

そこまで楽しそうに言うが、突如、目の前の青年の顔つきから雰囲気までがらりと変わる。今までは気のいい青年だったが、威厳あふれる厳かな表情に変わったのだ。だが、サラサは彼を平然と見上げ続けていた。

「サラサ。次の選択から選べ。俺と共にくるか、風の力を持つか。俺はお前に加護をあたえることにする」

そういうと、サラサの前に大きな手をかざす。

サラサはそこまではなされるがままにしていたが、その手がサラサの額に触れるか触れまいかのところで軽く頭を振って拒否を示した。

目の前の青年のもつ雰囲気が変わろうと、幼女であるサラサにはまったく関係ない。



「キラと一緒に行って何するの？サラサ何もできないよ。それにディランがサラサと一緒にになると言ってたから、キラと一緒に行ったらディランとはどうなるの？」

サラサにしたら思い付くままに尋ねただけだ。しかし、キラにしたらことごとく普通と違う彼女の反応を心底から楽しんでいた。

「その年でもう将来を誓い合った相手がいるのか。もちろん、俺とくるならディラン君との約束はなしになるよ」

「将来？誓う？違うよ。ディランがサラサに考えといてねって言うただけで、まだサラサそういうことわからないもん。だから、まだ返事してないよ」

サラサがそういうとキラはますます楽しそに顔に笑みを浮かべる。

「無邪気な小悪魔って感じだな。将来が怖いような楽しみなような・・・。やっぱり見守らせてもらおう。で？どっちがいい？」

どちらがいいと言われてもサラサ自身よく分かってない。ただ、一緒に行くことはまったく選択の余地もないので、それは否定させてもらうことにした。

「キラと一緒に行くことは無理だわ。だってお父様もお兄様もいるもん。いきなりサラサがいなくなったら悲しむんだから」  
「よし、分かった。じゃあ風の力を持つか？」

キラはもうひとつの選択肢を聞いてくる。  
風の力？それはどんなものなんだろうか？  
サラサは疑問に思ったことをそのまま口にする。

「風に乗って空を飛ぶことができるようになるの?」

「簡単にできるな。それどころか竜巻をおこすこともできる」

「竜巻なんかいらないよ。でもなんで、サラサがそういう力を持つのか?別にいらないよ。だってみんなもできないんでしょ?兄様が人になんかものを持つと言うことは、それだけサラサがしなければいけないことが増えることだと言ってたもん。だからサラサはこーしやくれいじょーとして、勉強しなくてはいけないって」

「いい教えだね。でも、俺はサラサに与えるって決めたんだ。別に持つてくれているだけでいい。使う必要もしなくてはいけないこともない。これなら大丈夫だろ?」

目の前の青年はベッドで寝ているサラサの髪の毛を愛しげに撫で、優しい口調で同意を求めてきた。

確かに、持つておくだけでいいなら問題はない。それに少しだけ空を飛んでみたいという気持ちもある。

「本当に持つだけでいいの?サラサ何もしないよ?」

とりあえず念押しでサラサはキラに問いかける。それに対して風の神と名乗る青年は、まるで物を売る商人のようにサラサが同意することを求めてきた。

「俺はサラサを見守り続けたいからするだけだよ。何もなくても俺の姿が見えるってことは、いつかは誰かが俺と同じようなことを言うてくると思うよ。だから何もしなくてもいいと言っている俺の加護を受けていたほうがお得だよ」

正直キラが言っている言葉の半分も意味がわからない。だがその

熱心な様子からわずか5歳のサラサには断ることができなかった。

こうして悪い悪徳商法にかかるように、サラサはキラの望みどおりに風の加護を受けることになった。このときより風の神が頻繁に彼女のところに姿を現すようになる。

サラサが物の道理が判る歳になり、とんでもないものを授かってしまったことを把握してからは姿をみるたびに加護を解いて欲しいと訴える。

しかし、風の神は他人事だとばかりに面白そうな表情でサラサにこう言ってくる。

「俺の恋人になると、そのまま加護を受けるのとどっちがいい？俺としては恋人を選んで欲しいところを我慢しているんだよ？」

結局のところ、その回答になんとも返事することもできずに、あれから今に至るまでサラサは普通の人が持つていない力を無意味に持つ羽目になっていた。

身内と幼馴染のディラン以外、彼女が風の加護を受けていることを知る者はいない。

国を治めるものや少しでも野心のある者にとって何よりも魅力的な能力であるが、極々平穩に過ごせることを望むサラサにとってまったくもって無用の長物でしかない。それをよく知っている彼らが他言することもなかったため、秘密は外部に漏れることなく守られていた。

11・過去の頂き物（下）（後書き）

## 12・甥が懐かない幼なじみ（前書き）

前半は神話の設定を入れています。とうとう名前だけですが『女神の憂鬱』の登場人物が入っています。

## 12・甥が懐かない幼なじみ

神と人。

光の神であるレイヤと闇の神であるゼノンが、何も無い空間に自然に生まれたことから世界創造が始まる。

その後、大地、水、風、火、太陽、月など様々な神が現れ、神の国ができる。その下界に大地が創造される。

神々が思い思いにそのキャンバスのような大地に触れ、海や湖、山などができる。

そのころには樹木や花の神も現れ、その神々も下界に降りては思い思いに木や花の種をばら蒔き、森や樹海ができる。

レイヤとゼノンが力を合わせてその自然を守る生命体を作り出し、下界に住まわせる。

その後、知恵の神が現れその生命体のひとつに知恵を授け、人間が誕生する。

その後、戦、酒、眠り、商売、癒し、守護などの神も現れる。

それにより、人間たちはさまざまな信仰を持ち、自分たちの文化から国家まで創っていく。

神を感じ取れる人間が存在するようになり、その人を神官として神殿がそれぞれの国に建築されることとなった。

新しい神が生まれ人間界に降り立つと、その者が神を感じ取り信仰が生まれる。

さらには神自身が、その時代に必要な者を見出しその物に自分の力の欠片を授ける場合がある。

それを加護と呼んでいる。さらには加護を与えられた者を加護者と呼ばれていた。

歴史上様々な偉人たちがその力を授かって偉業を成し遂げている。有名な人物をあげれば、戦神オリセントの御子ターチェン帝、光神レイヤの申し子ダラー、癒しの女神フウカの恩恵を得たゼーン王などがいる。

その時代によって人数はかなり変動するが、全世界に数人から十数人ほどしかないだろう。生存中で広く知られている者となると、5本の指にも満たない。

公爵領であるラーゼの森は今、生い茂る新緑に包まれていた。暖かくなってきたので植物も全身に太陽を浴びて成長や芽生えをしているのだ。

サラサはジュリアンと数人の従者やメイドを引き連れて、その森の中にある小さな湖まで足を運んでいた。

今日はあの忌々しい王宮での舞踏練習の日ではない。よってサラサは思う存分ジュリアンとの時間を堪能できるのだ。

サラサは大きな日傘を差しながら、湖のほとりに敷かれた布の上

に座って湖のほうをみつめていた。

いや、正確にはもみじのような手で何度も水面を叩き、水しぶきを上げている小さな男の子を、蕩けそうなほど優しい笑みを浮かべながら眺めていた。社交界などでしか接したことのない者が見れば、いままで見た彼女の笑みがいかに作り物の仮面であつたか、思い知るに充分なほど極々自然な笑みである。

「ジュリアン。水ばしゃばしゃは楽しい？」

サラサはこちらを窺いながら水しぶきを楽しんでいる甥に声をかけた。それに対して、男の子は満面の笑みを浮かべて何度も頷く。連れてきて正解だったわね。今日は本当にいい天気だし。

甥にもつと関わりたくてサラサは立ち上がり湖の淵に布を敷き直してから座る。そして、片手を湖にゆつくりとつける。

水温は日光を浴びているおかげでほどよい温かさになっていた。

少しだけ掬ってそばのジュリアンの身体にかける。

すると、ジュリアンはきゃっきゃと声を出しながら笑い喜んでいた。

「サ〜ラ〜」

愛くるしい金色の天使であるジュリアンは、満面の笑みを浮かべ全身びしょぬれになりながらサラサのほうに近寄ってきた。

かわいいわ！でも、このまま抱きつかれたら私まで濡れてしまうわ。さすがに私の分まで着替え持ってきてないし……。

仕方がないので、ジュリアンの手が届かないところまで少しだけ後ろに下がることにした。

「だっこ〜」



しかし、ジュリアンは湖のふちからサラサに向かって両手を広げてだっこをせがむ。

甥馬鹿であるサラサにはそのしぐさは会心の一撃で、冷静な思考回路を失わせるほどのものだった。

ほとんど無意識にびしょぬれのジュリアンに手を伸ばしかける。

だが、それは第三者の手で阻まれた。

抱こうとしていたジュリアンを横からさつと移動させられたのだ。隣を見ると、いつのまにいたのか、幼なじみのディランがジュリアンに布をかぶせてごしごしと髪を拭いていた。

拭かれているジュリアンは可愛らしい眉間にいっぱい皺をよせて嫌がっている。

「サラサ。ジュリアンを甘やかすのも大概にしないと駄目だよ」

手を動かしながらディランは楽しそうな表情でこちらを見てくる。

「ディ〜やあ！サ〜ラ！」

ディランの腕の中で暴れているジュリアンも必死で、サラサのほうに腕を伸ばしながら助けを求めている。少し前からジュリアンはディランのことが気に入らないようで、顔を合わせるたびに嫌を意味する「やあ〜」やさよならを意味する「ばいばい」を繰り返し彼に向かってしている。

そつとディランから布ほどジュリアンを受け取り、濡れた頭を拭く。いっぺんにジュリアンの表情が笑顔になり、楽しそうに拭かれる感触を楽しんでいた。

そうしているうちにメイドが着替えの服を持って着てくれたので、着替えさせてもらうことにした。

「今日はどうしたのかしら？ディラン」

「そりゃあ、愛おしいサラサに、今日こそはいい返事を貰おうとこまで来たに決まっているだろ?」

「・・・なんの?」

「求婚の返事に決まっているだろ?」

相変わらずしょっぱなからぶつとんだことを言ってくるものだ。そもそも冗談ばく会う度に求婚してくるが、そのつどその気がないことをきちんと告げているはずだ。しかしそれを忘れたかのように再びこのように聞いてくる。

しかたがないので、2年前からすっぱくなるほど言い続けている断り文句をつけることにした。

「何度も言うけど今は誰とも結婚するつもりはないわ。私はジュリアンが大切なんだから離れるなんて考えられないもの」

「適齢期になるまではまだ早いからという理由で断ってたのに、適齢期になったとたんジュリアンを出して断るなんて、あまりにも冷たくない? 僕はこんなにサラサー筋なのに・・・」

ディランはわざとらしく傷ついたような表情をサラサに向けながらそう言ってくる。その姿は彼の通里名の『憂い』を帯びた美青年そのものだ。その姿に絆されてしまう女性も数多く存在するだろう。だが、長年の付き合いのあるサラサにはなんの効果もない。いつものごとく、彼の口説き文句は聞き流すことにした。何の用なのか聞くと彼は小さくため息をついた後、すこし真剣な表情になってサラサを見てくる。

「サラサ。ガイヤに聞いたけどソージュール王子と逢引をしているんだって?」

サラサは一瞬、理解不可能な言葉を言われて頭が停止してしまう。

逢引？

逢引などではなくただの舞踏のレッスンだ。それもサラサにとっては拷問の時間のようなものだ。

「・・・本当に兄様に聞いたの？逢引でなくただの踊りの練習に付き合っているだけだわ」

「踊り！？じゃあ王子はうらやましいことに、サラサの身体に長い時間密着しているんだ！付き合いの長い僕でもそんなに踊ってもらったことないのに・・・」

ディランはますます顔を悪く憂いを帯びた表情をしながら、サラサに詰め寄ってくる。サラサにとっては逢引という言葉を訂正したかったのだが、それ以上にディランは踊りという言葉に反応を示していた。

「あゝ本当にくやしいな。王子でなければどんな手を使っても駆除するのに・・・」

ディランは剣士とは思えないほど虫も殺せないような風貌をしていながら、中々黒い発言をするものである。

「ありえないとは思うけど、サラサは王子に惹かれたりしてないよね？」

そう言われてサラサは力強く無言で頷くことにした。ほとんど脅される形でそのレッスンに付き合わされているのに、どこに惹かれる要素があるのか。腹黒は兄様とこのディランで充分である。それにあの歳であれば腹黒なのだ。未恐ろしく感じてしまう。関わりたくないと全身で拒否反応が起こっても仕方ないだろう。

「よかった。否定されたら強引にでもサラサを婚約者にしてしまおうと思ってたよ。でも気を許さないようにね。僕はこうして君の気持ちが変わるのを気長に待っているけど、それは今まで誰も僕以上に君に近づく男がいないからだからね」

もし横から搔つ攫おうという気配を感じたら容赦はしない。

サラサの顔を極上の獲物をみる野生の獣のようなディランの鋭い目つきは、サラサにそんな意思を告げていた。

あまり見たことのない幼なじみの表情にサラサの背中にぞくりと寒気が走る。鷹に狙われたウサギの気分になる。

サラサは硬直しながらも、どのように対処したらいいか必死に考えていたが、そこに最愛の天使による助け舟が到着した。

「ディー！サララ、ダメ！ジュのん！」

ズボンだけ履いて上半身裸であるジュリアンが、サラサの広がるスカートにすがり付いてきたのだ。顔はディランのほうをむきながらダメ！ダメ！と連発で叫んでいる。

すぐ後ろではメイドが、ジュリアンにきちんと服を着せようと追いかけてきている。

さすが、私の愛くるしい騎士だわ。私を守ろうとしている姿が本当に可愛らしいわ。

サラサは満面の笑みを浮かべながら、メイドが持っている上着を受け取りしゃがみながらジュリアンに服を着せた。ジュリアンも今まで暴れたのが嘘のように、大人しくサラサに着替えさせてもらっていた。

「サ〜ラ。ありん。ちゅき！」

着替えさせ終わると、ジュリアンはしゃがんでいるサラサの頬に

顔を近づけてくる。

ありがとうのキスをしてくれる体勢だ。サラサは届くように顔を傾けて、小さな唇の感触を受け取る。

サラサもお返しとばかりにぎゅっと小さな身体を抱きしめて、その頬に唇を寄せた。

ぷるんとした頬の感触が本当に気持ちがいい。

「やっぱり気長に待つだけでは駄目かなあ。ますますジュリアンに溺れちゃってるみたいだし。このままだと僕もサラサも適齢期を過ぎてしまう気がする」

サラサとジュリアンが周りの目をまったく気にせずに二人の世界を作り上げているのを横目に、デイランは大きくため息をつく。そんな彼の独り言は幸いなことなのか、誰の耳にも入ることはなかった。

## 12・甥が懐かない幼なじみ（後書き）

おそくなりましたが、明けましておめでとございます。  
すこし行間などを訂正しました。

見やすくなればいいのですけど・・・。

13・神が力を授けるとき、人相手だと加護者で石だと恵輝石になります。

「サ〜ラ、こっち〜」

服を着終わったジュリアンは大きく手を動かし、きゃっきゃと喜びながらサラサから離れていった。

最近彼がはまっている追いかけてをしようとしているのだ。

サラサは追いかけてようとスカートを少し持ち上げようとするが、その手を隣の幼なじみにつかまれて阻止された。

「ナンシー。サラサは僕と話があるから、ジュリアンを頼む」

ディランはそばに控えていたすこし恰幅のいい女性に声をかける。ジュリアンの乳母であるナンシーは判りましたと、軽く頭を下げてから走っていったジュリアンの下に行く。

泣きそうな顔をこちらに向けながらもジュリアンはナンシーに抱っこされている。

ジュリアンとの時間を邪魔されたサラサは、感情を隠すこともなく眉をしかめて幼なじみをにらみつけた。

元々きつい顔立ちをしているだけにその表情はひどく威圧的である。切れ長の赤い瞳が鋭く光っている。初めて彼女の顔を見る者がいれば萎縮して、その場で立ちすくむか、逃げ出そうとしてしまってもおかしくないほど凄みがあった。

幸いなことにここにはディランをはじめ、周りの仕える者たちもサラサとは長年の付き合いのためサラサの気質をよく知っている。だからその表情がただの不機嫌を丸出しにしているだけであることを理解していた。

真正面からそんな顔で見られているディランは、萎縮するどころかもっと楽しそうな表情になって彼女を見下ろしていた。

「そんな怖い顔するものじゃあないよ。せつかく来たのだから僕との時間を作って欲しいって言うのは僕の我がままかい？」

私としたらそんな時間いらないからディランの我がままです。

サラサにしてみればそうはつきりと告げたいが、告げたところで逃がしてくれるような性格をしていないことを十二分に判っているので、軽くため息をつくだけに留まった。

サラサが黙っている間にディランは手を軽く振る。周りにいた者たちはよく心得ているもので、こちらの会話が聞えないほどの距離をとる。さすがにそのあたりは教育が行き届いているのだ。

二人だけの会話ができるようにしてからディランの顔から楽しそうな表情が形を潜めて、珍しく真剣な顔つきになった。

「サラサ。王子は君が思っている以上に鋭く叡智豊かなお方だ。本当にこのままで大丈夫かい？」

やはり猫かぶり同士何かわかるものがあるのだろうか。

サラサ自身が王子と関わったのはこの前の舞踏練習をいれてもわずか3回だ。どれも表面上は無邪気で利発的な少年を装っている。

サラサは彼の腹黒いところを実際に見たからそれが仮面であるとわかってはいるが、ディランは見ることもなくなにかを感じ取っているのだろう。

「大丈夫なものにも王家の申し出を臣下の家の者が断れるわけないわ」「そういうことを言っているのではないと判っているだろう？」

判っている。ディランが何を心配しているのか。

サラサがまったく使用してないとは言え、今の世界で片手ほどしかないと言われる『加護者』だからだ。



それを知っているのは兄のガイヤとディランと父親であるアルンバルト前公爵のみ。

他の者に知られるわけにはいかないのだ。

知られればどうなるか世間をよく知らないサラサでもわかる。

神の加護を受けると一国を覆すほどの力を得る場合もあるのだ。実際そういった逸話も多い。だから加護者がその国にいてということだけでも周りの国の者にすれば脅威になりうるのだ。

今のところ隣国との関係はすこぶる良好で平穏な日々をすごしている。だから戦場にかり出されることはないだろう。

しかし、隣国などを牽制する目的で大々的にその存在をお披露目される羽目になる。

そして一生その身を国に縛られることになるのだ。サラサにとってそんな生活は到底耐えられない。

「・・・少なくとも今は悟られているわけではないわ。週に1回を1ヶ月続ければいいってことは、あと3回ほど付き合うだけだから大丈夫よ」

それに・・・とサラサは話を続けながら首の後ろに手を回した。

「このお守りがあるからいざと言うときも大丈夫よ」

そういつて首から差し出したのは小指ほどの大きさの青の珠がついたペンダントである。

首に掛けられた細い鎖は長いためにその珠は普段服の下に隠れるようになっている。そしてだしてきた珠は透明度もなく濁っていてお世辞にも綺麗な輝きをしていない。

「恵輝石のくずを持っているのもわかってるよ」

ディランはサラサの手に収められたそのペンダントの石を見ながらそうつぶやいた。

## 恵輝石

別名を『神の石』とも言われている。

その石の形態は様々である。一般に流通しているような宝石であつたりただの石ころである場合もある。

違うのはその石に神の力が籠められているという点だ。

どのように出現するのかいまだ説明されていない。今までただの宝石であつたものが突如変貌を遂げる場合もある。

レーヤゼンに住まれる神々が各々の力をこめて人間界に施しを与えているのだろつと言われている。

その石を使えばだれでも神の力を使うことが出来るのだ。ただし一度だけ。

それだけに力を宿っている状態の恵輝石は、一つで一般家族4人が半年は優雅に過ごしてしまうほどの価格で取引がなされるのだ。

しかし使用してしまつたあとはもともと高価な宝石であつたとしても、ただの石ころ同然の価値しかない。

神の力を授かっているときは特徴のある輝きをみせるが、使用してしまうとどんな石であつてもひどく濁つてしまつからである。

「これがあればもし思わず力を使つてしまつても大丈夫でしょ？」

恵輝石により力が出現したと誤魔化しがきくからだ。

だれも石ころ同然の物を飾りとしてつけているとは思わないだらう。

サラサにとってこの石ころでしかないペンダントは万が一のときのためのお守りになっていた。家ですら風呂に入る時以外服の下に

身につけるのが習慣になっている。

「判っていると思うけどごまかせるのも1回だからね」

念押しとばかりにディランはサラサに忠告をする。

ディランにとっては不本意だろうが、サラサにとってこの心配性な幼なじみはもう一人の兄のような存在である。わずらわしい部分もあるが心から自分の心配をしてくれているのは充分判っているの  
で、素直に頷きながら礼を言うことにした。

「ありがとう。もちろん気を引き締めながら殿下には接するようにするわ」

サラサに最低限の忠告ができたディランは、とりあえず満足したようだ。ガイヤに用があるらしく「じゃあ行くね」と軽く手を振りながらサラサたちから離れていった。

ディランが背をこちらに向けたのですぐに可愛い甥っ子の姿を見る。

ナンシーに抱かれながらこちらをじっと見つめている。  
軽く泣きそうな表情を浮かべている。

「ジュリアン」。追いかけてこしましょ」

サラサは気を取り直してジュリアンの下へ戻ることにした。  
それによっていっぺんに機嫌をもどしたジュリアンと二人で長い時間追いかけてこを楽しんだ。

まったくもって高位の令嬢らしくないふるまいであったが、サラサをよく知り尽くしている仕える者たちは咎めるどころか微笑ましいといった表情で二人を見守っていた。

13・神が力を授けるとき、人相手だと加護者で石だと恵輝石になります。

（後

少し説明調ですね。

早く話をすすめたいです。

#### 14・悪女顔、本領発揮

いよいよ魔の時間が到来した。例の舞踏練習2日目である。この日も馬車に乗って来城することになった。

サラサは扇で口元を隠し、目の前の案内人の従者たちに気付かれないようにしながら、小さくため息を吐く。あと数分歩くと二重人格の殿下が待つ部屋へ到着してしまうからだ。

ああ・・・仮病を使えたらいいのだけど。

そう思うとおのずと進む速度が落ちて従者たちからすこし距離ができていた。

そのときである。

いきなりドレスを後ろのほうから引つ張られて、思わず足を止めてそちらのほうを振り返る。

そこには金色の軽くウェーブのかかった小さな令嬢がサラサのドレスをひっぱって、そばにある部屋のほうへ連れて行くことがんばっていた。

7、8歳ぐらいだろうか。サラサの腰ぐらいしか身長がないのでいくら全力でも連れ込むことは無理だろうに、真っ赤な顔をしてサラサのスカートをわしづかみにしてひっぱっている。

か・・・かわいい！

その愛くるしさに思考回路が停止してしまい、サラサはその幼女のほうに着いていつてしまった。けっしてこれからの授業に行きたくないからではないと弁解しておきたい。

幼女はサラサを部屋に入れるとすばやく扉を閉める。すかさず施錠までしっかり自らの手で行う。

その間に連れ込まれたサラサは、その可愛らしい誘拐犯を観察することにした。

着ているドレスからアクセサリー、靴まですべて超一流品でおそらく最新の流行のものだ。

それに金色のこの髪にグリーンにもブラウンにも見えるヘーゼルの大きな瞳は最近見るようになったモノに酷似していた。

目の輝きはまったく違うけど・・・。

サラサ的にはあたってほしくないけど、おそらくこの推測はあたっているだろう。

どうして、この一族はこうも強引なんだろう。やっぱり王族だからなのかしら？

サラサは遭遇してしまった二人の王族を頭に思い浮かべながらも、目の前の三人目の可愛らしい行動をただ見守っていた。前の二人とちがって幼いというだけで子供好きなサラサにとって、仲良くなりたいと思えるのだ。

まあどうせ怖がられて無理でしょうけど、がんばってみるぐらいはいいよね。

ようやく施錠し終わった少女は大きく息を吐いてから、こちらに顔を向ける。

愛くるしい頬が真っ赤に染まっている。睫毛も長く少し勝気そうな瞳でサラサを凝視している。

その可愛らしさに思わずサラサの顔に笑みがこぼれてしまう。だが、その笑みを見た瞬間、少女の全身が寒気でも走ったかのようにびくつと振るえ、表情も硬くなってしまう。

やっぱり私の笑顔って怖がらせるだけのモノなのね。本当にせつ

ないわ。

サラサは内心思いつきり傷ついてしまうが顔には出さないよう努めた。

「わ・・わたくしはあなた・・あなたなんて怖くないわ！」

サラサはいきなり可愛らしい誘拐犯にそう宣言された。

気丈にも彼女は顔面蒼白になりながらサラサを睨みつけている。だがエメラルド色の大きな瞳は若干潤んでいる感じだ。泣き出した、逃げ出したい気持ちを必死にこらえているのが手に取るように判る。

それでも正直言つて怖くないと言われてわずかに傷が癒えた。それが強がりであるとわかつているが、逃げないと言うことは話が出てきて誤解を解くこともできるからだ。今まで10歳未満の子でサラサにぶつかって来てくれた者は片手ほどしかない。

「お・・・お兄様にこれ以上ち・・・近寄らないで！」

その声は見事に裏返っている。やはり目の前の少女はサラサの予想通りのお方だ。近寄ると言われる覚えがあるのはあの猫かぶり殿下しかないない。そしてその彼を兄と呼ぶ少女となるとこの国で一人しかないからだ。

はい、近寄りませんと本音を盛大に宣言したいものだ。

とりあえず、立場が上となる少女に対して腰を落とし、臣下としての礼の形をとる。

「フローレ王女様とお見受けいたします。初めてお目にかかります。わたくしはサラサ・レダ・アルンバルトでございます。お兄様とはソージューケル殿下のことです。よろしいでしょうか？」

サラサはほとんど確信持っているがとりあえずそう訊ねることにした。王子との約束があるので近寄らないと宣言することは不可能だが、やはり彼女と仲良くなりたいたいのできちんと説明したいからだ。

「そ・・・そうよ！最近、あなたがお兄様に言い寄っているってみんな言っているのだから！」

少女・・・フローレ王女は責め立てるように声を大にする。

んゝやはり王妃との血のつながりを感じるわ。この自分の感情を隠せないところとか眉のしかめ方とか。でも、フローレ様だとそれが可愛らしく感じてしまうのだから、私も相当子供に飢えているわね。

それにしてもやはりそういう悪評になっているんだ。王妃経由だから今まで以上に盛大に叩かれているんでしょうね。

サラサは内心かなり大きな傷を受けながらもとりあえず冷静にその誤解を解くために口を開いた。

「わたくしはひとえに殿下の舞踏の練習台を努めさせて頂いているに過ぎません。それもあと2、3度こうして参上すればお役目ごめんでございます」

「うそをおっしゃい！建前はそうでもお兄様を誑かそうとしているのでしょー！」

誑かす・・・この王女様はなかなかすごい言葉を知っていらつしやるようだ。たしか王女は8歳だったはず。そんな幼い姫に周りの者はどうしてそんな言葉を聞えるようにうわさをするのかしら。



サラサは自分の根も葉もないうわさよりもそっちのほうに呆れてしまい小さくため息をついた。そしてサラサとしては精一杯笑顔を作って王女と向き合う。だが、悲しいことに王女の瞳により一層、怯えの輝きを浮かべるようになってしまった。

「王女様には不愉快な思いをさせてしまつて申し訳ございませんが、臣下の身なればこちらからお断りすることもできません」

代わつてくれるなら誰でもいいから代わつて欲しいとか殿下にまったく興味ないどころか、関わりたくないですとはさすがに口にできないサラサはこの理由ぐらいいしか王女に言えない。だから王女はこちらの言い分をまったく信用してくれなかった。

より一層頬を紅潮させて涙がたまつた大きな目を吊り上げる。さらに興奮が抑えられないようにで身体をゆらし手を大きく揺らした。

サラサは目の前の王女の癪癪を抑えられない幼い姿が、ほんとうに可愛らしくてうつとりと見つめてしまった。

すると、幼い王女は誰が見てもわかるほど大きく身体を震わせて扉のほうへ身体を向けてさつき自分で閉めたはずの鍵を急かされるように開錠する。

「と・とりあえず近寄らないで！」

王女は鍵を開けると、サラサに背をむけたままそれだけを途切れ途切れに言つて逃げるようにその部屋から姿を消した。

残されたサラサは扇を頭に当てて頂垂れる。

「やつぱりわたくしは怖がられてしまふのね……。本当に悲しすぎるわ」

勝手に連れ込まれた小部屋には他の者が存在しなかったために、

サラサのこの心からの眩きを耳にする者はいなかった。

#### 14・悪女顔、本領発揮（後書き）

幼い王女登場です。

誤解しまくりな王女の内面を次回書きたいものです。

# 小話：ディランが剣士になった理由（前書き）

汀雲さまからまたまた可愛いイラストを頂きました。  
それに対しての感謝もこめての話です。

サラサが小さいときのイラストなので小さい頃の話にしてみました。

これはサラサ3歳、ディランとガイヤ10歳の頃の話です。

## 小話：ディランが剣士になった理由

「サラサ。僕のお嫁さんになってね」

「お嫁さんって何？」

「僕とずっと一緒にいてくれるだけでいいんだよ」

「ディーとずっと一緒？お兄様は？お父様は？4人で一緒にいるの？」

「ちがうよ。僕とだけ一緒にいるんだよ」

「えーやだ。お兄様とお父様と一緒にでないとやだもん」

「サラサ。二人とは別に別れなければいけない訳ではないよ。ただいつかは、一番そばにいる人を一人つくらなければいけないんだ。その一人を僕にしてくれないかな？」

「ん？サーラよく分かんない。ディーのことは好き。でもお兄様はもつと好き」

「そっか……。じゃあ僕はガイヤより好きになってもらえるよう努力するよ。ちなみにお兄様のどんなところが好きなんだい？」

「ぜーんぶ好き。けんでおっきなおじ様たちをたおすんだよ。すごいでしょ」

「サラサは強い人が好きなのかい？」

「うん！大好き！」

「僕がガイヤより強くなればお嫁さんになってね」

「サラサ。今日はどうしたのですか？いつもより大人しいようですけど」

「あのね、あのね。お兄様。ディーがね、変なこと言うの」

「ディ？ディランのことですか？何を言われたのです？」

「サーラがお嫁さんなんだって」

「・・・」

「一緒にいるってことがお嫁さんになることだって。でも、大好きなお兄様やお父様のお嫁さんにはなれないって。どうしてなの？」

「・・・サラサ。お嫁さんにならなくても私も父上もずっとサラサのそばにいますよ。約束します」

「えーそうなの？デイーうそついたの？」

「そうです。だから彼が言ったことは忘れなさい」

「ん〜でも、デイー、お兄様より強くなってサーラお嫁さんにするって。どうしよう・・・」

「サラサ。私はデイーに負けませんよ」

「うん！お兄様は強いもんね！大好き！」

「私もサラサが好きですよ」

「わ〜い！」

「いい事思いつきました。今度デイルンに会ったら××××××××××  
と言ってあげなさい。そしたら彼はもううそついたりしないでしょうから」

「×××××ってなあに？」

「デイルンのことです」

「うん。わかった〜」

「ねえ〜サラサ。僕はまだ剣を習い始めたばかりだからまだまだガイヤに追いつかないけど、必ず越えてみせるからね」

「習いたてなんだ！がんばってね、デイー」

「サラサを貰うためだからね。苦手だった剣術もがんばってみるよ」

「あ、そうだ。えーと、デイーに言わないといけないことあったんだ」

「ん？なに？」

「えーと、えーと。あのね。たしか・・・」

「ん？」

「ロリコンはお断り！」

「！！」

「デイーはロリコンなの？」

「・・・その言葉は誰に聞いたんだい？つてか一人しかいないか。ガイヤがそう言ったの？」

「うん！」

「・・・あいつ、ぜったいいつか倒してやる・・・」

これが文官肌であったデイランが、オリエンダーン国有数の剣士にまでなったきっかけである。

> i 1 7 7 6 2 — 1 7 2 0

<

小話：ディランが剣士になった理由（後書き）

今回は小話です。

ちなみにこれから10年後にようやくガイヤを倒すことができた  
ディーくんでした。



## 15・うさんくさい視線（前書き）

久々の更新になってすみません。

## 15・うさんくさい視線

小さな嵐が去った後サラサは一人、その小部屋で呆然としていたが、扉の向こうで自分を呼ぶ声が聞こえたのでそつと廊下に出る。そこには案内人の男性が慌てふためいた表情でサラサの名を呼んでいた。サラサの姿をみた瞬間はひどく顔をしかめて問いただそうとしたが、サラサが軽く微笑みながら頭を下げると我を忘れたかのようになり立ち尽くし微動だにしない。

ごまかすために微笑んだのだけど、この方には効果がありすぎたようだわ。

仕方がないのでサラサはこの状態を打破すべく、手に持っていた扇をわずかに開いてまた閉じた。

パチン

その小さな音を聞いて案内人の男性は我にかえり、慌てて従来の仕事に戻った。

こうしてわずかに遅れて本来の目的地である部屋に到着をした。

サラサは遅れてしまったことを詫げる。すると殿下は猫かぶりの笑顔で不問にしてくれた。そしてすぐに練習が始まる。

しかしサラサは殿下の肩に手を乗せ踊りながら、前回にない視線を二つ感じて居心地の悪い思いをしていた。

怯えを帯びたものと、好奇心を隠しもしない不躰なそれ。前者は

さきほど逃げるように立ち去ったはずの幼い王女である。部屋の扉近くに配置されている甲冑の置物の影に隠れながら、真っ青な顔でこちらを見ていた。

そんなに怖いのかしら。やっぱり自分にはジュリアンしかないんだわ。それにしても怖がりながらも来るなんてよほどの殿下が大切なのね。

王女にとっては兄にちょっかいをかけてくる、憎い敵としか認識されない我が身に虚しく感じてしまう。

まあこれもあと二回程の辛抱だわ。

サラサはそう自分自身を慰めながらも一つ一つの視線の先を見る。

そこには初めて見る青年が立っていた。

左目には片眼鏡であるモノクルをして右手で杖をついている。だが、年齢は兄やディランよりいくつか年上程度だろう。赤銅色の髪をひとくくりにして右の肩から前に垂らしている。モノクルをかけたグレーの瞳はどこか危険な香りをしている。

どちらかといえば地味といえる顔立ちだが、どこか異性を惹きつけられる魔力のような不思議な魅力を感じさせるものであった。

しかし兄やディランを見慣れているサラサにとっては、どこか胡散臭く感じるに過ぎない。

だれ？練習がはじまってすぐにこの部屋に無断で入ってきたけれど……。ソージュケル殿下もまったく気にしてないから関係者かしら？

この疑問については一曲踊り終えてから教えてもらえることになった。

「初めまして。私はヤトレイ・ウィークワセと申します。僭越ながら殿下の教育係をさせていただいています」

その後に関き飽きた容姿に対する称賛の言葉を聞き流しながら、サラサは愛想笑いで対応した。

正体を知ることとはできたのだが曲がりなりにも王室の教育係が、こんな好奇心一杯の視線を女性に送るってどういうことなのか。

秋波やいやらしい目つきでないので嫌悪感を感じることはないのだけど、それでも不快である。それを分かっているであろう殿下もまったく咎めようとしない。

サラサに向ける笑顔をみた瞬間、最近よく鳴る警報が頭の中で鳴り響く。

この笑顔……。ディランにそっくりだわ。それにどこか殿下にも似ている。

顔たちはディランをいくらか地味にした感じで、その微笑み方は数回見てしまった猫かぶりをはずした殿下に似ていた。殿下より数段たちが悪そうに感じるのはなぜだろう。

もしかしなくても殿下がこんな性格になったのはこの人の教育のせい？

「サラサ嬢には我が従弟殿がたいへんご迷惑をかけております」

そう言われて一瞬だれのことか分からなかったが、さきほど聞いたウィークワセという名前がウイデリー公爵家の分家であることを思い出す。やはり目の前の青年と幼馴染みは、気のせいではなく血のつながりがあるようだ。

「いえ。わたくしのほうこそ兄のガイヤ共々、ディラン様には本当によくしていただいております」

「あいつが貴女に熱を上げていることは有名ですし、一度こうしてお話してみたいと思っていたのですよ」

ディランのことをあいつと言う。つまりそれほど仲の良い間柄なのだろう。サラサは今までほとんど社交界には参加しても、積極的に誰かと関わろうとしなかった。そのために、ディランにとって兄のガイヤ以外に親しい人物がいることを今さらながら知る。あれほどの長い付き合いがあるのに、今まで知らなかった自分の世間知らずさを感じずにはいられなかった。

本当のところ、ガイヤとディランによって彼の接触を阻止されていた為、知り会う機会がなかったただだがそのことをサラサが知る由もない。二人によつて一癖も二癖もあるような人物を数名ピックアップしたブラックリストが作成されている。それらの人物が参加するような小さな催しには彼女を参加させずに、先日のような大規模なものか、彼らがいないモノだけに参加させるようにしていた。出不精なサラサにしたなら好都合だったために兄が参加を強制するものが、かなり厳選されたものであることを悟ることはなかった。とは言え、サラサがもしそれを悟ったとしても咎める所か、逆に全て不参加にしてと懇願するだけだが。

ディランが所構わずに口説くようなことを言うので、たしかにあれでは有名になってしまいうだろう。いくら止めてほしいと告げたところで逆にもっと熱い言葉をぶつけてこられるので、最近ほぼ諦めていた。

キラといいディランといい、なんで私に興味を持つ人はこうも人の願いを無視して自分の好きなようにするのかしら。あ、キラは人でなく神だったわ。あれが神だなんて一種の詐欺ですわ。

サラサはかなり不遜な事を頭の中で考えてしまった。  
だが、その瞬間に目の前の男性から小さな笑い声が聞こえた為に、  
考え事はここで一端終了となる。笑われる要素がわからなくて、思  
わず目の前の青年を見つめた。

「失礼。殿下がサラサ嬢に興味を覚える理由がよくわかったもので  
本当に実際に間近でお会いしないとわからないものですね」

「ヤトレイ。彼女は私が招待したのだから余計なちよっかいかける  
ことは禁止だよ」

殿下はヤトレイと言われた怪しい容貌の青年にそう言う。

何か興味持たれるようなこととしてしまったかしら？

サラサは心の中で頭をひねる。最近是人前で感情を顔に出すよう  
なへまはしない技術を見に付けたはずだ。この視線から言って容姿  
に惑わされているわけではないのは確実だ。

それにちよっかいって・・・

殿下にそれを言わすぐらいやはり目の前の青年はやばい方なのか。  
サラサの中で警戒心が強くなる。

「そんなことを言ったってこれほど素晴らしい令嬢に会って興味を  
持たないってほうが無理ですよ、殿下」

ヤトレイはサラサのほうを見ながらひどく楽しい表情を浮かべ  
ている。しかし、言葉とはうらはらにその視線に、下心のようなも  
のはまったく感じさせない。ただ純粹に面白いモノを見つけた時の  
子供のような好奇心だけだ。

沈黙を守っているサラサをよそに二人は言いあいを続けていた。

「それでも、私が禁止と言ったら禁止なんだよ」

「ディランの恋敵になりたいと思っただけだ、殿下に禁止されてしまったら諦めるしかないかな。ですがサラサ嬢さえ私に興味持って下さるのであればいつでも歓迎いたしますよ」

「ありがとうございます。ですが、私がヤトレイ様と親しくさせていただきますと、何かとご迷惑をおかけすることになると思いますので遠慮させていただきます」

サラサはやんわりと断りをいれる。ほっとくといつまでも不毛な会話が続きそうだからだ。

いったいこの人は何のためにここにいらっしやったのかしら？もしかしたら殿下に私が言い寄っているという噂を聞きつけて、その真相を探りにきたってのが一番ありそうだけど。

「断られてしまいましたか。手厳しいですね。ですが、簡単に折れない花こそ男にとって魅力的であることをお忘れなく」

ああ・・・ディランと同じ血筋を感じるわ。従弟ってことはけっこう血のつながりが濃いし。

サラサはもう口を割るのもわずらわしくて、小さく笑みを浮かべながら沈黙を保つことにした。

16・使ってしまったものはしかたないですわ（前書き）

ちょっと短いです。



## 16・使ってしまったものはしかたないですわ

「で？なんのためにきたんだ？」

ようやくここで殿下がヤトレイに用件を聞いてきた。

「それはもちろん、サラサ嬢とお知り合いになるために・・・ってのは半分で、殿下に伝えるべきことがありましたので、こうして足を運ばせて頂きました」

半分はサラサと会う為なのか・・・。

サラサは関わりたくない人物だと認識を新たにしながら、そつと二人のそばから離れることにした。殿下に伝えるべきことを自分が聞くわけにいかないからだ。たとえ聞いても支障のないことであっても聞きたくもない。

ヤトレイはサラサの気遣いに軽く頭を下げ、殿下のそばに行つて先ほどと違って真剣な表情で話をしていた。

こうなると彼らをじつと観察してるのもどうかと思うので、部屋の扉の方向へと足を進める。

とその瞬間、甲冑の後ろに隠れている小さな身体がびくつと大きく揺れた。フローレ王女が真つ青な顔になりながら拳動不審に頭を左右に振っていた。どうしようか思いつきり迷っているようだ。その姿はどこか小動物を連想させる可愛らしさがあつた。

可愛すぎるわ・・・。

なんとか彼女を怖がらせないようにゆっくりと歩みを進める。もちろん、笑顔も忘れない。

怖い笑顔にならないようできるだけ口元を下げる。

しかし、小さな王女は余計に顔を青ざめている。

あと数歩で彼女のそばに行ける距離になると、耐えられないとばかりに王女が勢いよく甲冑から身を離そうとした。その時事は起る。

ガタン！

王女は慌てふためいた為に甲冑に足をひっかけてしまう。そのせいで、甲冑が手にしていたハルバードが転げ落ちた彼女の上に落ちてくる。

危ない！！

しかし、斧のついた槍であるハルバードが王女を傷つけることはなかった。

ハルバードの刃が王女の身体に触れようとした瞬間、その部屋にありえない突風が吹く。

それは甲冑からサラサにいる方向に向けてである。

それによってハルバードが方向を変えて、サラサの方向に倒れてきた。

「つう！」

斧の部分が伸ばしていたサラサの右腕を掠って、大きな音を立てながら床に転がり落ちた。白いそでに一筋の線ができたかと思うとじわじわと赤く染まっていくな。

しまったわ。思わず使ってしまった。

サラサは痛みより思わず力を解放してしまったことに眉をひそめ

る。

不自然な現象にその場にいた者は、息をのみこんで立ちすくんでいた。その中で一番に我に返ったのはソージュール殿下である。

「サラサ！」

少し離れて話していた殿下とヤトレイが、すぐさまにサラサのそばに駆け寄る。

殿下はサラサの元に近寄り、血が滲みでている右腕をそっと手に取る。

傷口から一筋の血が流れ落ちる。けっこう深く切ってしまったようだ。

殿下は胸もとのアスコットタイをすばやく引き抜くと、サラサの腕にきつく巻く。止血の為だ。

サラサは往生際悪く、遠慮しようと左手を挙げるが問答無用で処置されてしまう。

かなり血が出ているし痛みもあるが、指もしっかり動くので大丈夫だろう。しかし王女が危ないと思って斧の方向をこちらに返ることしか頭になかった為に、力加減を間違ってしまった。わずかに動かすだけでよかったのに。

とは言え、切り傷で済んだのだから運がよかったほうだろう。もう少し近ければ腕が切断されたり、斧が食い込んだりしていたはずだ。

殿下は舞踏の教育係の男性に侍医を連れてくるように指示しながら、サラサの腕のケガを診ていた。

サラサはされるがままにしていながら、扉の方向に目を向けた。そこにはヤトレイに抱き起こされたフローレ王女の姿がある。先ほどの出来事とサラサから流れる血を見て放心状態でこちらを見ていた。

だが、見る限り外傷はないようだ。

よかった。あのままハルバードが小さな身体の王女の上に落ちてたら、とんでもないことになっていたわ。顔の位置だったからちょっとかすったとしても、顔に傷が残ることになっていたでしょうし。こんなに愛くるしい顔に傷が残るなんて許せないもの。

サラサは王女の無事を確認できて、思わず満面の笑みを彼女に向けた。

「フローレ王女様がご無事でよかったです」

そうサラサが言った途端に、信じられないモノをみたばかりに元々大きな瞳を、これでもかと言うように大きく見開いてサラサを見つめる。

王女を抱きかかえたヤトレイもサラサを凝視している。その表情はひどく無表情だ。

王女は何かを言いたくて口をしきりに動かしている。しかし、漏れる言葉はあ・・・とか、えっと・・・とかで意味をなす言葉になることはなかった。

そうしているうちに通路側の扉から騒々しい音が鳴り響き、数人の男性や女性が部屋に駆け込んできた。

サラサは殿下とその者たちに促がされるがまま、部屋を移動して怪我の処置を受けることになった。

処置を受けながら、サラサはこれからどう対処するか頭をフルに稼働させて考えていた。

力を使ったことに後悔はないが、使ってしまった以上はなんとか誤魔化さなければいけない。

胸にあるペンダントを左手で服の上から握りしめる。

あれほど不自然な現象になってしまったのだから、急に風が吹いたと言うわけにはいかない。だからこのペンダントで誤魔化すしか

ないのだ。

殿下からつける尋問を覚悟してサラサは大きく息を飲み込んだ。

17・これで御役目ごめんですわ！のはずが……。

サラサの腕は人差し指ほどの一本の傷が付いていたが、血の量の割には機能を損ねるほど深くなかった。

そのことにその場にいたもの全てが安堵の息を吐く。フローレ王女は顔面蒼白になりながら侍女に手を引かれて自分の居室に戻ったようだ。

殿下は手当てが終わると、その場にいた者に労い言葉と共に、部屋からの退出を指示する。それによってこの部屋にはサラサと殿下とヤトレイの三人だけとなった。

「さて。まずはお礼を言おう。フローレを救ってくれてありがとう。あれでも俺にとって大切な妹なんですね」

殿下の口調と表情が一転して変わる。すこし眉をひそめながら座っているサラサをじっと見下ろしている。今まで私と言っていたのに、俺になっていた。

救ってくれたと言うからにはやはりサラサが何かをしたと確信持っていて言っているのだろう。こうなったら当初の予定通りにペンダントで誤魔化すしかない。そう考えて慎重に説明することにした。胸の中から例のペンダントを取り出す。

「いえ。わたくしも無我夢中のことでございました。幸いこちらのペンダントを身につけていたので……」

「恵輝石か。なるほど。使用したところは初めてみたぞ。一度使えばもう使い物にならないのに、こんなことに使用させてしまっし訳ない」

こんなこと？！

サラサは殿下が謝ってくださっているにもかかわらずに、思わず熱く反論してしまった。

「こんなことですって？あれほど可愛らしい王女様を御救いすることは、他のどんな場合より大切なことですわ！あの愛くるしい頬を傷つけてしまうなんて想像もしたくありません！髪の毛一本だつて傷つけたくないですもの」

ここまで言ってしまったて我に返る。

やばい。つい洩らす必要もない本音を言ってしまった。

それも殿下の前で。

サラサは慌てて自分の口をふさぐが、もう出てしまった言葉は無かったことにできない。殿下もヤトレイも楽しそうな表情でサラサのほづを見ている。ヤトレイがからかうようにどんでもないことを聞いてくる。

「・・・サラサ嬢。もしかしてそういう趣味があるのですか？」

「しゅ・・・趣味ってなんですか？」

「だから小さな女の子が好きってことですよ。だからディランの求愛を受けないのかと」

「ち、ちがいます！ただ、純粹に子供が好きなのです。恋愛は今のところ考えていないだけです」

サラサは年頃の令嬢に訊ねるべきでは到底ないようなことを言われて、思わず本気で全否定をした。貴婦人の仮面など被ってられない。

すると、目の前の男二人は少し驚いた表情を浮かべていたが、堪え切れないとばかりに肩を震わせながら笑いだした。

「稀代の悪女とも言われているレッドスターの素顔がまさかこのよ

うに可愛らしいとは・・・」

「やはりこの茶番は正解だったな。俺は人を見る目があつたつていい証明になるだろ？」

「ええ。本当に。ディランとガイヤ殿は意図的に彼女のこの性格を隠していたのでしょうか。私が出席するような社交界にはほとんど欠席されていましたしね」

自分の失態を取り繕うこともできないサラサは、結果として二人の突っ込みどころ満載な会話を耳に入れる羽目になる。

稀代の悪女つて・・・。そこまで言われてしまっているのか。

それに茶番と言うことはやはりこの舞踏練習は殿下によるただの嫌がらせと言うわけだ。

本当に人間不信になりそうだ。やはり家でジュリアンと一緒にいるのが一番だわ。

サラサは心の中で泣いた。

「お前、あの二人に危険視されているのか？」

「間違えないそうだと思いますね。ガイヤ殿はともかく、ディランには嫌われている自信がありますから。愛しいこちらの令嬢に近寄らさないようしていたのでしょうか。殿下のおかげでその努力も無駄になりましたけど。今度ディランと会ったのが本当に楽しみになりました」

殿下の問いに対して、ヤトレイは片眼鏡に手を当てながら心底性格の悪そうな笑みを浮かべている。

サラサはその笑みを見て、ディランとの血のつながりを改めて実感した。

ディランも大概だけど、そのディランのはるか上をいきそうな腹黒さ・・・。



そりゃあこんな方に教育されていたらソージュール殿下も腹黒になるわね。

「ともかくだ。サラサ。その恵輝石は弁償することにしよう。まったく同じモノとはいかないが、俺もいくつかは持っているからな」

殿下はヤトレイとの会話を終えて座っているサラサの顔を覗き込みながら手を差し伸べてくる。

ペンダントを受け取ろうとしているのだ。

しかし、素直に渡すわけにはいかない。じっくり見られたらこれがフェイクであると言われる可能性があるからだ。

それにほとんど無意識でやったわけだし、サラサにしたら正直殿下からなにかを頂いたりしたくない。

だから丁重にお断りすることにした。

「いえ。それには及びません。さきほども言いましたけど、王女が無事であっただけでわたくしは満足ですわ」

「だが・・・」

まだ食い下がろうとしていた殿下に、サラサはチャンスとばかりに口を開いた。

「それよりこのような状態になってしまったので、殿下のお相手を務めることはできなくなっていました。ですから、今後の練習は辞退させていただきます」

腕に決して小さくはない傷が残っているので、手をそれなりに動かす舞踏をするのは医者からも止められるだろう。

嫌々しているサラサにとってはまさに渡りに船の状態であった。

いい口実になったとサラサはまだ痛みのある腕を愛おしそうに押

さえる。

「そう言われてしまつては許可するしかないな。残念だがそうしよう」

殿下は不本意と大きく顔に書いてそう言う。

今まで舞踏練習や王妃の前で見せていた笑顔満載の顔が、猫かぶりで鉄の仮面であつたと嫌でも分かつてしまう。

この顔を見るのもこれで最後だわ！これでお役御免なんだから。あとはジュリアンと楽しく過ごすのだから！

サラサは早くもこれからの楽しいジュリアンタイムを思い浮かべていたが、次の殿下の言葉によつてその空想は一掃されてしまう。

「近々見舞いに伺わせてもらおう」

「いえ。お気遣いなく・・・」

思わず考えもしないうちに、サラサの口から遠慮とは名ばかりの拒絶がでる。つまりは本能的に拒否しているのだ。

「妹の命の恩人に対して見舞いの一つもしないほど無作法ではいられないからな」

「さすが殿下です。私も殿下の教育係として同行させていただきます」

大した傷ではないのかと、殿下自らして頂くなどともないとか、散々遠慮をしたのだが、殿下だけでなく教育係のヤトレイにまでいとも簡単に聞き流されてしまった。

この調子だと絶対来るわね。二人とお兄様との関係はよくわからないけど、ディランと二人とは会わせないほうがいいよう感じるわ。サラサは今回のことを兄やディランに報告するだけでも重荷にな

っている。力を使ってしまったのでそのことを咎められるだろう。さらにこの二人が家に来る羽目になったことまで報告すると、彼らの機嫌は超降下してますます説教されるような予感がする。あれほど帰りたいと思っていたのに帰ることが気が重くなって、サラサは一つ大きくため息を吐いた。殿下の前でため息を付くなど無作法と通り越して無礼だが、そんなことを構っていられないほどサラサは気落ちしている。

殿下はそんなサラサを咎めるどころか、珍しいモノを見るように笑みをうかべて見下ろしていたが、当のサラサはため息とともに頭を下げていたので気付かなかった。

18・お兄様に近づくなんて・・・ゆるせませんわ！（前書き）

だいぶ前に書いてたフローレ王女視点です。私にしたらすこし長いです。二話に分けるには中途半端だったもので・・・。

18・お兄様に近づくなんて・・・ゆるせませんわ！

「許せないですわ！」

この国で2番目に地位の高い女性であるフローレは、侍女から話を聞いて思わずそう叫んでしまった。

自他共に認めるほど二番目の兄が大好きな彼女にとって、その内容は許しがたいものだった。

フローレには二人の兄がいる。一人は13歳年上の王太子。年が離れすぎているし、ほとんど接する機会がないので、フローレにとってはいてもいなくても同じような存在である。

しかし、もう一人の兄は6歳離れていても、彼女のもとに頻繁に姿を見せてくれたり遊んだりしてくれていた。フローレにとって遠い存在である父母や上の兄と違って唯一身近に感じる肉親なのだ。それに自慢の兄でもある。

侍女や周りのモノからはほとんど全てにおいて王太子である上の兄より、第二王子であるソージュケルのほうが優秀であると聞いたことがある。

だってお兄様だもの。本当に完璧なんだから！

いつもは鼻高々に聞く兄の噂話だが、ここ数日から王宮にかけめくる醜聞とも言えるような噂話に耳を疑った。

大輪の赤薔薇の名前を通称名とする令嬢と、自慢の兄との噂話である。

レッドスターと囁かれる公爵家の1人娘。その美貌であまたの男を虜にして弄んでいると言う。彼女が社交界に出ればその場にいる男性が我先にと彼女の許に集まる。だから常に何人もの男性を侍らかしているそうだ。社交界のみならず公爵家でも、頻繁に様々な男

性が求婚と共に訪れている。それどころか、公爵家でも男を侍らかしていると言うつわさまで出ているような令嬢だ。

そんな評判の悪い令嬢が兄の許に頻繁に足を運んでいるという噂だ。

王族の妃を狙ったの行動と何人もの令嬢や侍女が教えてくれた。

「そんなの、わたくしが絶対阻止して見せますわ！」

そう意気込んで彼女が今度兄の許に来る情報を探ることにした。

情報を掴んだ彼女は周りの侍女たちをうまく撒いて、待ち伏せする事にした。

王女に有るまじき行動であるという自覚はあるが、今はそれよりも兄に近づく女の化けの皮をはがすことのほうがフロアレにとっては大切なのだ。

しばらく小部屋に隠れていると目的である彼女が従者に案内されて近づいてきた。

やったわ！後は彼女を上手くこの部屋に連れてきて、王族らしくきっぱり叱ってあげるんだから！

従者が部屋の前を通り、彼女が部屋の扉のすぐ横を通った瞬間を狙って部屋から出る。

そして彼女のドレスを力いっぱいひっぱった。

う・・・重いわ。この人女性にしては背が高いから中々動かない！

このままでは従者に見つかってしまおうと焦っていると、急に重みが無くなりフローレがひっぱるがまま彼女が付いてきた。部屋にまでひっぱってから扉をしめる。従者が気づいて引き返してくるかもしれないので、しっかり扉の鍵まで施錠する。

よし！作戦成功だわ！

激しく体力を使ったけれど意気揚々と彼女の顔を見上げる。しかし次の瞬間、フローレは文字通り固まってしまった。

母以上に美しい人を見たのは初めてである。それなりに年を重ねている母とは、比べ物にならないほど派手な美貌をしている。いや、同じぐらいの年齢であっても目の前の女性のほうが遥かに美しいだろう。

鋭く切れ長の真紅の瞳はこちらを見て爛々と輝いている。その眼差しの強さに思わず逃げ出したくなるのはどうしてだろう。

足が震えだすのを必死に止めながら気合を入れて、目の前の強すぎる敵を睨みつけた。

負けないんだから！

そう思っ  
てなんとか踏ん張って兄に近づかないようにと忠告した。しかし、彼女はそれをきっぱりと断る。

「こちらからお断りすることもできません」

フローレはもっと厳しく忠告しようとした途端に、全身に悪寒が走る。

彼女の真つ赤に塗られた大きな口元が釣り上がったからだ。

こ……こわいよー！

ぱっくり食べられるよう錯覚してしまう。

身の危険を感じてしまい、この部屋で二人っきりが耐えられなくなったフローレは、

「近寄らないで！」

と、それだけを言い捨ててその部屋から一目散に逃げ出した。

だ！だめだわ！ここで引き返すわけにはいかない！

小さな王女は自分の部屋へ行こうとする足を無理やり止めて、勇敢にも先ほどの恐ろしい令嬢が守るべき兄と一緒にいる部屋に向かうことにした。

二人っきりでなければ大丈夫。兄との様子も見ることができのだから。

そうしてこそつと部屋に入った。

そこはほとんど家具のない狭いホールのようなところだった。

中央で先ほどの強敵・・・もといレッドスターと呼ばれる恐ろしい令嬢と、世界で一番好きな兄がリズムよく舞踏をしている。

その様子に思わず見とれてしまう。二人とも洗練された身のこなし方で、思わず拍手を送りたくなるほど素晴らしいものだったからだ。

その二人の様子を2人の男性が何度もうなづきながら見ていた。フローレは彼らをよく知っている。舞踏の講師と兄専属の教育係だ。

よかった！ふたりっきりでなかったのね！



フローレは部屋の扉の近くに立っている騎士の甲冑の後ろで安堵の息を吐く。

先ほどのことがあったのでさすがに彼女の目の前に立つ勇氣がないから隠れているのだ。

踊り終わってソージュール兄さまと教育係のヤトレイと彼女が仲良く話をしている。

ここではあまり話の内容まで聞こえないけれど、だからと言ってまだ彼女の目の前に立つ勇氣はない。

だから大人しく甲冑の後ろで彼らの様子を窺っていた。

すると、3人での話がおわったからか、いきなり彼女がこちらのほうに足を向けた。

ど・・どうしよう！

妖気があるように感じる美女が明らかに自分に近寄ってきている。それも先ほどと同じく、食べられそうなほどの笑みを浮かべながら。

だめ！ここにいられない！

近寄ってくる彼女に耐えられなくて、王女は勢いよく部屋から出ようと身を動かした。

しかし、その瞬間。身を隠していた甲冑に足を引っ掛けてしまう。

きゃあ！

それによって転んでしまった。だがそれだけで事態はすまない。目の前に大きな斧が降りかかってきたのだ。

こ、こんなことで死ぬの！

思わず死を覚悟してしまった。

しかし、その斧が自分の身体に触れることはなかった。

身体が吹き飛びそうなほどの突風が吹いたかと思うと次の瞬間、目を必死に閉じていたフローレの耳に大きな音が入ってくる。

ガタン！ガタンガタンガタン・・・。

何か大きなものが倒れる音だ。そして数秒後に兄の叫び声が聞こえてくる。

「サラサ！」

その声を聞いてフローレがおそろおそろ目を開けると、目の前で恐ろしく感じていた彼女が腕を抑えて蹲すくまっていた。

その抑える腕から一筋の真っ赤な血が流れている。

え？なにがあつたの？

ソージュール兄さまとヤトレイが慌ててこっちに来ている。

フローレは呆然としているうちに、ヤトレイによって身体を抱きかかえられていた。

兄さまは怪我を負っている彼女に近寄り、自らのタイを使って止血している。

もしかして、わたくしに落ちてくるはずだった斧が彼女にあたつたの？でもなぜ？

分らない。一体なにが起こったのか。

そう言えはいきなりすごい風が吹いたわね。もしかしてそのせい？でもなぜ風が？

フローレは分らずにヤトレイの腕の中で、ただ兄さまと彼女の様子を見続けていた。すると、兄に腕を預けたまま、彼女がこちらを眉をよせながら見てくる。

こ・・怖い！

険しいその表情に状況も忘れて顔を反らしたくなる。しかし、次の瞬間、その表情が一転した。

「フローレ王女様が無事でよかったです」

そう言いながら全開の笑顔をこちらに向けたのだ。

一瞬、視界一杯に大きな花が開いたように感じた。

え！？

いままで怖いと感じていた笑顔とは比べ物にならないほど美しく、真つ赤な薔薇が咲いたような微笑みをこちらに向けている。

慈悲深い天使のような微笑みではなく、魂を取られてしまうと思えるような妖艶さ。

でも、自分を氣遣う言葉は彼女本心から出たものであると感じ取れる。

「あ・・・えつと・・・」

王女は懸命にお礼を言おうと口を開くが、言葉にでてくるのは意味をなさないものばかり。

先ほどこちらに見せた笑顔があまりにも衝撃が強すぎて、頭が回らないのだ。

「なるほど・・・」

自分を抱きかかえていたヤトレイがぼそつと呟く。小さな呟きだったので聞こえたのは自分だけだろう。

その後すぐにヤトレイはフローレをゆっくりと下ろす。

彼に何がなるほどなのか問おうとした途端に、扉の向こうから慌ただしい足音が聞こえてくる。

「フローレさま！」

呼ばれてその方を見れば、撒いたはずの傍付きの侍女が泣きそうな顔でこちらに駆け寄ってきた。

結局、彼女の傷の加減やどうしてそうなったのか気になったけれど、その侍女に手を引つ張られて部屋に戻る羽目になる。

フローレは部屋に戻ってから先ほどの出来事で頭が一杯だった。たしかサラサだったかしら。

お兄様に近づこうとした計算高い公爵令嬢の名前。その美貌は評判通り、いやそれ以上だった。あの容姿を一目でもみれば忘れられないだろう。

だが、本当に人を惹きつけるのは最後の微笑みだ。あのような笑顔をフローレは見たことがなかった。

こちらを向いてはいたけれど、決してフローレに対して微笑んだわけではない。ただ、こちらの様子を見てフローレに怪我がなかったことを喜んでいるのだ。王族である自分に媚びをうっている気配はまったくくない。

「どうしてサラサはわたくしの無事をそんなに喜んでいるの？お兄様によく見てもらいたいから？」

独り言のはずが気が付けば口に出ていたのだが、それに答えが返ってくる。

「それはないね」

「お兄様！」

びつくりしてその方をみると、先ほどサラサ嬢に手当てをしていた兄が扉を背にして立っていた。

「命の恩人に対してずいぶんな考え方するね、うちの姫は」

「命の恩人ですって？」

びつくりして聞き返すと、兄はほとんど自分に見せないような真剣な表情で答える。

「そうだよ。気が付かなかった？あのままだとフローレの頭の上に斧が当たっていたよ。顔に直撃だったから下手すると命を落としていただろうね。無事であつてもその顔に傷が付く羽目になっていただろうね」

言われて目の前に迫ってきた重そうな斧を思い出して、大きく身振いをする。たしかにもう駄目だと思った。

「え？でもそれならどうして・・・」

「サラサが恵輝石を使ってくれたからだ」

恵輝石と言われて驚く。たしかに神の恵みともよばれる不思議な力を宿した石ならあの突風の説明はつく。

でも、なぜサラサ嬢がわたくしをそんな貴重なモノを使つてまで助けようとするの？

初めて会つし、色々な悪い噂を聞く彼女が何の意味もなく自分を助けるとは思わない。それも王族もそれほど持っていない恵輝石を使用してまで。

しかしその疑問を聞く前に兄はすこしこわい顔でフローレに説教をはじめた。

「なぜこのような事になつてしまつたか、お前は分かっているね」

「はい。お兄様。申し訳ございません」

「お前が何を思つて私のところに来たのかは聞かないよ。でも、お転婆もほどにしなさい」

「……はい」

しばらく説教がつづく。それに対してフローレは素直に聞いていた。昔からだれよりもこの兄の説教が一番フローレに堪えるのだ。いつもに比べて長い説教が終わると、兄は難しい顔を一転優しい表情になつてフローレの頭を包み込むように撫でてくれる。

「ともかく、お前が無事でよかった」

そう言われて、フローレは一番深く反省した。大好きな兄に心配かけてしまったからだ。

「サラサの傷は深かつたけれど、後遺症がでるようなものでは無かつたよ。近いうちに私とヤトレイで見舞いに行こうと思う」

助けてくれたサラサ嬢のことを聞くとひどく楽しそうに兄は答えてくる。

見舞い！？

「わっわたくしも行きます！」

思わずそう言ってしまった。もう兄に近寄るなど言いたい気持ちではない。ただ、なぜ助けてくれたのか教えてほしいのだ。

それにあの笑顔。もう一度見てみたい。

「だってわたくしが助けてもらったのだから、お兄様よりわたくしのほうがお見舞いに行くのは当然ですわ！もし、連れて行ってくれなくてもわたくし1人でも行きますから！」

最初は渋っていた兄だが、いつにない王女の熱意に押されてフロレの同行を許すこととなった。

王女はその同行がきっかけで、一転してサラサに付きまとうことになる。

18・お兄様に近づくなんで・・・ゆるせませんわ！（後書き）

どんなけ怖いねん、サラサ嬢の巻w



## 19・報告しなくては いけませんよね・・・（前書き）

今回の東北地震にて被災された方に、心よりの応援と無事をお祈りしております。

そしていつも見てくださるどなたもが、大きな被害を被られて無い事を切に願っております。

## 19・報告しなくてはいいけませんよね・・・

「なるほど、そうですね・・・」

「で？つづきは？」

サラサは目の前の強敵二人の険悪な表情を見ながら、これからしばらくはこの部屋から出してもらえないだろうと嫌な推測をした。兄のガイヤは少しきつい印象を残す碧眼をより鋭くさせている。その隣では銀色の長い髪をぐちゃぐちゃにして頭を抱えながら幼馴染みのディランが苦虫をかみつぶしたような表情でこちらを窺っている。

やっぱりこうなるのね。ああ、いやだわ。

怪我をした為に、練習は中断し家に帰ったサラサはその事情を知らせるために、兄の書斎を訪れた。

たいてい、兄はそちらで書類とにらめっこしているからだ。だが、今日に限って兄以上に過保護な幼馴染みまで一緒にそこにいた。

二人はサラサの姿を見た途端、何かが起こったことを察してサラサに事情を聞いてきた。

サラサとしても隠し通せるわけもないので、正直にさきほど起こった出来事を簡潔に説明した。

最初は穏やかに聞いていたのだけど、ヤトレイの名前を出したとたんあからさまに二人の表情は険しくなる。

ああ。まだ、力を使ってしまったことも怪我したことも言っていないのに・・・。

険悪な雰囲気の中、話を続ける。

できるだけ簡潔に伝えることにした。さすがに自分を怖がって逃げようとして、王女が転んだとまでは言いたくない。

力のことを伝えると、より一層彼らの眉が上がる。

「で、でも。おかげで殿下との練習もこれで最後になりましたわ。ただ、一度だけ殿下がこちらに訪問されることになりましたけど・・」

できるなら怪我のことは隠し通したい。彼らが過剰に心配するのが目に見えているからだ。しかし、付き合いの長い兄と幼馴染みが騙されてくれるはずがなかった。

「それだけではないでしょう、サラサ。私たちに隠し通せると思っているのですか？」

「なぜ殿下がわざわざ公爵家に来るんだい？その理由は王女を助けただけではないね？」

す、するどい！

「力を使ったときに失敗して、すこし私の腕にものがあたってしまったもので」

仕方なくサラサがそう言った途端に、二人ともが慌てて顔色をかける。

「大丈夫！？」

「それを早く言いなさい！サラサ、腕を見せなさい」

ガイヤがサラサの傷を見ようと近づいてきたので、サラサは見られまいと慌てて後ろに下がる。

「た、大したことないですわ」

「大したことなければ、舞踏練習が中止にはならないでしょう」

「わ、私が怪我を口実に辞退したからで、本当に大丈夫ですわ」

けっして浅くない傷を見られたくなくて必死で抵抗するが、何枚も上手の兄とディランに見破られて、結局傷を見せる羽目になった。巻いてた布を解いたとたんに、二人ともが息を鋭く飲み込む。

「これのどこが大したことないって？」

「・・・動かすことに支障はありませんから・・・」

「おそらくこんなに深ければ、傷跡が残ってしまうでしょう」

「別にドレスや手袋で隠そうと思えば隠せるから問題はないですわ」

サラサは本当になんてことないと、意識して明るく言いきる。しかし、目の前の過保護軍団はそのサラサの言葉をまともに聞けるような状態でなかった。ディランは恨めしそうにサラサの傷あとを見ながらぶつぶつと呟いている。その姿は何かが乗り移ったかのように生氣を感じない。

「僕のサラサの身体に傷が・・・傷が・・・」

いや、誰のモノでもありませんから。

兄のガイヤもガイヤでめったに見たことないような悲しそうな表情を浮かべてこちらを見ている。

「サラサ。どうか私を許して下さい。こんなことになるなら、たとえ王家に逆らってもソージュール王子との舞踏練習を辞退するべきでした」

そう言つと座っているサラサに向かつて頭を下げてくる。サラサはその言葉にびっくりして慌てて椅子から跳び上がる。

「や、やめてください。こんなことになったのは私のせいですわ。お兄様になにも責任ございません」

たとえ第一貴族である公爵のガイヤであつても一臣下でしかない。そんな彼が王家の要望を断れば色々と不都合が生まれることになるであらう。サラサはそれがわからないほど世間知らずでもない。だからこそ嫌々ながらも役目をお受けしたのだ。

「ともかく。もう私が殿下と接するのはあと、見舞いに来られる一回限りですわ。殿下お披露目の舞踏会もこれで不参加にできますし。これではとジュリアンと一緒に過ごせるのだから私は満足ですわ」  
「そうなつてくれることを祈りますが……。殿下やヤトレイ殿がどう動くかですわ」

ガイヤにヤトレイのことを言われて、腹黒い笑顔が浮かんでくる。決して近寄りたくないと身の危険を感じてしまうのはなぜだろう。ヤトレイの名前を聞いて、目の前の亡霊と化した幼馴染みが生霊になる。ディランがかなり凄みのある顔をサラサに向けてそれでも言葉は優しく聞いてくる。

「ヤトレイの奴も来るのか……。ねえ、サラサ。その時僕も一緒にいてもいい？」

「え？ いいけど、なぜ？」

「あいつが嫌いだから。あいつとサラサが僕の知らないところで話しているって思うと、僕は嫉妬で妬き焦がれちゃうよ」

どこまでヤトレイのこと嫌いなんだ。本人が言っているようにデ

イランは、ヤトレイに対して嫌悪感をあらわにしている。ディランがこんな人に人を嫌っている姿は初めて見た。

過去になにかあったのかしら。

好奇心は沸いてくるが、さすがにそれは聞けない。

「ディランの嫉妬はともかく。ヤトレイ殿がくるならたしかに油断できませんね。かなり鋭い方ですから、サラサだけで対応すれば力のことを知られてしまう危険があります」

「あいつは昔っから人の弱みに付けこむのが得意だからね」

ディランは本当に嫌そうに吐き捨てる。

「でも、何も関係がないディランがその場にいるのっておかしくないのかしら？」

「婚約者として紹介してくれたらいいよ？」

ディランがいとも簡単にそう言うがすぐにガイヤが否定する。サラサが突っ込む暇もないほど速攻の切り返しだ。

「却下」

「・・・冷たいなあ。長年の幼馴染みにもう少し優しくてもいいと思うけど・・・」

「3歳児に求婚するような幼馴染みを我が屋敷に立ち入り禁止にしないだけ、十分優しいと思いませんか？」

たしかに・・・。

サラサは兄の言葉に思わず頷きそうになる。聞けば、兄はサラサにその話を聞いて、本気でディランを立ち入り禁止にしようか悩んだそうだ。結局は本気で彼女に求婚するのは成人してからで、彼女の意に反する事はしないと約束をさせるに止まっただけらしい。

サラサにしても恋愛と言う気持ちではないが、ディランに対しては兄と同じくらい大切な幼馴染みとしての親愛があるので、その判断には大いに感謝をしている。

「大丈夫ですわ。数刻お会いするだけですし・・・」

「私もできる限りいるようにしますから」

サラサに加えてガイヤもそう言うと、仕方ないとばかりにディランも素直に諦めてくれた。もともと、強硬に同席を求めるつもりもなかったようだ。ガイヤが同席すると言うのを分かっていたからだろう。それでも天敵とも思っているヤトレイの名前を聞くとどうしても嫌な予感が走ったため、無理なことを口走ってしまったのだ。

そして、その予感が決して外れたモノでないと後日、彼は思い知る羽目になる。

19・報告しなくてはいけませんよね・・・（後書き）

拍手機能をつけてみました。そちらに拍手お礼として小話をいれています。よかったらみてくださいね！



## 20・歩み寄る嵐（前書き）

ちよつと短めです。

## 20・歩み寄る嵐

ああ、癒される……。

サラサはジュリアンを抱きしめて頭を撫でながら、この世の幸せを噛み締めていた。自分より温かい体温、柔らかい感触。腕の中に納まった小さな身体。

されるジュリアンも気持ちよさそうにサラサに身体を預けている。そんな二人の至福の時間も、ジュリアンの乳母のナンシーの声で壊されてしまう。

「ジュリアン様、そろそろ私のところに来てください。サラサ様はこれから忙しいですよ」

「やあ。サーラといっしょ」

ナンシーはジュリアンに手を伸ばすが、ジュリアンは余計に必死にサラサにしがみつく。

ああ。可愛すぎるわ……。

サラサは最愛の甥に求められる幸せを噛み締めて、ジュリアンの小さな身体をぎゅっと抱きしめた。

振られたナンシーはあからさまにため息を吐いて、サラサに苦言を呈する。

「サラサお嬢様もいい加減にしてください。今日はソージュケル王子がわざわざ来られる日ですよ。それに腕の傷にも触ります」

「腕は大丈夫だわ。おねがい、ナンシー。これから私にとっては嫌な時間を過ごさなければいけないの。まだ時間あるんだし、こうし

てジュリアンの愛を感じさせてよ」

サラサはこれからの苦痛な時間を思い出して思いっきり嫌な顔をする。

なんせ殿下だけならいざ知らず、殿下の教育係であるヤトレイも来るのだ。

ディランですら嫌だと思っているような一癖も二癖もあるような御仁。

会いたくないですわ……。でもお兄様も一緒にしてくださるから、ただ愛想笑いしていたらいいかしら？

サラサは午後からの戦いに向けて、色々と頭の中でシミュレーションを繰り返す。すると、関心が自分から他に移ったことを鋭く感じ取ったジュリアンが、サラサのほうを振り向いて、

「サーラー、おうた」

と、大きな声で訴えてきた。サラサは一瞬にて満面の笑みを惜しげもなく浮かべて、ジュリアンがお気に入り之歌を手振りをつけながら口ずさんだ。

もつすでにサラサの脳から、殿下やヤトレイのことは見事に消え去っている。

「うちのお嬢様って、ジュリアン様がいる時といない時の表情がちがうわ。あの蕩けそうなほど幸せな笑顔。どこが稀代の悪女なのかしら……」

ナンシーはそんな見慣れた仕えるべき二人の光景を見ながら、思わずつぶやいてしまう。

しかし、そのつぶやきは歌に夢中になっている二人の耳に入ることはなかった。

そんな三人の元に、いきなり部屋に通じる通路から誰かがこちらに走ってくる足音が聞えてくる。

「あら？どうしたのかしら？」

サラサも歌をやめて扉のほうを見る。

やがてノックもなしに部屋の扉が空き、よく知ったメイドの一人が息を絶え絶えに近寄ってきた。

「お嬢様！大変です。もうソージュール王子が来られました」

「な、なんですって！まだお約束の午後にはかなりお時間がありますのに・・・」

サラサはジュリアンを抱きしめてながらも、不測の事態に思わず立ち上がる。

約束では午後から来られると手紙が兄のガイヤの元にきていた。だから兄は午前中に仕事を回して、午後は屋敷で過ごすように調節してくれているはずだ。

だが、今はまだ朝と昼の間ぐらいの時間である。だからガイヤは不在である。さらに前公爵である父は静養のために数日前より別荘地に移っていた。

こうなると、かれらをお持て成しするのはサラサ一人ではなければいけないのだ。

なんで、こんなに早く来るのよ。

内心でおもいつきり殿下たちに対して悪態を吐きながらも、出来る限り迅速に殿下をお迎えできるようにメイドたちに指示を与える。

さあ。私もお出迎えに行かなくては・・・。

「ごめんね、ジュリアン。サラサは今からお客様の相手をしなくてはいけないの。だからいい子でナンシーと待っていてね」

「はぁーい」

素直に返事してくれたので、ナンシーにジュリアンを預けることができた。

その成長振りに、思わず緊急の事態を忘れてジュリアンの可愛らしい顔に見蕩れてしまう。

「・・・サラサ様」

「！！ごめんなさい。すぐにお出迎えに向かうわ。あとはよろしくね」

サラサはナンシーの呼びかけに我に返る。

急がなくては！何時までもお待たせする訳にはいかないのだから。

「ナンシー。悪いけど、ここの玩具も片付けていてね」

普通はナンシーに頼むことではないけど、メイドたちが準備に追われているのでそこまで手がまわらないだろう。だからそうお願いした。

ナンシーのほうもまったく異論もなく、笑顔で了承して片づけを始めてくれた。

サラサはここは済んだとばかりに、その部屋から出る。

おそらく執事のセバードが時間稼ぎをしてくれているだろう。と

りあえず玄関そばの応接間に案内しているはずだ。

サラサは令嬢として許される最大の速さで、そちらのほうへ歩き出した。

その道中で、さきほどのシュミレーションを必死に修正する。

お兄様がないのはきついわ。こんな時間だから昼食の準備も必要になるだろうし。コック長にも通達しとかないと。とりあえず一番大きな応接室にご案内して……。本当にめんどくさいわね。大丈夫であることをさりげなくアピールして、出来るだけ早く帰っていただきたいわ。でも、そんなにうまくいかないわね。

あうでもない、こうでもないと段取りがサラサの頭の中に駆け巡る。

だからサラサは、ジュリアンがナンシーの手を離れてこっそりと自分の後を追っていることに、まったく気が付かなかった。

## 20・歩み寄る嵐（後書き）

またまたジュリアンラブを書いてしまったwしつこくなってますみません。

## 21・稀代の悪女に会いに行く理由（前書き）

フローレ王女視点です。



## 21・稀代の悪女に会いに行く理由

動く馬車の中。

フローレは絶えることない揺れを感じ、隣に座る兄の袖を強く握り締めていた。実際はそれなりに舗装された道を進んでいるし、膨らんだクッションの上に座っているので大したことないのだが、めったに外出することのないフローレにとってはすこし怖く感じるものだ。隣に座っているソージュールは平然と、教育係のヤトレイと難しい話をしている。理解できないフローレはつまらなくなつて、掴んでいた兄の袖を力をこめてひっぱった。

「フローレ。どうしたんだい？」

「お兄様。どうしてこんなに早く行くことになったの？」

フローレはこちらを向いてくれた兄と話をしたくて、思いついたことを聞いてみる。

「私に午後に緊急の予定が入ってしまったからね。アルンバルト公爵には申し訳ないが、少しばかり早めに伺わせてもらっているんだよ」

そう言いながらも、兄はひどく嬉しそうな笑みを浮かべている。

フローレは初めてみる兄の表情に驚きを隠せない。

どうして、そんなに楽しそうなの？ やっぱり彼女に特別な気持ちをもっているの？

そう思ったフローレは気が付いたらその疑問を口に出していた。

「どうして、彼女なの？」

突如ぼつりとつぶやくように出された疑問に、ソージュールはどう答えるべきか少しの間考える。結局質問に対して質問で返すことになった。

「どうしてフローレはサラサに会いに行くんだい？」

「そ、それは・・・」

今から、三日前に会ったサラサ嬢に会いに行くのだ。

本来なら兄とヤトレイだけで行く予定だったところを、無理行つて同行させてもらった。

鋭い真つ赤な眼と大きな紅い口の美貌の令嬢。彼女を見た者は個々に様々な強い印象を与えるだろう。

フローレ自身、真正面から対峙したとき、怖くて逃げ出してしまった。実際、フローレが彼女から逃げようとしたせいでこうなったのだ。

だが、そんな彼女に今は自ら会いに行こうとしている。それはひとえに、自分のせいで彼女が怪我したことが理由だ。

「わ、わたくしのせいだからですわ」

「それなら私たちが行くから、わざわざフローレまで付いて来る必要はないと言っただろ？それなのになぜ強引に同行するのかな？あんなに怖がっていたのに」

そう言われて返答に困って口をつぐむ。たしかにそれだけではない。

決して口にできないけど、最後に見せた満面の笑顔の理由を知りたいのだ。いや、正確にはもう一度彼女のあの笑顔が見たいのだ。

あの笑顔を持つサラサが、稀代の悪女とまでいわれている令嬢と、

ほんとうに同一人物なのかとどうしても思ってしまう。

黙っているいろいろ考えているフローレに、ソージュケルはやさしく頭をなでてこう言う。

「君はまだ幼いし純粹すぎるから、うわさや外見に惑わされることになる。今はいいけど、これからきちんとその者の本質を見極める力を付けるべきだ。君にとって味方になる者が敵になる者をね」

それが王族に生まれた者には必要な能力である。そうソージュケルはフローレに諭す。フローレは兄の言葉を理解することはできても、言葉の意味まで汲み取ることはできなかった。

わたくしだって、そばにいる者の言葉をそのまま信じるようなバカな真似はしませんわ。

つい、そう反論したくなる。だが、ソージュケルはこれ以上フローレに口で説明するつもりもないようで、話を今日のことに戻した。

「むずかしい話はともかく、今日は怖がらずにもっとサラサと接してごらん。そうすればなぜ、私が彼女を気にするのか理解できるはずだよ。おそらく盾になる二人は不在だからね」

「そうですね。ディランは兄に呼ばれて領地に戻っているはずですし、アルンバルト公爵は今朝早くに王宮に来ていましたからね。サラサ嬢が我々をお持て成ししてくれることになるでしょう。本当に楽しみです」

そう言うソージュケルとヤトレイは、口元を小さく吊り上げながら笑い合っている。

サラサがもしその場において彼らの表情をみれば、悪巧みをする悪人の顔だと感じただろう。さらに、やはりそれが目的で到着時刻を

大幅に早めてきたと確信するはずである。

しかし、そこまで読み取ることでできないフローレは、

サラサに会えることを、二人は心から楽しみにしているのだわ。

としか、思うことはできなかった。

そしてアルンバルト公爵家に到着する。馬車でいけばそれほど遠くはない。半刻もかからないだろう。

馬車の御者が門番に到着を告げると、門はすぐに開門ししばらくそのまま馬車が動く。

やがて、御者の掛け声と共に馬の鳴き声が聞えて、ひずめの音小さくなっていった。

「到着いたしました」

外からの御者の声を合図に馬車の扉が開いて、ヤトレイがまず外に出て次にソージュールが出る。

最後にヤトレイが手を伸ばしてくれてフローレを抱き上げてくれる。踏み台はあるが段差が激しいために、まだ小さなフローレは危険だからだ。

「まあ。すてき・・・」

フローレは出た瞬間、視界に広がる壮大な屋敷に思わず感嘆の声をあげる。大きさから言えばフローレの住んでいる王宮の方が何倍も大きく豪華絢爛である。オリエンデーン国の城下町へ初めて来た

者はみなその美しさを称える。

だが、それとはまた次元の違う美しさがここに存在していた。自然との調和した格調高い屋敷。

どこか品のよくなものを感じる。

屋敷の大扉が開くと数人がこちらに向かってきている。兄の姿を見て一同は礼儀正しく頭を下げた。

ソージュールとヤトレイが彼らに声をかける。だが、その内容に興味のないフローレは、目の前に広がる景色を思う存分堪能することにした。

噴水も庭園もいきいきとしているわ。どうしてかしら。王宮のほうがきちんと手入れされているはずなのに、こちらのほうがわたくしは好きだわ。

フローレがそんなことを思っている間に話は終わったようで、兄に手を取られながら屋敷の中へと案内された。

まだ出迎える準備が整っていないと、申し訳なさそうにおそらく執事である青年が頭を下げる。

だがかれらに非があるわけではない。約束の時間よりだいぶ早く到着しているのだから。

ソージュールが労いと詫びの言葉を言う。  
すると執事は、

「とんでもございません。いますぐサラサ様がこちらに向かわれますので、しばらくこちらでお待ちください」

と言いながら玄関からそれほど離れていない部屋に案内した。そこは屋敷と同様に格調高く品のいい家具が置かれている。

「さすが、アルンバルト公爵家だな。我が国随一の名家であるだけ

に興味がいい」

フローレが部屋をしげしげと眺めていると、ソージュケルも同じように感じたようでそうつぶやいた。

「そうですね。同じ公爵とは言え、ウイデリー公爵家よりアルンバルト公爵家のほうがはるかに歴史はありますからね」

へえ。そうなんだ。一つ勉強になりましたわ。

ヤトレイの返事にフローレは内心そうつぶやく。あえて口に出さないのは勉強不足を指摘されるからだ。

「さて、フローレ。サラサが来たらきちんとお礼を言っただよ」

少しの間部屋を眺めていたソージュケルは、椅子に座ったまま、まだ周りを興味深そうに見渡している彼女にひとつ忠告をする。

そ、そうですね。とうとう彼女と会ったわ。きちんとお礼を言わないと。

フローレは今日の本来の目的を思い出して、きゅっと眼を閉じる。彼女なりに気合を入れなおしているのだ。

大丈夫。お兄様もそばにいてくださっているし、今度は怖がらずに言えるわ。

フローレは緊張しながらも必死に自己暗示をかけていた。しばらくすると小さな足音が近づいてくる。

「ソージュケル殿下。失礼いたします」

先日聞いた女性にしては低めだがよく響く声が聞えてくる。

きた！サラサだわ。

フローレは小さな手をぎゅっと握り締めながら、ゆっくりと開く扉のほうに顔を向けることにした。

21・稀代の悪女に会いに行く理由（後書き）



## 小話2：神々の会話（前書き）

拍手お礼にしていた話です。次のお礼の話ができたので、こちらに移しときます。だからもうすでに見た人は拍手の話『ブラックリスト作成』をみてくださいね。

.....

サラサがキラから加護を受けたことで、キラとビュアスとハヤト、3人の神が話をしています。

なお、この話は『女神の憂鬱』『勘弁してくれ!』の未来パラルになっています。

二つの話を見ないと人物がよく分からないかもしれませんが、見てない、見ない人のために、あとで説明を簡単に書いてます。

## 小話2：神々の会話

「こら！キラ！私の子をかってに横取りしたわね！」

「え〜。誰の子だって〜？」

「オリエンデーン国の貴族の女の子よ。覚えがないとは言わせないから！」

「ああ。サラサのことが。で？なんでビュアスの子になるの？」

「それは私が15歳になったら加護しようと楽しみに待っていたのよ。あの美貌だから愛の加護がピッタリでしょ？」

「ん〜でも本人の了承を得ているよ？それに加護した者が勝ちでしょ〜？」

「了承ってまだ4つの子に、訳が分からず頷かせただけじゃない！ただの騙しよ！このロリコン！」

「ロリコンって・・・俺はただこれから美しく咲くであろう花を先に唾付けているだけだよ。実際、今はこんなに美女になっているわけだし」

「・・・紫の上計画か」

「ん？何か言った？ハヤト」

「小さいころから目を付けて育てて、それなりの年頃になったらば

くつと食べてしまうロリコンの話さ。俺が住んでたところの昔話に  
そう言うのがあった」

「サラサが望めばそうなるけど、別にただ見守るだけで俺は満足だ  
からロリコンではないぞ？」

「ふゝん。それなら俺が加護したかったな。あのきつそうな顔、俺  
の好みバツチりだ」

「ハヤトちゃん……。あなたまだそんなこと言っているの？」

「まだってなんだよ、ビュアス。いつも言っているが俺は男だ！少  
なくとも心はな！」

「サクヤを産んでいてそれを言うのはどうかと……」

「あ……。あれは！！あいつがあまりにもしつこいのと、取引でそ  
うなったただだよ！」

「へえ。それ、あいつに伝えてもいいの？」

「ば！ばつかやろ。そんなことしたらまたストーカーみたいにさ  
れるだろ！」

「……。ハヤトちゃん。貴女には愛の女神である私自ら、神の出  
産について教えて差し上げましょうか？お互いに気持ちがあれば  
子供は生まれないって」

「……だあ！……！そんなのは気のせいだ！俺はあくまでも男だ！」

「「はいはい」」

（ほんと、ハヤトって往生際わるいな）

（まあ相手が相手だしね。私も彼があんなにハヤトに執着するとは思わなかったわ。腹黒いし）

（敵が多いしな。ハヤトもこんなだし、なりふり構わず本性みせてそついう関係になったのだろう）

（取引って言ってるしね。どんな内容か気になるけど）

「おい！・・・俺の話はおいとして今は彼女の話だろ！」

（あ、話題そらした）

「まあ、いいわ。ハヤトちゃんをからかうのはこれぐらいにして・・・」

（やっぱりからかっていたのか・・・）

「キラ！彼女になにか役目を押し付けたりしないでしょうね！」

「サラサが望むならするけど、野心のかけらもない子だしまったく望まないだろうね。ってか物事が分かってきた途端に、会ったんびに外してくれって訴えるぐらいだしな」

「ひど！おまえ、それなのに加護のこり押ししているのか？」

「べつつに使命を与えるつもりもないし、風の力なんか使わなかつ

たら済む話だしな」

「それってただの宝の持ち腐れってことになるのでは・・・」

「おお。ハヤト、いいたとえだな。俺が力与えていたら、他の奴がサラサに加護与えなくなるだろ？」

「だから私が愛の加護を与えるって」

「だめ、だめ。それにビュアスの愛の加護なんか受けたら、それこそ傾国の美女ってことになって波乱の人生を送る羽目になるぜ。」

「そうならないよう見守るわよ、私が」

「だゝから俺が一番そばで見守るの。ビュアスの加護がなくてもあの美貌だし、楽しませてくれるような性格しているし、こればかりは譲らないぜ」

「・・・神の加護つてもつと厳かなモノだとおもっていた」

「他はそうよ。こんな軽い興味だけで加護するなんて、このキラカナীগぐらいだから」

「ナীগ・・・あいつか・・・」

「あゝまだ嫌っているの？ハヤトちゃん」

「あつたりまえだ！フウカや俺だけでなくサクヤにまで散々ちょっかいかけやがって！」

「だって欲の神だもの。しかたないじゃない。って私の息子だったわね。今度、ちょっといかけるようなら教えて。お仕置きするわ」

「あいつに知られる前に頼む。知られたらナーガの命の保証はできないからな」

「あゝ愛されちゃってるね。ハヤト」

「うるさい！キラ。俺はともかく、サクヤに今度近寄ったら殺さなくても何百年も封印されるぞ。絶対」

「サクヤよりハヤトに近寄ったほうが怖いと思うけどね・・・」

「って、話がまた俺に戻ってる！」

（自分から振ったくせにね・・・）

（たしかに今は振ったよな）

「と、ともかく。俺の用事は終わったから帰るぞ！ただ、俺はフウカに頼まれてビュアスに渡し物があっただけだから」

「はゝい！旦那さまによろしくね！」

「・・・帰る！」

「あ、きえちゃった。からかいすぎちゃったわ」

「ハヤトはからかい甲斐あるからな。ともかく、サラサのことは俺の管轄になったから」

「嫌な男ね。言っても仕方ないのは分かっているけど、一言文句言いたかったの。彼女を幸せに導いてね」

「さあどうだろうね。サラサは神に愛されすぎる性質を持っているから、どっちにしても平穩とはい難い状況が望まなくてもやってくるだろう」

「あんなに平穩を望んでいるのにね……。気の毒だわ」

愛の女神に心から同情されていることを、当の本人は知らない。

## 小話2：神々の会話（後書き）

キラ・・・風の神

ビュアス・・・愛の神

ハヤト・・・守護の神（『勘弁してくれ！』主人公。ちなみに言葉は男だけど、外見はばっちり女です）

フウカ・・・癒しの神（『女神の憂鬱』主人公）

ナーガ・・・欲の神（ビュアスの子）

サクヤ・・・ハヤトの子。誰との子で何の神かは秘密です。まだどこにもでてきてません。

なぜかサラサの話と言うより、ハヤトの話って感じになってしまいましたwいつの間にか子供まで産んでいるし・・・。



## 22・忠告が無駄になってしまいました・・・

サラサは意を決して扉を開けた。

見慣れた応接室入るとソージケル殿下とヤトレイが、ソファに座って話をしている。

この人たちのせいで貴重なジュリアンとの時間を・・・

などと思っているのをまったく見せずに、笑みを浮かべながらサラサは、殿下の座っている方向に頭を下げて挨拶を口にする。

「大変お待たせして申し訳ございません。このようなところまでご足労をおかけして、恐縮でございます」

「こちらこそ本当にすまない。午後からの予定になっていたが、急に用事が入ってね。こんなに早くなってしまっただけ問題ないだろうか？」

ソージケル殿下は本当にすまなそうな表情をしてサラサの方を見ている。

だが、サラサにはその表情がただの仮面でしかないとを本能的に悟っていた。

わざとのような気がする・・・。そもそも兄さまが拜謁する日にわざわざ合わせて来たのではと勘ぐってしまうのはダメかしら？

そんなことを思っているので、嫌味も兼ねてサラサはこう言う。

「我が当主である兄はすれ違いで王宮に登城しております。午後からでしたら戻ってきますが、今はわたくししかいませんので、何か

とご不自由させることになると思いますが・・・」

「私たちに無作法であったのだから、サラサ嬢が気にすることではないですよ」

ヤトレイが答えるのに、サラサは心の中で大いに賛同しているのを悟らせないよう、必死に仮面をかぶる。

「ありがとうございます。急でございましたので大したモノではないですが、軽食のようなモノを用意させていただきます。ともかく、2階にあります部屋へ案内させていただきます」

「それはありがたい。少し早目の昼食をここでとらせてもらえると助かるよ」

そう返事しているソージュール殿下を見ると、その横でこちらを見上げている小さな令嬢と目が合う。

先日初めて会ったフローレ王女である。

聞いてはいたけど、本当に来て下さったのだわ。殿下と教育係は知らないけど、フローレ様は純粹にうれしい。だってあのように怖がっていたのに、勇気をしぼって会いに来てくれたってことでしょ？この徹底的に子供には嫌われてしまう自分のために・・・。

お礼を言おうとした瞬間にフローレはぎゅっと一回目をつぶってから、大きな声を出す。

「こ、この前は・・・助けてくれて、たすかりましたわ！」

な、なに！この可愛らしさ！ジュリアンと張るぐらい可愛いわ。

頬つぺたを赤く染めてお礼を言う王女を見て、一瞬抱きしめなくなるが、皮一枚で煩惱より理性が勝ったためになんとか思うだけに

止まる。

「フローレ王女まで来て下さるなんて、本当にうれしいです。貴重なお時間を割いてまで、来て下さったのですね」

サラサは先ほどと違って本音でそう言ってしまう。それに付随して口元が下がってくるのを、止めることができない。

満面の笑みを浮かべてしまったサラサを、フローレはこぼれおちそうになるほど大きな瞳を見開いて凝視していた。

あ、しまったわ。ひかれてしまったかしら・・・？

「あなた・・・どうしてそんな顔をわたくしに向けるの？」

フローレは呟きとも思えそうなほど小さな声でそう言う。口にするつもりはなかったのだろう。言ったあとで口を可愛い両手で抑えている。

「申し訳ございません。フローレ王女さまがあまりにも愛らしいお方なので、思わず微笑んでしまったのです」

子供だと馬鹿にしているもとれる言葉だったが、それ以外に言えることもないのでサラサは正直に答える。その答えも王女にとっては予想外だったようで、しばらくの間口元に手を当てながら何かを考え込んでいた。やがておそろおそろという感じでフローレがサラサに聞いてくる。

「ねえ。あなた、あんな言いがかりをつけたわたくしが嫌いでないの？」

「あり得ませんわ」

サラサは混じりつけない100パーセントの本音で即答する。

「逆にフローレ様にとって、目に余る者となってしまうていたことのほうが申し訳ないです。でも、それも先日までですので、ご安心ください」

「え？なぜ？」

フローレは思わず聞き返してしまう。

「もう舞踏の練習相手は辞退させていただくことになりましたから」

サラサは自信満々にそう言いきる。

そうだ。これで厄介なお役目とは縁が切れることになる。この目の前の殿下とも教育係のヤトレイとも、大きな社交界でお見かけする程度になるだろう。

フローレ王女とはもっともっと親しくなりたかったけれど、近寄るだけで逃げられるほど怖がられているので無理だろう。

ああ、おかえりなさい。ジュリアンとの愛の日々。

だが、聞いてないとばかりに激昂しながらフローレは隣の兄に問い詰める。

「もしかしてわたくしが言ったからですか？それなら取りやめます。だから……だから……」

「ちがうよ、フローレ。それはまったく関係ない。サラサの腕の怪我を考慮しての話なんだから」

「……やはり、わたくしのせいなのね」

サラサはひどく気にされているフローレに掛ける言葉が見つからない。心底からこうなっとうれしいと思っても、さすがにそれは言えないからだ。本人が目の前にいるのだからなおさらだ。だから月並みのことしか言えずにいた。

「気になさらないください。わたくしはフローレ様の可愛らしいお顔に、傷一つ付けたくなかったのですわ。お守りできてわたくしはたいへん満足しております」

サラサは熱弁してしまいそうになるのを出来る限り抑えて、ゆつくりとした口調でそう言う。それに対して、フローレは一気に顔を真っ赤に染めて小さくつぶやく。

「あ、ありがとう」

や、やっぱりいいわ。この王女様。照れているところがまた可愛い。

サラサはフローレの純粋な性質に癒されるのを感じる。

少しの間、サラサとフローレはお互いを見ていた。

そんな二人を大人しく見守っていた殿下とヤトレイはお互いに目を配らせていたのだが、それをサラサは感じることはできなかった。

「では、上にご案内いたします」

サラサはそう言ってゆつくりと扉をあげる。

だが、次の瞬間、目の前にいる予想外の人物に思わず声をあげて

しまった。

「ジュリアン！」

開けた扉の向こうでジュリアンが、両手を頬に当てて顔を傾けて突っ立っている。

思わず名前を呼んでしまったために、ジュリアンはうれしそうにサラサの方に駆け寄ってきた。

「サッラ」

な、なんで。なんでここにいるの？

予定外の事態にサラサは一瞬頭が真っ白になるのを感じた。もうすでにジュリアンの姿を殿下やヤトレイ、フローレに見せてしまっている。今さら隠すわけにもいかない。

先日、兄とディランに強く忠告を受けていたのを思い出す。

『いいですか。ぜったいに殿下が来られているときに、ジュリアンをそばにおかないようにしなさい。いいですね』

『わかっていると思うけど、殿下が来るときはジュリアンをナンシ―に預けておくんだよ』

同じような内容を別々の時に言っていた。

いくら可愛くてもさすがにジュリアンを連れたりしないわよ。

と、二人ともに反論していたのに……。

頭の中で、どう対処するべきかめぐるしく対策を練る。

しかし、その回答を得る前にヤトレイから声がかかってしまった。

「可愛らしい子ですね。もしかしてガイヤ殿のお子ですか？」

そう言われ、サラサは観念して紹介した。

「申し訳ございません。兄の子でジュリアンと申します。どうやら乳母の手を離れてこちらまで来てしまったようです。すぐに連れていかせますわ」

サラサは近くで控えていた執事のセバードの方に目を配る。初老のセバードは見るからに青ざめながらジュリアンに手を伸ばしてきた。だが、ジュリアンはサラサのドレスにひつついて離れようとしていない。

「やだ！サ〜ラにする〜」

ああ。こんなときに我がままイヤイヤがでた。仕方ないのでいつものように視線を合わせてゆっくりと言い聞かせる。

「ジュリアン。サラサはいま大切なお客様をお迎えしているのです。だからセバードにナンシーのところに連れて行ってもらいなさい。いいですね」

「サ〜ラ。一緒、いる〜。いつしょ〜」

だめだ。今日は可哀そうだけど、泣かせてでお連れて行ってもらうしかない。説得するだけの時間がないんだもの。嫌だけど仕方ないわ。

サラサがそう決意したのだが、殿下の一言でジュリアンも一緒に行くことが決定した。

「別に一緒でも構わない。こちらでもフローレがいるしな。フローレ、小さな子を見る機会も少ないだろう。一緒に遊んであげなさい」

そう言われてフローレの方を見ると、不思議そうにジュリアンの様子を眺めている。本当に小さな子が珍しいご様子だ。

この二人が遊ぶの？さぞ愛くるしい光景になるにちがいないわ！

サラサは一瞬時と場合を忘れて、そんなことを考えてしまう。

だから、辞退するタイミングをはずしてしまった。

結局ジュリアンも連れて5人で、2階の応接間に移動することになった。



### 23・令嬢にあるまじき行為？

サラサは当然のごとく、ジュリアンを抱き抱える。すると真っ青になりながらセバードが、「わたくしが・・・」とジュリアンに手を伸ばすが、「やゝ！」と一刀両断で余計にサラサにしがみつく。

そうよね。さっきまであんなに一緒にいたのに、いきなり離れるなんてつらいものね。

やはりサラサは愛おしい甥を泣かせてまで、執事に預けることはできなかった。たとえ、令嬢にあるまじき姿になろうとも。幸い怪我してない腕で抱きあげているので、傷にも負担がすくない。

これで殿下が呆れてくれるならもうけものであるとまで考えている。

そう思っただけに横にいる男性二人に目をやるが、呆れたり驚いたりするどころか、本当に楽しそうな表情でこちらを見ていた。

何を楽しんでいるのかしら？この人たち。

そう思いながらサラサは視線を下に下ろす。

そこには予想通り、フローレがこぼれそうなほど大きな瞳を開きながら驚いていた。

「殿下のお言葉に甘えさせていただきます。無作法になりますが、このままで案内することをお許しください」

サラサの言葉にソージュールは了承の意をこめて頷く。

それから、サラサがジュリアンを抱えながら本来、殿下一行をお迎えする予定だった2階の応接間へと案内をする。

応接間に到着する。

中央に長いテーブルがあり、周りに20以上の椅子が並んでいる。大抵来客がある場合はここで接客やお食事をする事になっていた。執事やメイドがソージュケルとフロレ、ヤトレイを席に案内してからお茶や軽食の準備をしている。

さすがに手慣れているだけあって、その動きに無駄は無い。

サラサは彼らが座るのを待ってから、自分に当てられた席の横にジュリアンを座らせる。それからその隣で立っているナンシーに目で合図を送る。

ナンシーは片づけをしていたときにジュリアンがいないのに気が付き、慌てて屋敷中を探し回っていた。そしてサラサがジュリアンを抱っこして殿下一行を案内しているのを見つける。ナンシーは慌ててジュリアンを迎えに行こうとしたが、殿下たちの手前、案内をしているサラサの前に出てジュリアンを連れていくのは無作法になると分かっていたので、応接間でサラサの指示を待つことにしたのだ。

そんなナンシーにサラサは目で、ジュリアンがここに同席することを伝えて、そばでフォローするように指示する。

ナンシーも十分理解できたために、ジュリアンが座っている席の後ろの壁に黙って立っていることにした。

お茶や軽食の準備が終わったことを確認してから、サラサも席に座ることにした。

その時に腕の傷について聞かれる。

「大丈夫ですわ。さきほどみたいにジュリアンを抱きあげることが

できるぐらいですから。ご心配おかけしました」

本当はまだ傷は抜糸していないのだが、あえてそう言う。もう一度見舞いとかいう話になるのはごめんだし、なによりフローレに罪悪感を持つてほしくないからだ。

案の定、フローレは安心したように分かるような安堵のため息をついた。

「サ―ラ？だいじょうぶ？」

隣から可愛らしい声が聞こえてくる。ジュリアンが傷の話をきいて、サラサに聞いてきたのだ。

「大丈夫よ。ジュリアン」

とりあえず短く返事する。もっとジュリアンときちんと話をしたいけれど、殿下の手前そう言うわけにはいかない。かわりにしっかりと目を見て言うことにした。

すると、ジュリアンはサラサが一番大好きな、癒したつぷりの無垢な微笑みを見せてくれる。

そんな二人を見ながら、感心したようにソージュールがサラサに声をかけてきた。

「本当にサラサになついているんだね、そうしていると本当の親子みたいだ」

「この子は生まれた時より母親を知らずに、わたくしが母親代わりになっておりますので・・・」

本当の親子と言われてサラサはお世辞でも嬉しく感じる。ジュリアンの頭を撫でながらそう返事すると、それに答えるようにジュリ

アンは愛の言葉をサラサに言う。

「サ〜ラ。しゅき〜」

や、やめて、ジュリアン。サラサは抱きしめたくても今は無理なんだから。

そんなことを思っていると、前のほうから小さな呟きが聞こえてきた。

「本当でしたのね。お母様に言ってたの・・・」

フローレの呟きをきいて心の中でため息をつく。

あゝやはり口実だと思われていたわけだ。べつに良いですけど・・・。

「フローレ。少しジュリアンと遊んであげなさい」

「え！わ、わたくしどうしたらいいかわかりませんわ！」

ソージュケルは妹のフローレにいきなりそう振るので、フローレは動揺を隠すこともせずにながらうたえている。

ほとんど接したこともないほど、自分よりはるかに小さな子の相手をするのは確かに戸惑うだろう。

サラサはフローも兼ねてジュリアンに提案をすることにした。

「ジュリアン。王女さまにお歌を聴いてもらいましょう」

「あゝい。うま〜」

ジュリアンがうまと言うのは、だれもが一度は耳にするであろう

馬の童謡である。最近のジュリアンのお気に入りだ。

サラサはジュリアンと一緒に歌うことにする。

見ればフローレも小さくだが口ずさんでくれているようだ。

「フローレさま。一緒に歌ってくださってありがとうございます。  
ジュリアンも喜んでいます。ジュリアン、お礼をいいなさい」  
「あつがとーございまー！」

ジュリアンは満面の笑顔を浮かべて可愛らしい声でお礼を言う。  
それに対してフローレは聞いていないかと勘違いしてしまいそんな夢うつつな表情で、ジュリアンを見ている。

も、もしかして小さな恋の始まり？  
フローレさまも、この天使なジュリアンに誘惑されてしまったのかしら。なんて罪作りなの、ジュリアンは！  
わかるわ、わかるわ。ジュリアンの笑顔をみればだれでもそうなるわね。

「わたくし、これほど幼い子を見たのは初めてですわ。本当に可愛らしいのね」

ジュリアンから目を離さないで、フローレがそうつぶやく。  
8歳であるフローレより幼い王族はいないし、貴族たちも5歳以上にならないと王宮に連れていかないだろうから、見る機会がなかったのだらう。

この愛くるしい時期を見れないなんて、本当に損しているわ。

サラサは見当違いな同情をフローレにしてしまつ。

「本当にガイヤ殿もずいぶん可愛らしい嫡男をお持ちですね」  
「ありがとうございます」

ヤトレイの褒め言葉におおいに、同意しながらサラサは礼を言う。  
トントン

その時に扉の向こうからリズムよく扉をノックする音がする。

「失礼いたします」

そうして声と共に扉が開いて、黒髪の青年が入ってくる。  
そこに姿を現したのは王宮に出かけたはずの兄ガイヤの姿であった。

姿を現したガイヤは、サラサと同じ黒髪をオールバックにして黒の礼服を着ている。おそらく拝謁があつたために、いつもより格式ばった服装なのだろう。

ゆつくりと部屋の中に入ってくる。

ああ……。お兄様、これはかなり怒っている……。

表情は笑顔を殿下に向けているが、サラサはそのガイヤの笑顔とは裏腹に、瞳の輝きが怒りに満ち溢れているのを感じ取っていた。

殿下たちが帰った後が怖いですわ。ジュリアンと一緒に部屋に下からせてもらえないかしら……。

サラサは兄が帰ってきてうれしい半面、不手際を咎められることになるだろうと確信を持っていた為に、逃げ出したい気持ちで一杯

になった。

だが、令嬢として感情を表に出すわけにもいかず表情をかえることなく、ただ兄が後ろを通り過ぎるのを見守ることとなった。

## 24・わたくしでよろしければ、ぜひ！（上）

ガイヤは殿下の座っている席に近づくと、洗練された動きで頭をさげる。

「本日はサラサの為にはるばる王宮よりお越しいただき、ありがとうございます。当主である私が出迎えできなかった上に、息子までこのように同席するといった、ご迷惑をおかけしてしまいましたことをお詫び申し上げます」

「こちらこそ無作法にも約束より大幅に早くきてしまつて申し訳ない。ジュリアンについては楽しいモノをみせてもらつて、逆にお礼をいいたいくらいだから気にしないでいい」

そう言うソージュケルの表情はひどく楽しげである。それに対照的にガイヤは鉄壁の無表情のままである。

ああ・・・感じ取つてしまう。兄様の底なしの不機嫌。

「そう言つて下さると助かります。そろそろ軽いお食事の支度ができております。ジュリアンはまだきちんとお食事をとることはできませんので、この辺りで退場させることをお許してください」

そう言つと、ナンシーに視線だけで合図を送る。ナンシーも心得たもので、ジュリアンに声をかける。

「ジュリアンさま。あちらに大好きなチュービヤをご用意しています。ですから食へに行きましょう」

しかしジュリアンはまだ隣に座るサラサのドレスを必死に掴んで



いる。

「うー。あい」

ジュリアンは涙目でサラサを見上げる。先ほどと違って我がまま全開ではなく、行かなくてはいいかないことを分かっているようである。しばらくの間、サラサと一緒にいたし歌も歌ったりしたからそれなりに満足したのだろう。

後ろ髪を引かれながらも、ジュリアンはナンシーと手をつないで部屋から出ていった。

ごめんね。終わったらずっと一緒にいましょうね。

サラサは哀愁漂うジュリアンの背中を見ながら、心の中で精一杯謝る。

ジュリアンがいなくなり、サラサは兄に上座を譲ってジュリアンが座っていた席に座りなおした。

「言い遅れてしまつてすまない。このたびは大切な妹君の時間を私の練習のために割いてもらっていたのに、こちらの不手際で怪我をさせてしまつて本当に申し訳ない。フローレがこうして無事にいれるのは、本当にサラサのおかげだ。お礼と詫びをここで示したい」

そう言つとソージュケルは一つの鎖をテーブルに出してきた。

よくみると、3つほどの宝石がついた銀板のペンダントである。

さすがに王族であるソージュケルが持ち出してきただけあって、ぱ

つと見であつてもかなり精細な模様を施された逸品だ。

その宝石は一見琥珀色とエメラルド色とうす紫色なのだが、どれも中央に輝く光が入っている。

これが何かのかサラサは瞬時に悟った。

恵輝石だ。それも3つも。

それがどれほど高価なモノかサラサは分かっている。

隣でガイヤも同じように悟っているようで、サラサが口を開く前にさきに断りを入れる。

「いえ。臣下として当然のことですし、このような大層なモノはいただけません。サラサも大した怪我を負ったわけではないですし、こちらのモノは国家の為にお役立て下さい」

「だが、サラサの持っていた風の恵輝石を使わしてしまったのだ。代わりになるモノを返すのが筋だと考えてくれると嬉しいが。恵輝石はまだあるのだから」

いえいえ。あれはただのフェイクです。ただなのでいりません。

とは、さすがに言えない。

「ソージュール殿下。じつは、あのペンダントはサラサの母の形見なのです。ですから身につけておりました。今回はそのおかげで大惨事になることもなかったのですが、恵輝石はただの貴族の娘が持つておくには過ぎた品物です。ですから今回その力がなくなり、ただの石になったことはこちらにとっても損になることではございません」

ガイヤはゆっくりとそのように説明する。思わずサラサは内心で、

兄の詭弁の素晴らしさに舌を巻く。

完璧な言い方だね。さすが兄さま。これなら説明がつくもの。

「なるほど。そんな大切なモノを使わせてしまったのか。ますます申し訳ない。恵輝石が受け取れないと言うのであればなにか代わりのモノを贈ることにしよう」

「いえ。本当におかまいなしでお願いします」

というか、本当にいりません。何もほしくありません。しいて言うならジュリアンとの穏やかな日々が欲しいです。そのために関わらないようにしてください。

サラサは心の中の叫びを見事に隠して、小さく微笑みながら断りを口にした。

そうしているうちに軽食が開始される。軽食といってもさすがに王族である殿下や王女に、めったなものを出せない。

料理人が腕によりをかけて作った素晴らしいお食事が並んでいる。さきほどナンシーが言っていたチュービヤも出された。

チュービヤとはこの領地特産の肉料理である。ひき肉でできていてトマト味なので、2歳のジュリアンは好んでそれをたべている。大人には少しワインを入れて煮たりしているので、とても評判の料理だ。

目の前のフローレも初めてだったようで、最初はおそろおそろ口にする。しかし、食べた瞬間に顔が綻びたので口にあったようだ。

他の料理より先にそちらを完食される。

お食事を楽しみながら、ヤトレイが話題の一環という感じでガイヤに話かけてきた。

「しかし評判のレッドスターが容姿だけでなく、中身までこのように愛情あふれる方とは正直思いませんでした。本当にすばらしい令嬢ですね」

「いえ。さきほどのように無作法なことをしてしまうほど、世間知らずでお恥ずかしい限りです」

兄は即答をする。その言葉の早さにサラサは喉をつまったような錯覚に陥る。

やはり不機嫌の理由は、ジュリアンと同席させたことのような

殿下が帰ったと同時に倒れるふりをして、部屋に閉じこもろうかしら……って通用しないですね。

「実は王族の教育者を束ねている私から、一つお願いがあるのですか？」

な、なぜかしら。警戒音が頭に鳴り響きますわ……。

サラサはヤトレイの次の言葉を警戒心一杯で待つ。

「ぜひサラサ嬢にこちらのフローレ様の教育係を頼みたいのです」

え？わたしがフローレ様の？

サラサは思いもよらない提案に思わずヤトレイを見てしまう。すると、しっかりと視線があって微笑まれる。

どうしてかしら。とっても魅力的な微笑みなのに、サラサにとっては獣を捕獲する網のようにしか見えない。

「それはどのような内容をサラサから学ばれるとおっしゃるのでしょうか？ 恥ずかしい話、このサラサが王女であられるフローレ様に、教えることができることは何もございませんが」

ガイヤが唐突な提案に対して、冷静にヤトレイに解答を求める。だが、ヤトレイはサラサが恥ずかしくなるほど、盛大に褒めてくれる。

「ご謙遜を。先日の舞踏にしても、作法にしても、貴婦人としてのたち振る舞いも、サラサ嬢以上の令嬢はめったにお会いしたことはないですよ」

さらには今まで静観していたソージュール殿下まで口を開く。

「だが、そういうのは他の教師でも事足りる。私がサラサにお願いしたのは、一般常識と彼女の息抜きだな。それでも王族の姫として過密スケジュールでそういうものを叩きこまれている。しかし、それはただの知識でしかないからな。なまじ王宮から出ることがないために、さきほどのジュリアンのように自分より小さい子知らないなどということになる。だから王宮から外に出る口実を与えてほしいのだ。こちらの領地は王宮からそう離れていないのに、自然もあふれているからいい勉強になるだろう」

なるほど。たしかに小さな子を知らないなんて可哀想すぎる。

サラサにしたら殿下とはちがって、フローレ王女とはお近づきに

なりたいたいと言う気持ちもあるので、嬉しい申し出である。

でも、わたし自身が王女に好かれていないから無理ですわ……。

顔見ただけで逃げられたことを思い出して、そのことが不可能であるとすぐに諦めた。

「こちらとしては出来る限りのことをさせて頂きたいと思いますが、フローレ様には息抜きどころか苦痛の時間になってしまいますわ。先日ようになってしまったのも私がフローレ様に近づこうとしてしまったせいですし……」

「違いますわ！前はたしかに、逃げてしまいましたけど、今は……。私はサラサにお願いしたいですわ」

え！こんな可愛らしいフローレ様が、怖がらせてしまう顔をしたこのサラサで良いと言って下さるの？

サラサはフローレの言葉に一瞬、令嬢の仮面を外して、素で驚いた顔を小さな王女に向ける。

フローレは顔を下向けているために表情がわからない。でも、真っ赤になった顔を耳をみれば恥ずかしくて照れているのが一目瞭然だ。

その姿が可愛らしくて、思わず返事を返してしまう。

「わたくしでよろしければ、ぜひ！」

サラサがそう言うのと、聞いたこともないようなほど低音なつぶやきがかすかに耳に入る。一瞬幻聴かと思えるほど小さなそれ。

「やられましたね……」

そのつぶやきは幸いサラサと、つぶやきを発したガイヤにしか聞  
きとることはできなかった。

24・わたくしでよろしければ、ぜひ！（上）（後書き）

小さな子には眼がないサラサ……。次回はガイヤの怒りかな  
（笑）

うちの子も2歳。ジュリアン以上に言うことを聞きません。魔の  
2歳児です。



## 25・わたくしでよろしければ、ぜひ！（下）

サラサは横からなんとも言えない重圧を、肌でビシビシと感じ取っていた。

お・お兄様が本気で怒っている・・・。

そのオーラに圧されながらも、貴婦人の仮面を必死にかぶりつけてお食事を続ける。

眼の前では仮面をかぶった魔物たちの、うすら寒い会話が続いているが耳に入れど、頭に入ってこない。

「これ以上この妹のことで世間を騒がせるわけにはいきません。ただでさえ、ソージュール様の舞踏練習のお相手という大変過分なお役目を頂きました。そのうえで、フローレさまの教育係の1人となれば王家がわが公爵家を贖済されていると、あらぬ推測をするものも現れるでしょう。サラサにはあまりにも過ぎる申し出だと思われます」

非の打ちどころのない笑顔の仮面をかぶったガイヤが殿下に辞退の申し出を言うが、殿下だけでなくヤトレイまでそれを真つ向から否定する。

「私もフローレも王族と言うだけで、王位を継承するわけではない。兄上が王位を継承しお世継ぎが誕生したら、私も一臣下になるだけだ。フローレもどこに嫁ぐことになるか分からないが、いまの立場はそれまでのものなのだから、なんの心配もないと思うが？」

「そうですね。アルンバルト公爵令嬢であるサラサ嬢ならばなにか心配はないでしょう」

ガイヤにしても、こうなると断ることは難しいこともわかってい  
る。王族の総教育係であるヤトレイが是非といい、本人のフローレ  
王女までサラサを望んでいるのだ。ましてやフローレ王女がはるば  
るこちらに足を運ばれるとまで言われているのだ。

だが、サラサをこれ以上王家に近づけたくないガイヤとしては、  
悪あがきと分かっていても言わずにいられなかった。

当の本人であるサラサはただ、大人しく聞いているという姿勢を  
保ち続けていた。

そんなサラサにわざわざ殿下はもう一度言質をとる。

「サラサ。ぜひともフローレの為に引き受けてほしい」

殿下から直々に言われてしまったてはサラサの意思で断ることはで  
きない。兄のガイヤでも無理だったのだから。

それに・・・と眼の前の王女を見る。

小さな王女は食事を楽しみながらも、こちらをちらりちらりと窺  
っている。

なんの心境の変化があつたのかしら？フローレ様の私を見る眼か  
ら怯えが無くなったわ。

サラサは王女の心変わりが分からなくて頭をひねる。

「・・・わたくしで本当によろしいのでしょうか？フローレ様」

まだ怖いと思われているなら、あえて我慢して頂こうとは思わな  
い。だから殿下に返事する前に確認することにした。

フローレは手を止めてこちらをジッと見つめながら何かを言おう  
としたが、言葉にならなかったようで最終的に頭をこくりと一つ下

げることでは意思表示する。

「フロアレ様が異存がないのであれば、わたくしは僭越ながらその大役を引き受けさせて頂きます」

そう答える他にサラサに術はなかった。

殿下の方に頭をさげるサラサに合わせて、ガイヤも同じように首を垂れる。ガイヤもサラサにだけ分かる機嫌の悪さを隠しつつ、臣下の礼をとったのだ。

これでこの話題は終了となる。

やがて食事が進み、話題が領地についてに移った。

「さすがにこの国の第一等貴族のアルンバルト公爵家の屋敷だな。こうして訪問できて思わず役得だった。怪我をしてしまったサラサ嬢には申し訳ないが・・・」

「ありがとうございます。王宮と違って田舎で自然しかございませんが、そう言ってくださると助かります。サラサの怪我については幸い、支障の残るものではございませんでしたし、お気になさらないでください」

殿下とガイヤがしばらくこの領地についての様々な話を続けていたが、話の流れでサラサの怪我のことになる。

すると、ヤトレイがすこし軽い口調でこう言う。

「だが、あれでは傷が残ってしまうでしょう。この国が誇るレッドスターに傷を負わしてしまったとなると、サラサ嬢の羨望者たちに闇討ちにされるかもしれませんね。殿下やわたしが」

闇討ち。

他は知らないけど、サラサ至上主義を自他ともに認めているディ

ランならするかもしれない。だが、それはサラサが望めばである。サラサがそれを望まないことをよく知っている彼はしないだろう。すくなくてもサラサにばれる方法では。

サラサは扇を口に当てて乾いた笑いをしながらそれを否定した。

「御冗談を。それに、わたくしはこの傷をあえて表にさらけ出すつもりはございませんわ。幸い、ドレスなり手袋で隠すことができる場所です。つまりはここにいるみなさんが、あの出来事をあえて公表しなければなんの心配もいらなくなります」

大事にしないでくださいますよね？

と、脅しを含んだ口調でそう言う。眼も笑っていないサラサの微笑みは、威圧感がすさまじく、彼女の内面を知らないものはびびって固まってしまいそうになるほどのモノである。

だが、ヤトレイはそれを平然と受け止めてサラサに優しい微笑みを投げ返していた。

「それはよかったです。こちらとしても公表するわけにはいきませんから。サラサ嬢の勇姿を公で称えることができないのはたいへん申し訳ないですが」

いらないます！まったくもって必要ありません。

言われた途端に、サラサの頭の中でそうつぶやく声が木霊する。こだま

「気になさらないでくださいませ。わたくしはただたま恵輝石を持っていた為に、大惨事になることを防げただけでございます。ですから、称賛を受けるほどのことではないのですわ」

こんな感じでサラサにとってまったくいいほど、楽しくないひと時は過ぎていった。

お食事がおわると、殿下とヤトレイと王女は早々とアルンバルト公爵領を後にした。

「では、フローレ王女のスケジュールに週1回ほど、こちらへの訪問を加えさせていただきますね」

とは、ヤトレイがガイヤとサラサに残していた言葉だ。

3人が乗る馬車が見えないところまで遠ざかったところで、隣からのドロドロとしたオーラが一気に膨張する。

ま、まずいわ！

「お・・・お兄様。ちょっと私、めまい・・・」

「サラサ。お話を聞かせて頂きましょうか」

「あ・・・はい」

仮病をつかって自室にこもろうとしたサラサの言葉を、地を這うような低音のガイヤの声がさえぎる。

「本当にいろいろと話をしなければいけないですからね。ジュリアンには今日は自分の部屋でナンシーとお食事をしてもらうことにしましょう」

ガイヤはそう言うとサラサに背を向けて、さっさと自分の執務室である部屋へと足を運んだ。

説教は夕餉までかかるのですか……。

早々に逃がしてくれないことを悟って、サラサは額に手をあてて大きなため息を吐いた。

ああ……足が重い。ジュリアン。お願い。いまこそ、お兄様の執務室に現れてサラサを救い出して！

などと、現実逃避なことを考えながら、サラサはガイヤの後を歩いて行った。

26・え？本気で？

ちくちくちく……。

時計の時間を刻む音がひどく大きく聞こえてくる。

ちくちくちく……。

どうしたのかしら……。どうしてお兄様は窓を眺めたまま何もおっしゃらないの……。逆にこの沈黙がおそろしいですね。

サラサは殿下一行が帰りガイヤの執務室に強制連行されてから、いろいろと問い詰められるだろうと推測していた。しかしそれを裏切って、兄は何一つ言葉を発しない。

サラサには手振りで長椅子に座るように指示をして、自分も椅子に腰かけたまま窓を眺めている。

さきほど身の危険を感じるほどの不穏さはすっかり身を潜めてはいるが、機嫌の悪さは相変わらずでサラサに見せる横顔の眉間はひどく皺が寄っていた。

何もお話がないのなら、部屋に戻ってもいいかしら……。でも、声かけることすらできない雰囲気だわ。

ため息をつきたくても、この緊張漂う場の雰囲気を崩壊しそうで出来ない。まるで獣から身を隠すように息すら潜めて兄の様子を窺っていた。

そこに観察対象の口がおもむろに言葉を発する。

「サラサ」

「はい！」

兄に呼ばれてサラサは思わず背筋をピンっとのばして大きく返事した。

「ディランと婚約しますか？」

え？

予期しないことをいきなり言われて思わず頭が真っ白になる。兄からディランが何を言っても気にしないようにと言われることはあっても、それと真逆の求婚を受け入れるよう助言されたことは今まで皆無である。

だから思わず本気で驚き、兄の顔をじっと凝視してしまった。

「サラサ、今何歳になりましたか？」

「１７でございます」

分かっているだろう年を聞かれて、嫌な予感が走る。ガイヤは予想通りの言葉をつづけた。

「この国の結婚適齢期は１６から１９までです。今までは黙っていましたがそろそろ本格的に嫁ぎ先を考えなければいけません」

やはり、その話題である。

ジュリアンのことをあげて断ろうとサラサが口を開いたが、先に先手を打たれてしまった。

「今までジュリアンのことでサラサに負担をかけてしまってますみません。正直、セイラが亡くなってサラサが母親代わりを務めてくれ



たおかげで、ジュリアンも寂しい思いをせずに済みました。ですが、このままではサラサの適齢期が過ぎてしまいます。もう2歳になりましたし、ナンシーたちもよくやってくれているのでジュリアンから解放されるべきです」

ああ。とうとうこの発言をされてしまった。

サラサは常日頃、ガイヤの口からこのお役御免の言葉が出るのを恐れていた。当主でジュリアンの父であるガイヤからそう言われてしまうと受け入れるのが筋だからだ。

それでもサラサにはガイヤの言うとおりににはできない理由があった。

「お兄様。わたしが結婚について真剣に考えないのは何もジュリアンの為だけではございません。わたしの力のせいです」

あえて加護者であるとは言わない。だれかに聞かれる危険があるし、言わなくてもガイヤには通じているからだ。

加護のことをキラから教えてもらった時のことを思い出した。

キラに会ったびに加護を解いて欲しい頼んでいる。しかし、キラはまったくその意向を聞きいれてくれない。あまりにも聞いてくれないのでその理由を聞くと相変わらず楽しそうにそれを教えてくれた。

『俺が解いてもビュアスかハヤトあたりが率先して加護を与えにくるぞ』

ビュアスとは愛の女神でハヤトとは守護の女神である。

『サラサは生まれつき神に愛されやすい人間なんだよ。ごく稀にそういう人間が生まれてくる。大抵その人間は何かしらの加護者になっているんだ。現にビュアスはサラサに眼を付けていて15になったら加護しようとしてたしな』

初耳であることを聞いてサラサは驚きを隠せず、ただただ目の前の男神を見上げることしかできなかった。

『風に加護よりはビュアス様の加護のほうが・・・』

思わずサラサは不遜にもそうつぶやいてしまった。風よりは愛の方が無難な気がしたからだ。しかし、キラは小さく微笑みを口元に浮かべて爆弾発言をする。

『傾国の女になりたい？ビュアスの加護は強烈だから間違いなく国中・・・いや世界中の男から求婚される羽目になるぞ。ついでに言っとくがハヤトの加護だと間違いなく、国の守り巫女として奉られる羽目になるな』

だから一番無難なのは俺の風に加護なんだよ。

あえて口に出さないがそう言う言葉が聞こえそうな口調。

サラサはキラにそこまで言われて、10回目の返却願いはきれいさっぱりと却下されたのである。

「嫁いだ後ではその者に迷惑をかける羽目になるでしょう」

「だからこそ、力を知っているディランのところにすればと思いますか？」

サラサの言葉にガイヤはもつともな意見を出してくる。

たしかにディランは知っている。それでも頻繁に求婚してきてくれている。

しかし、サラサはその言葉をこれっぽっちも本気だと受け止めてなかった。

「お兄様。ディランの御冗談を本気で受け止めないでください」

小さく微笑みながらそういうサラサに、ガイヤは愕然としてしまう。いかなるときも冷静で恵敏な判断を下すと評判なアルンバルト現公爵には珍しく、思わず聞き返してしまう。

「はい？」

そう聞くガイヤの表情は眼を丸くし、信じられないモノを見るような目つきでサラサを見ている。

サラサは見たこともないほど面を食らっている兄の表情に戸惑いを見せる。

「ディランのあれはただの冗談ですわ。わたしのこと妹のように思ってくれているから、牽制の意味で人前でも口説くようなことを言っているのでしょうか？」

サラサがそう言うときガイヤはより一層虚をつかれたような表情を

深める。

数瞬の間、ガイアはサラサを何も言わずに凝視していた。だが、すぐにガイアがそばにいるサラサにも聞こえないほどの声でぶつぶつ呟いている。

「まさか、本気で……ここま……ディランが哀れすぎ……いや……洗脳……私が悪いのか……」

「お兄様？」

ガイアが顔を青ざめながら呟く声が聞きとれなくて、サラサは聞き返す。すると、ガイアはハッと我に返ってサラサを振り返って、一つ大きなため息について慎重に口を開いた。

「サラサ。ディランは本気ですよ」

「え……」

今度はサラサのほうで眼を丸くしてガイアを見上げた。兄の顔は先ほどと違って冷静でひどく真剣だ。

「まさか……。だってお兄様が聞き流したらいいと……」

「サラサが幼かったので気にしないようにと、私が言っていたのが悪かったのですね。でも、彼は昔から真剣にサラサに求婚しているですよ」

サラサにとっては寝耳に水な事をいきなり聞かされて頭が真っ白になる。

ディランが本気？

ありえないと思いたい。だが、兄の真剣な表情がそれが真実であ

ると何よりも物語っている。

サラサとしてもディランの求婚に対して本気なのかなと考えることも多かった。しかし、サラサ自身が今の関係でいることを無意識に望んでいたのだ。だからあえて深く考えることもなかった。だが、兄からこう告げられてしまうと今までのように逃げている訳にはいかない。

それでもいますぐにそれについて、ガイヤに告げることができるとは何一つなかった。

いままで考えることすら避けていた内容をいきなり目の前に突きつけられても、どう処理したらいいか分からないのだ。今ガイヤに告げれるとしたら保留にしてほしいという旨だけである。

その内容すら言葉を口にできないサラサの心情を、長い付き合いのある兄はきちんと察していてほんつとサラサの頭に手を置いて、軽く撫でる。

「今すぐに返事はいりません。ですがそろそろ本気で彼の気持ちを受け止めてあげなさい。いつまでもこのままだとあまりにもディランにとって酷ですから。焦る必要はありませんが、ソージュール殿下とフローレ王女のことがあります。もし受け入れる気持ちになるのであれば、彼らから遠ざかる最適の理由になるでしょう。ですが、無理して受け入れようとしなくてください。サラサにはきちんと気持ちを持って、この公爵家から嫁いでいってほしいですから」

本来なら当主として婚約することを命じるのもガイヤには可能である。そもそも勝手に嫁ぎ先を見つけて、顔もろくにしらないまま嫁がされることもあり得ない話ではない。

それなのにサラサの意思を尊重してくれる兄の優しさに、おのずと感謝の気持ちがいってくる。

「ありがとうございます。ディランのことは少し真剣に考えてみま

す。あ……あと、先ほどはジュリアンを同席したり、勝手にフローレ様のお相手をお受けしたりして申し訳ございません」

サラサはお礼と共に先手必勝とばかりに、先ほどのことの失態をわびることにした。するとガイヤは思い出したかのように大きなため息をついてから、一気に不機嫌な表情になった。

「まったくです。いくら殿下たちがあれほど早く姿を見せたからと言ってあの失態はだめでしょう。よりもよってジュリアンを同席させるなど何を考えているのですか？あまりにも無礼に値します。それに、調子に乗って歌まで歌うなんて。私とディランが何のためにあの悪い評判を消さずに、そのままにしているのか分かっていますか？サラサとしても例の件を公にしたくないでしょう。それなのにフローレ王女の教育係を受けるなど……。貴女は認識が甘すぎます。そもそも……」

ガイヤはサラサが口をはさむ隙もあたえずに、長々と説教をし始める。

墓穴を掘ったサラサは結局のところ、予測通り夕餉すらガイヤの執務室でとらされる。楽しいはず夕餉の間もガイヤの説教が続き、ひどく味気ないものになった。

そしてガイヤの執務室から解放され慌ててジュリアンの部屋に行くと、部屋の主はもうすでにベッドの中で夢の住人になっていた。サラサは疲労困憊になった自分の心を癒すためにそのベッドに近づく。

起こさないように気配りしながらもその無邪気な寝顔に頬を寄せる。

いろいろと考えなくてはいけないことはわかっています。でも、今日だけは許して。お兄様のお小言でもう頭が動かないの。

サラサは頭の中なのに必死に言い訳を考えつつ、ジュリアンの寝顔を長い間眺めて癒されていた。

26・え？本気で？（後書き）

サラサが予定より天然鈍感娘になってしまいました・・・。



## 27・笑顔という武器（前書き）

久々の更新ですみません。少し短いです。

## 27・笑顔という武器

ああ。いつも以上に何やら視線を感じるわ。

サラサは扇で少し口元を隠しながら、小さなため息をついた。フローレ王女の家庭教師を引き受けたモノの正式な依頼が当主であるガイヤまで届いていないために、まだ一度も実現していない。そうしているうちに、ソージュール王子のお披露目の夜会の日が来てしまった。

もちろん欠席するわけにもいかずに、ガイヤと共に馬車に乗り彼にエスコートされながら会場に入った瞬間、無数の視線がサラサの肌に刺さった。

今までの社交の場でも、色々な種類の視線を受けていた。

男性からは傾慕や称賛、憧憬の視線、女性からは反感、軽蔑、警戒、羨望の視線。

見事に性別で分かれている視線の種類。

その中で、前回よりきつく感じるのは女性からの反感、軽蔑の視線である。

その理由をサラサはすどく読み取っていた。

王妃様ね……。

あのお茶会の一件でやはり社交界の女性たちにいろいろと告げられてしまったようだ。

優秀な第二後継者のソージュール王子に近づいて、色目を使っている悪女とか言われているかしら……。ますます女のお友達作れないわね。

ほぼ諦めの境地に達しているものの、やはり友達がほしいサラサにとつてはこの謂れのない悪評は悲しいものである。

そんな噂に惑わされるようなお友達は別に必要ないですね。わたしにはジュリアンがいるんだから。

と、自分で自分をなぐさめてから強く感じる視線の元に顔をゆつくりと向ける。

視線を合わせてしまった数人の妙齡な婦人方が、遠目でもわかるほどビクンつと身体を震わせた。

わずかだけ顔を傾けてそちらに微笑む。

彼女たちから一切視線を外さずに凝視しながらだ。

すると、彼女たちは顔を真つ青にさせ慌てて扇で顔を隠したり、下向いたり、こちらに背を向けたりしてしまった。

ガイヤの腕に手を添えていると彼はある方向へエスコートしてきた。

その方向には幼馴染みであるディランの姿がある。

長いストレートの銀色の髪を珍しく横に編みこんでいる。瞳の色である青より濃い紺の首の詰まった騎士の正装を着ていて、いつも以上に周りの女性たちの視線を独り占めに使っていた。

えっ。お兄様。いきなりディランのところにいくのですか……。こ、心の準備が……。

サラサは心の中ではいつになくあせりを見せていたが、隣のエスコートの邪魔をするわけにもいかずに促がされるまま足をすすめる。ディランもこちらに気が付いており、楽しそうな目つきでその場で待っていた。

「サラサ。今宵は一段と美しい姿だね。そのドレスは斬新的だけどサラサの魅力をこれでもかと引き立ててくれているね」

ディランはそう言うとき、ガイヤと腕を組んだままのサラサの前ですと腰をおろす。サラサはマナーである左手をそつとディランの前に出すと、ディランはその手の項にそつと唇をよせた。

こういう場での挨拶なので、一瞬で終わる。

その隣で、ガイヤもディランの隣にいた貴婦人に同じように挨拶をしていた。サラサは今まで死角で見えなかったために、その時はじめてその彼女がよく知っている人物であることに気がついた。

「お久しぶりでございます、ウイデリー公爵夫人。今宵、貴女の麗しいお姿を見ることができるとは思ってもいませんでした。お体の調子はもうよろしいのですか？」

銀色の髪を美しく編みアップしている妙齡の美女が、ガイヤに手を取られながら小さく笑みを浮かべている。

その笑みも髪質も隣のディランのものにそっくりである。いや、彼女がディランに酷似しているのではなくディランが産みの親である彼女に酷似しているのだ。

切れ長の目じりには年波のせいで数本の皺が寄っているが、それでも50歳間近とは思えない色気と体型を維持している。

ガイヤがそう声かけたように、昔は社交界の華とまで言われていた彼女は、最近はめつきり社交界に姿を現すことがなくなっていた。ここ3年ほど体調を崩され別荘で静養されていたからだ。そして2ヶ月前ほどに王都に戻ってきた。

「本当にお久しぶりですわね、アルンバルト公爵様。いつまでも屋敷で籠っておくほうが健康に悪いですからね。ディランとともに参加してみたのですわ」

ウイデリー公爵夫人は小さな笑い声を含ませながらそう言う。  
サラサにとって数少ない交友ある同性で、幼いころから可愛がってもらっていた彼女と思いがけない場所で会うことができて心の中で喜びが広がる。

「イルージュ様。お久しぶりでございます」

「サラサちゃん。本当に美しくなったわね。幼いころからとても可愛らしかったけど、今は本当に大きな薔薇が咲いたような美しさだわ。レッドスターの名が本当にピッタリね。お見舞いに来てくれたときもそう思ったけれど、やはりドレスアップしたらもっとそれを感じるわ」

「イルおばさま・・・」

手放しに褒められて恥ずかしさに、サラサは思わず幼い時からの呼び名を口にしてしまう。

それに気がついて慌てて扇で口を隠した。

こういう場では常に緊張して笑顔の仮面をかぶっているのに、懐かしく大好きな公爵夫人の顔を見てそれがはがれてしまったのだ。

「すみません、ついうれしくて。こうした場に戻ってこれるほど回復されたのですね」

「ありがとう。こうして戻ってきたからには安心してね」

ウイデリー公爵夫人は前以上に優しい笑顔でサラサに向かってそう言い切ってくれた。その瞳はやる気に満ち溢れていて生気を強く感じる。

サラサはなにを安心するのか分からなかったけれど、たしかに悪意ばかり向けてくるこの場でこの人の存在はともありがたかった。それにこの人が本当に健康になって戻ってきてくれたことを実感で

きた。

いつもの社交界特製の仮面をすっぱり脱ぎ捨てて楽しそうに微笑むサラサを見ながら、周りにいる者はそれぞれ色々な思いを抱えていた。

まあ……。本当に可愛らしい。どうしてこんな可愛い子が悪女だなんて言われるのかしら。わたくしが来たからにはこれからはそんな謂れもない評判を崩してあげるわ。たとえば王妃様が敵でもね。

色々と聞いてくるサラサに笑顔で答えながら、内心で強く決心していたのは現ウイデリー公爵当主の妻であるイルージュ・ウイデリー。

これは、対策を練り直さないとイケませんね。夫人の存在はともありがたいけれど、それに伴ってサラサの危機感が大いに減っています。あれほど警戒を解かないようにと言ったはずなのに。

終始微笑みを浮かべていながら、心の中で激しく頭を抱えているのは兄のガイヤ。

ああっ！そんな可愛い顔をしたらダメじゃないか！いつもの隙のない笑顔に戻さないと。母上と会ったからってそこまで豹変したら本気で君を狙ってくる奴が増えてしまうぞ。今でさえ、牽制や恋敵を潰すのに手を焼いているのに。

動揺しながらも、できるかぎりサラサの笑顔を身で隠そうとしているのは幼馴染みのディラン。

そしてそんな三人の身体の間隙から偶然にも、サラサの満開の笑

顔を見た令嬢は信じられないモノを見たかのように無作法にも口を開けたまま立ちすくんでいた。

同じく目撃してしまった年配の男性数人も、まるで魂が抜かれたようにその場で硬直していた。

## 28 ダスレン（前書き）

難産でした・・・。



## 28 ダスレン

「では、ウイデリー公爵夫人。私はまだ挨拶が出来ていない方々も多いのでこのへんで失礼いたします。申し訳ございませんが、サラサをお願ひできますでしょうか？」

しばらく、サラサと公爵夫人の会話を聞いていたガイヤが程よい区切りを見極めてそう切り出してくる。

「あら。ごめんなさい。多忙なアルンバルト公爵の足を止めてしまいましたわね。サラサのことはわたくしにお任せなさい」

力強くそういう公爵夫人の返事にガイヤは軽く頭を下げながら、サラサに顔を近づけてそつと耳打ちをしてくる。

「サラサ。そろそろ夜会の主役が参られますよ。気を引き締めなさい」

サラサはそれを聞いてはつと我に返る。

ついイルおばさまの回復に我を忘れてしまったけれども、この夜会はあのソージュール殿下の誕生と社交界デビューを祝うものであった。

おそらく、王妃の次に彼がダンスを申し込むのはサラサになるだろうとガイヤが言っていた。サラサしたら全力でご遠慮申し上げたいものだが、そうなる可能性も確かにあるだろう。

私に構わずに他の令嬢たちと楽しく踊って下さればこちらとしてもありがたいのですけれどね……。

サラサはそんなことを考えつつも、いつも通りの隙を見せない笑顔の仮面を被りなおす。

そんなサラサの変貌ぶりを目撃してウイデリー公爵夫人はなにやら言いたげな表情をうかべたが、扇を広げて口元を隠しつつ小さくため息を付くだけにとどまった。

ガイヤはサラサの様子を確認してから、ディランになにやら耳打ちをし人が溢れる会場の中央へ足を進めていった。

残されたサラサはディランにガイヤから何を言われたのか聞くベきか思案していたが、結論に達する前に進行の声がかかる。

「静粛に！」

絶え間なく流れていた楽師たちの素晴らしい演奏が止まったかと思うと、会場の前の方より男性の声が聞えていた。

それを聞いて数百人の談話の声もピタリと止まり、その場が静まり返る。

「これよりオリエンデーン国王、レイデイン王様より今宵の挨拶がございます」

その声を合図に、正面の上段の奥にある扉が仰々しい音を立てながらゆっくりと開く。

会場のほとんどの視線がその開いた扉から姿を現した一人の壮年の男性に集まる。

黒と白の混ざった灰色の短い髪と、口を覆うようにある豊かな髭。目じりから口元までしっかりと皺が刻まれているにも関わらず、その灰褐色の色をした瞳の眼光、立派な体躯が微塵にも老いを感じさせるものでもなく、それでいて威風のようなものを見るもの全てに与えていた。

まさに王にふさわしい風格をしている。

事実、先王で現国王の兄であつた故ヨハベ王の急遽により即位してから18年。一度も攻められることもなく攻めるものとなき、国の内政に力を注ぎ、公明正大な態度で国を繁栄させてきた。

その手腕は国外にも響き渡るほどのもので、まさに名君と呼ぶに相応しいお方であると誰もが認めている。

彼が会場に設置されている特別な椅子の前に付くと、一同はその方向に小さく頭を下げる。

サラサも扇に手を当てながら頭を下げていた。

レイデイン王は会場を軽く見渡してから挨拶をする。

「今宵は忙しい中これほどの者たちが我が愛すべき息子のために、集まってくれたことを心から感謝を述べる。知つての通り、我が二番目の息子であるソージュケルが先日、晴れて15歳を迎えることができた。上の息子の王子と共にこの国を支える礎とならんことを願いたい」

低くてよく通る声で今回の夜会の趣旨を説明し終わると進行の者を一瞥する。

「ソージュケル王子が参られます」

その声を合図にもう一度、扉が開く。金糸で柄を刺繍された白が主体の正装を着ている少年。グリーンにもブラウンにも見えるヘーゼルの瞳に輝く金色の髪。2週間ほどぶりのソージュケル王子である。前は襟ぐらいいで真っ直ぐに切りそろえられていた髪形だったのに、すこし襟足と横髪は残す形で短く切られていた。そのせいかぐつと大人に近づいた容姿になっている。もう数年を待たずに立派な青年となることは間違いないだろう。いや、もうすでに数名の令嬢はそんな王子の姿に見惚れていた。

ソージュケル王子がレイデイン王の御前まで足を運び、王に一礼

をした後会場のほうに身体を向ける。

「本日は私のためにこれほどの方が集まってくださり、ありがとうございます。おかげさまでこのように成人を迎えることができました。私は……」

ソージユケル王子が少しの間、礼やらこれからの抱負などを述べる。

それはこれからの自分自身の立場からできる最大限のことなど具体的にあげており、政治に直接関わりを持たないサラサであっても彼の聡明さをありありと実感できる内容であった。自分にとっては正直もう関わりを持ちたくない人物であっても、目の前の少年が次世代を背負う王子であることを誇りに思ってしまう。

ナーデル王子を見ていないからわからないけれど、この王子を次期王にという声があがるのも頷けるわね。現王妃の子なのはソージユケル王子なんだから余計に。

サラサはこの国の常識を思い出す。

ナーデル王子とソージユケル王子は異母兄弟である。どちらも王妃の子であり嫡子である。だが、ナーデル王子の母は故マデリー王妃である。つまり、今のイザベ王妃は2番目の王妃だ。フローレ王女もイザベ王妃の子である。

そのせいもあって、ナーデル王子でなくソージユケル王子を圧す声があるのだ。

お兄様は常に中立の立場を保っているのだから、どちらがなられても問題はないのでしょうかね。

サラサはガイヤがその継承争いに足を突っ込んでいないことを知

っている。だからサラサとしてもあくまでも傍観者でいる予定だった。例の王子の嫌がらせのような誘いがなければ。

今日の夜会が終われば、当分こんな会に参加しないのだから。ジュリアンと遊んだり、ジュリアンといっしょに寝たり、ジュリアンと出かけたり・・・そうだわ。フローレ様とも仲良くなるんだから。

そんな妄想に頭を動かしていると前の方ですこしざわめきが起こる。

え・・・。最初は王妃でしょ。なんでこちらに向かわれるの・・・。

内心で頭を抱えていながらも表情を変えずに口元に扇を当てながら、この事態を起こしている当事者が来るのを待つ。

サラサの眼の前で人が左右に分かれて道ができる。その道を先ほどまで演説をしていた少年が優雅に歩いてくる。

「サラサ嬢。どうか、私にダスレンの榮譽を下さい」

ソージュール王子はそう言いながらサラサに手を差し出してくる。ダスレンとは夜会や舞踏会で最初に踊ることを意味する。この国独自の呼び名だ。それはある逸話が元になっている。

逸話とは昔の王がある国の姫を見初めて初対面で一番にダンスを申し込んだ。二人はお互いに心を奪われるが、姫はその当時たった一人の直系の王の子供であつたために求婚を受け入れられなかった。その時の姫の言葉が『貴方様にこの愛を捧げることではできません。わたくしには王族として責があります。ですが、わたくしの踊りのパートナーは永遠に貴方です。今度、たとえ他の者に嫁ぐことにな

りましょうが、他の誰とも踊らないことを誓いましょう』である。その誓いを守り、国に帰った姫は頑なに踊りを拒んだ。それを知った父王は王妃の奇跡的な懐妊を機に、姫をこの国に嫁がせることを決意した。その姫の名前がダスレン妃である。

この国の者であれば誰もが知っている有名な話で、舞踏会などで『ダスレンの榮譽』といって最初にダンスを申し込むのが、慣例になっていた。昔は求愛も兼ねている節があったが、最近ではその者にとって一番親しみを感じている者に申し込むことになっている。だからたいていは婚約者で、いなければ身内に申し込むものだ。

そんな訳で最初に踊るのは王妃であろうと思っていたのだが、よく考えると王妃はこの会場に来られていなかった。むろん、まだ幼いフローレ王女もない。

「光栄でございます」

王妃さま。なぜいらつしやらないの……。ダスレンで踊ることになれば否応なしに皆様の注目を浴びてしまうのに……。

サラサは内心では悲鳴を上げながらも、薄く微笑みを浮かべ軽く腰を降ろしてから、ソージュール王子の手を取る。

二人の様子を見ながら周りの貴族たちが二人を中心に円を描くように離れていった。

二人の手が触れ合ったのを合図に今まで停止していた楽曲がなめらかな始まりで流れ出す。そのリズムに合わせてサラサは王子の肩に手を当てて踊り出す。王子も練習の時以上にすばらしいリードをする。

通常であれば他の貴族たちも合わせるように踊り出すものだが、だれもが二人の踊りに心を奪われるように見続けた。

王子の初めてでありながらすばらしい踊る様に令嬢たちが感嘆のため息を吐く。と、同時にその相手であるサラサを羨望の眼差しで眺めていた。

さらに、あまりこうした場に出席しない上に、めったに踊ることのないレッドスターの大輪のようなサラサの踊りを堪能しようと貴族たちもあえて自ら踊ろうとはしなかった。

やはりソージュール王子、お上手だね。でも、ここで目立つほどすばらしい踊りしなくていいのに……。おかげでだれも踊らないでこちらを見ているので色々な視線が痛すぎるわ。さっさと終わって。どうしてよりによって長い『ゼン川のほとり』なのよ？『レンシュウ』や『星』なら短いのに……。

サラサは踊りつつ笑顔の仮面を王子に向けながら、心の中で楽師に八つ当たりをしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4587n/>

---

笑う子も泣く公爵令嬢

2011年9月9日08時45分発行